

上町遺跡第28～33・37次  
—個人住宅に伴う発掘調査報告書—

2016

飛驒市教育委員会



かんまち

# 上町遺跡第28～33・37次

—個人住宅に伴う発掘調査報告書—

2016

飛驒市教育委員会



## 序

岐阜県の最北端に位置する飛騨市は、北は富山市、南東は高山市、西は白川村に接し、面積792.31km<sup>2</sup>、内、森林が約92%を占める山間地域に、4つの町から成る自治体として、平成28年3月現在、約25,500人の人々が生活しています。

この4町において最も多くの人口を擁する古川町は、町の西寄りを清流宮川が貫流し、その周囲に形成されている市街地には、古墳や古代寺院・古代遺跡が数多く分布しています。これは、現高山市国府町とともに古代飛騨の中心であったことの事実を裏付けるものです。

さて、本報告書は、個人住宅の新築工事による遺構への影響を確認するために2012年から2014年にかけて実施した、上町遺跡第29次・30次、33次、37次における調査をまとめたものです。結果、第29次・第30次では古代の堅穴建物4軒等が、第33次では堀立柱建物等が、第37次では8世紀後半の堅穴建物や堀立柱建物等がそれぞれ発見されました。上町遺跡における8世紀後半以降の集落は、分散的かつ小規模なものが多く、短期型の集落が主流であったと考えられ、いわゆる8世紀前半頃に中心部で営まれた集落とは異なり、8世紀後半以降に郡衙機能（現在の役所機能）が他所へ移動した後、新たに営まれるようになった集落として、貴重な発見となりました。

現存する遺跡としては、飛騨はもとより県内で最大級の遺跡として評価されている上町遺跡の全容が、継続的な調査によって徐々に明らかになることは、先人の生きた足跡としての古代のロマンを紐解き、今後の考古学研究の礎として、さらには文化財保護への関心を高めるための一助になることは間違ひありません。

終わりに、発掘調査の実施に対しまして、深いご理解とご協力をいただいた住宅新築工事当事者及び周辺地域の皆様、そして、本報告書の作成も含めて多大なるご指導・ご支援を賜りました関係諸機関・関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成28年3月

岐阜県飛騨市教育委員会

教育長 山本 幸一

## 例　言

- 1 本書は、岐阜県飛騨市古川町上町・南成町・大野町に所在する上町遺跡（岐阜県遺跡番号 21217-06433）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本調査は個人住宅の造成、新築及び建替工事に伴うものであり、飛騨市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査及び一次整理作業は、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金（史市内遺跡等）を得て 2013～2014（平成 25～26）年度に実施し、二次整理作業は 2015（平成 27）年度に市単独事業として実施した。
- 4 本書の執筆は三好清超（飛騨市役所総務部税課）、片山博道（株式会社上智岐阜支店）、清水則久（飛騨市教育委員会）が行った。執筆分担は以下の通りである。また、編集は清水の指示及び三好の助言のもと、片山が行った。
  - 三好清超 第 1 章第 1 節 (2)・第 2 節、第 3 章第 1 節・第 2 節 (2)～(4)、第 3 節 (2)～(6)  
第 4 節 (2)～(6)、第 4 章、第 5 章第 2 節
  - 片山博道 第 2 章、第 3 章第 2 節 (1)・(5)、第 3 節 (1)・(7)、第 4 節 (1)・(7)・(8)、第 5 章第 1 節  
清水則久・三好清超 第 1 章第 1 節 (1)
- 5 工事立会における第 29 次調査の業務の一部は、株式会社玉川文化財研究所に委託して実施した。発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、測量、景観写真などの業務は、第 30 次・33 次調査を株式会社上智岐阜支店に、第 37 次調査を株式会社イビソク高山支店に委託して実施した。出土遺物の洗浄・注記などの一次整理作業は、第 30 次・33 次調査を株式会社上智岐阜支店に委託し、第 37 次調査を飛騨市教育委員会が実施した。また、二次整理作業における遺物実測、遺物の写真撮影などの業務は、株式会社上智岐阜支店に委託して実施した。
- 6 土壌分析については、株式会社上智岐阜支店とパリノ・サーヴェイ株式会社が実施し、その報告を第 4 章に掲載した。執筆は分析結果をもとに三好が行った。
- 7 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。
  - 新井紀彦 大宮次郎 尾野善裕 河合英夫 鈴木景二 田中清雄 戸田哲也 野村勝憲  
早川万年 三島誠 山口直幸 山田昌久 渡辺博人
- 8 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標第VII系を使用する。水準は東京湾平均海面（T.P.）である。
- 9 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2007『新版標準土色帳』（日本色研事業株式会社）による。
- 10 調査記録及び出土遺物は、飛騨市教育委員会で保管・活用している。

# 目 次

序・例言	
第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 試掘確認調査（第28・31・32次）の結果（第2-3図）	2
第2節 調査の方法と経過	5
(1) 調査の方法	5
(2) 発掘調査の経過	5
(3) 整理作業の経過	6
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査成果	11
第1節 層序	11
第2節 第29-30次調査	12
(1) 遺構・遺物の概要	12
(2) 坪穴建物	14
(3) 土坑	21
(4) 集積遺構	22
(5) 遺構外出土遺物	22
第3節 第33次調査	25
(1) 遺構・遺物の概要	25
(2) 坪穴建物	27
(3) 挖立柱建物	28
(4) 連結土坑状溝（土坑・溝）	31
(5) 溝	33
(6) 土坑	35
(7) 遺構外出土遺物	35
第4節 第37次調査	37
(1) 遺構・遺物の概要	37
(2) 坪穴建物	39
(3) 挖立柱建物	53
(4) 櫛列	54
(5) 土坑	55
(6) 溝	58
(7) 不明遺構	60
(8) 遺構外出土遺物	63
第4章 自然科学分析	69
第1節 はじめ	69
第2節 土層堆積分析の調査と方法	69
第3節 第30次調査での観察結果	69
第4節 第33次調査での観察結果	71
(1) 調査区壁の観察結果	71
(2) 遺構埋土の観察結果	72
第5節 まとめ	75
第5章 総括	77
第1節 出土遺物の検討	77
(1) 出土遺物の編年的位置付け	77
(2) 暗赤褐色と暗灰色の須恵器	80
(3) 須恵器胎土の混和材	81
(4) 壺の成形痕	81
(5) 黒書土器の検討	82
第2節 遺跡の様相	83
引用・参考文献	87
写真図版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図	上町遺跡位置図・大グリッド図	1	第33図	SI24 出土遺物図	49
第2図	第28～33・37次調査区配置図 ・グリッド設定図	3	第34図	SI40 平面・断面図、出土遺物図	51
第3図	試掘確認調査遺構図	4	第35図	SI43 平面図、出土遺物図	52
第4図	遺構平面・断面・堆積分類図	5	第36図	SI72 平面図、出土遺物図	53
第5図	調査地の周辺地形図と位置図	8	第37図	SB92 平面・断面図	54
第6図	調査地周辺の遺跡分布図	10	第38図	SA27 平面図	55
第7図	層序・柱状図	11	第39図	SK12 平面図、出土遺物図	55
第8図	第28～30次調査区全体図	13	第40図	SK33 平面図、出土遺物図	56
第9図	SI01 平面・断面図、出土遺物図	14	第41図	SK42 平面・断面図、出土遺物図	56
第10図	SI02 平面・断面図	15	第42図	SK44 平面図、出土遺物図	57
第11図	SI02 出土遺物図	16	第43図	SK69 平面図、出土遺物図	58
第12図	SI03・04 平面・断面図	17	第44図	SK75 平面図、出土遺物図	58
第13図	SI03・04 出土遺物図	19	第45図	SD41・67・68 平面図、出土遺物図	59
			第46図	SX30 平面図、出土遺物図	60
第14図	土坑平面・断面図	21	第47図	不明 2・3 平面図、出土遺物図	61
第15図	SX05 平面・断面図、出土遺物図	22	第48図	不明 5・6 平面図、出土遺物図	62
第16図	遺構外出土遺物図	23	第49図	遺構外出土遺物図	64
第17図	第32・33次調査区全体図	26	第50図	第30次調査地点の位置図	69
第18図	SI02 平面・断面図	27	第51図	第30次調査区の堆積層の 累重状況図	70
第19図	SI06 平面・断面図、出土遺物図	29		・東壁土層断面図	70
第20図	SB32 平面・断面図	30	第52図	第33次調査地点の位置図	72
第21図	連結土坑状溝(SD05-SK08) 平面・断面図、出土遺物図	32	第53図	第33次調査区の堆積層の 累重状況図	73
第22図	SD01 平面・断面図	33	第54図	第33次調査区の南壁土層断面図	74
第23図	SD07 平面・断面図	34	第55図	調査区周辺の等高線図	75
第24図	SK28 平面・断面図	35	第56図	焼物生産地の分布図	77
第25図	遺構外出土遺物図	35	第57図	出土遺物の編年図(1)	78
第26図	第31・37次調査区全体図	38	第58図	出土遺物の編年図(2)	79
第27図	SI01・03・04 平面・断面図	41	第59図	暗赤褐色と暗灰色の釉	81
第28図	SI01・03・04 出土遺物図	42	第60図	葉脈状当具痕	81
第29図	SI16 平面・断面図	44	第61図	上町遺跡と墨書き土器	82
第30図	SI16 出土遺物図	45	第62図	上町遺跡遺構配置図	84
第31図	SI23 平面・断面図	47	第63図	C地点と第28～30次調査区 の遺構変遷図	85
第32図	SI24 平面・断面図	48	第64図	第32・33次調査区と 第31・37次調査区の遺構変遷図	85

## 挿表目次

第1表 発掘調査及び整理作業の体制	2	第9表 第31・37次調査遺構一覧表(1)	65
第2表 第28～30次調査出土遺物集計表	12	第10表 第31・37次調査遺構一覧表(2)	66
第3表 第28～30次調査遺構一覧表	24	第11表 第31・37次調査遺物観察表(1)	67
第4表 第28～30次調査遺物観察表	24	第12表 第31・37次調査遺物観察表(2)	68
第5表 第32・33次調査出土遺物集計表	25	第13表 東海諸窯の編年と上町遺跡の編年	
第6表 第32・33次調査遺構一覧表	36	年対応表	79
第7表 第32・33次調査遺物観察表	36	上町遺跡の存続期間と今回の調査区の盛衰表	86
第8表 第31・37次調査出土遺物集計表	39		

## 写真図版目次

図版1 上町遺跡遠景(南から)		図版6 第28～30次 出土遺物(1)	
図版2 第30次 近景(南東から)		図版7 第28～30次 出土遺物(2)	
第28次 T1検出(手前SI01)全景(北から)		第32・33次 出土遺物	
第28次 T1検出(手前SI04)全景(南から)		図版8 第33次 近景(南西から)	
第29次 調査区完掘全景(北から)		第32次 調査区検出(SI01・SD02)全景(南西から)	
第29次 調査区完掘全景(南から)		第32次 調査区・SD02断面(南西から)	
図版3 第28次 T2検出全景(北から)		第33次 SD07検出(東から)	
第29次 SI01・SK06完掘、SI01断面(南から)		第33次 SD07断面(南から)	
第29次 SI02完掘(南から)		図版9 第33次 SI02・SD01検出(南東から)	
第30次 SI02検出(北から)		第33次 SI02完掘(南西から)	
第30次 SI02完掘(北東から)		第33次 SI06検出(北東から)	
第30次 SI02断面(北から)		第33次 SI06完掘(北東から)	
第28次 SI02カマド検出(南から)		第33次 SI06断面(東から)	
第29次 SI02カマド断面上層(東から)		第33次 SI06断面(西から)	
図版4 第29次 SI02カマド横断面上層(南から)		第33次 SI06遺物出土状況1(北東から)	
第29次 SI02カマド抽検出(南から)		第33次 SK28断面(北から)	
第29次 SI02カマド縦断下層(東から)		図版10 第33次 SB32全景(南東から)	
第29次 SI02カマド横断下層(南から)		第33次 SP16断面(南から)	
第29次 SI02カマド完掘(南から)		第33次 SP20断面(南から)	
第29次 SI02-P1断面(南から)		第33次 SP27断面(南から)	
第29次 SI02-P2断面(南西から)		第33次 SP15完掘(南東から)	
第29次 SI03カマド検出(東から)		図版II 第33次 連結土坑状構全景(東から)	
図版5 第29次 SI03カマド断面(西から)		第33次 SD05断面C(南から)	
第29次 SI03カマド断面(南から)		第33次 SD05断面D(南から)	
第29次 SI03カマド抽検出(南西から)		第33次 SD05断面E(南から)	
第29次 SI03カマド断ち割り(南西から)		第33次 SK08断面(南東から)	
第29次 SI03カマド断ち割り(南から)		図版12 第37次 調査地遠景(南東から)	
第29次 SI03完掘(南西から)		第37次 近景(南から)	
第29次 SI04完掘(東から)		図版13 第31次 調査区検出全景(東から)	
第29次 SI04遺物出土状況(北から)		第31次 SP01柱底検出(北東から)	
図版6 第29次 SK06断面(南から)		第31次 SP03柱底検出(北東から)	
第29次 SK07断面(西から)		第37次 SI01・03・04検出(北東から)	
第30次 SX05検出(北西から)		第37次 SI03遺物出土状況(南から)	
第30次 SX05断ち割り(北から)		第37次 SI16完掘(北東から)	

## 写真図版目次

図版13	第37次 SI16 遺物出土状況（南から）	図版19	第31・37次 出土遺物（4）
	第37次 SI23（西から）		第30次 1地点断面
図版14	第37次 SI24 検出（北西から）		第30次 2地点断面
	第37次 SI24 カマド検出（北から）		第30次 3地点断面
	第37次 SI40 検出（南西から）		第30次 4地点断面
	第37次 SI43 検出（南から）		第30次 5地点断面
	第37次 SI72 検出（南東から）		第30次 6地点断面
	第37次 SK42 遺物出土状況（北東から）	図版20	第33次 西壁1地点断面
	第37次 SK42 断面（南から）		第33次 北壁2地点断面
	第37次 SB92-P56 断面（南西から）		第33次 東壁3地点断面
図版15	第37次 SB92 全景（北西から）		第33次 南壁4地点断面
	第37次 SB92 全景（北東から）		第33次 南壁SI06 地点断面
図版16	第31・37次 出土遺物（1）		第33次 東壁SD07 地点断面
図版17	第31・37次 出土遺物（2）		第33次 SD05ベルト地点断面
図版18	第31・37次 出土遺物（3）		第30次 現地説明会
			上町遺跡発掘調査速報展
			第1回歴史講座

## 挿入写真目次

写真1	第30次調査区 土層堆積の 分層及び撮影	写真3	第33次調査区 土層堆積の検討	76
写真2	第30次調査区 土層堆積の検討	写真4	第33次調査区 土層堆積の採取	76

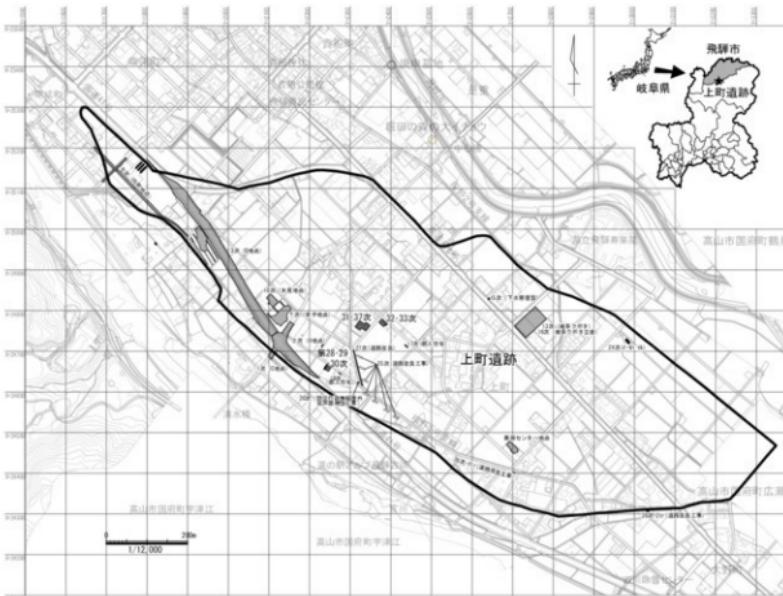
# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

### (1) 調査に至る経緯

上町遺跡は、岐阜県飛騨市古川町上町・南成町・大野町に所在する（第1図）。当遺跡内において個人住宅の新築・建替が計画され、3地点が発掘調査の対象となった。飛騨市教育委員会では、それぞれの事業者と協議・調整を重ね、試掘確認調査を経て調査面積を確定し、2012（平成24）年度に工事立会調査、2013（平成25）年度に本発掘調査を実施した。整理作業は一次整理作業を2013（平成25）年度中に実施し、二次整理作業の一部を2014（平成26）年度に実施した。翌2015（平成27）年度には本格的に二次整理作業に着手し、発掘調査報告書を刊行することとなった（第1表）。

**第29・30次調査** 個人住宅新築工事による遺構への影響を確認するため、2012（平成24）年12月1～4日に試掘確認調査を実施した（第28次調査）。調査では遺構・遺物を確認し、工事掘削が遺構面に及ぶことを確認した。結果を平成25年2月1日付け飛市教第2431号にて岐阜県教育委員会へ発掘調査終了報告書を提出した。内容は次項で詳述する。事業者にはすぐに結果を伝え、遺構面に影響を及ぼす工事の場合は事前の発掘調査が必要になることを伝えた。事業者はまず宅地造成について、



第1図 上町遺跡位置図・大グリッド図

第1表 発掘調査及び整理作業の体制

年度	2012（平成24）	2013（平成25）	2014（平成26）	2015（平成27）
教育長	山本幸一			
事務局長	藤井義昌	石腰 豊		
生涯学習課長	田中吉久	福永 聰		清水 貢
課長補佐 兼文化財係長	鈴木茂樹			
担当	三好清超（学芸員）			清水 則久
委託業者 担当者 作業員等	工事立会調査委託 29次：㈱玉川文化財研究所 管理技術者・北平朗久 齋藤武士	発掘調査支援業務委託 30・33次：㈱上智岐阜支店 管理技術者・藤田慎一 37次：㈱イビゾク高山支店 管理技術者・吉村 晶	整理作業 中嶋美香 橋本真由美 島中裕子	報告書作成業務委託 ㈱上智岐阜支店 管理技術者・片山博道

周知の埋蔵文化財包蔵地における発掘の届出を平成25年2月1日付けで岐阜県教育委員会へ提出した。岐阜県教育委員会は平成25年2月15日付け社文第3号の523にて、擁壁設置時の掘削に伴って工事立会を実施するよう指示した。飛騨市教育委員会は平成25年3月25～30日にかけて、33m<sup>2</sup>の工事立会調査を実施した（第29次調査）。事業者は引き続き個人住宅新築工事について周知の埋蔵文化財包蔵地における発掘の届出を平成25年5月16日付けで岐阜県教育委員会へ提出した。岐阜県教育委員会は掘削面積について発掘調査を実施するよう平成25年5月28日付け社文第9号の2にて指示した。飛騨市教育委員会は平成25年5月9～24日にかけて、面積115m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。

**第33次調査** 個人住宅新築工事による遺構への影響を確認するため、2013（平成25）5月23～24日に住宅新築予定地の東側において、試掘確認調査を実施した（第32次調査）。調査では遺構・遺物を確認し、調査対象地には遺構が良好に残存する可能性が想定された。結果を平成26年1月30日付け飛騨市教第2249号にて岐阜県教育委員会へ発掘調査終了報告書を提出した。内容は次頁で詳述する。飛騨市教育委員会は事業者に住宅予定地にも遺構が広がる可能性が高く、新築工事前の発掘調査が必要なことを伝えた。事業者は新築工事について周知の埋蔵文化財包蔵地における発掘の届出を平成25年5月24日付けで提出した。岐阜県教育委員会は、平成25年5月30日付け社文第9号の8にて発掘調査を実施するよう指示した。飛騨市教育委員会は平成25年6月10～28日にかけて、面積158m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。

**第37次調査** 個人住宅新築工事による遺構への影響を確認するため、2013（平成25）年5月20～22日に試掘確認調査を実施した（第31次調査）。調査では古代の大形柱穴を確認し、これらは飛騨市の歴史を語る上で重要であると判断された。その結果をもって事業者と協議し、工事掘削は遺構面直上まで保存を図ることとなったため、発掘作業は検出までとした。事業者はまず個人新築住宅について、周知の埋蔵文化財包蔵地における発掘の届出を平成26年2月10日付けで岐阜県教育委員会へ提出した。岐阜県教育委員会は平成26年2月14日付け社文第3号の609にて、発掘調査を実施するよう指示した。飛騨市教育委員会は平成26年3月6～24日にかけて、面積486m<sup>2</sup>の発掘調査を実施した。

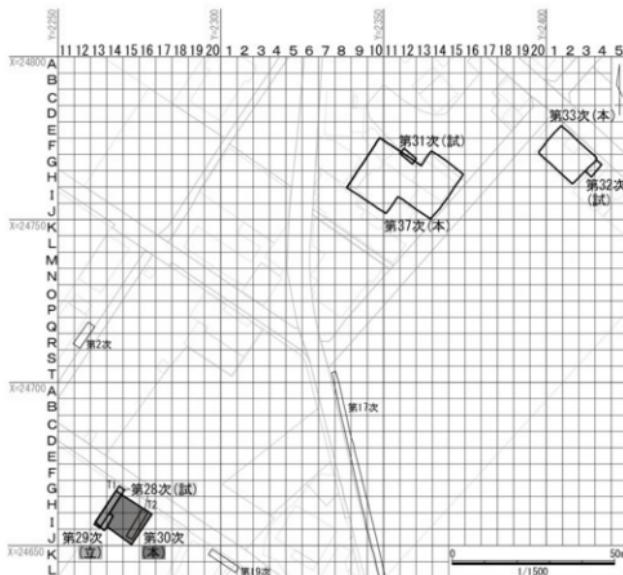
## （2）試掘確認調査（第28・31・32次）の結果（第2・3図）

**第28次調査** 対象面積120m<sup>2</sup>に対し、トレンチ1・2を設定して50m<sup>2</sup>の調査を実施した。トレチ1では、耕土除去後、現地表下40～60cm程度で第7層地山を確認した。遺物包含層は存在せず、

第7層上面で遺構検出を行い、SI01～04の4軒を確認した。トレンチ2では、現地表下30cmの第4層地山上面で検出作業を行い、SI05を確認した。遺物は須恵器片・土師器片を確認した。遺構検出面までが浅く工事掘削で影響を及ぼすため、事前調査として第29・30次調査を実施することとなった。引き続いて調査を行ったため、同一遺構出土と考えられる遺物の報告は、第3章第2節にて行う。

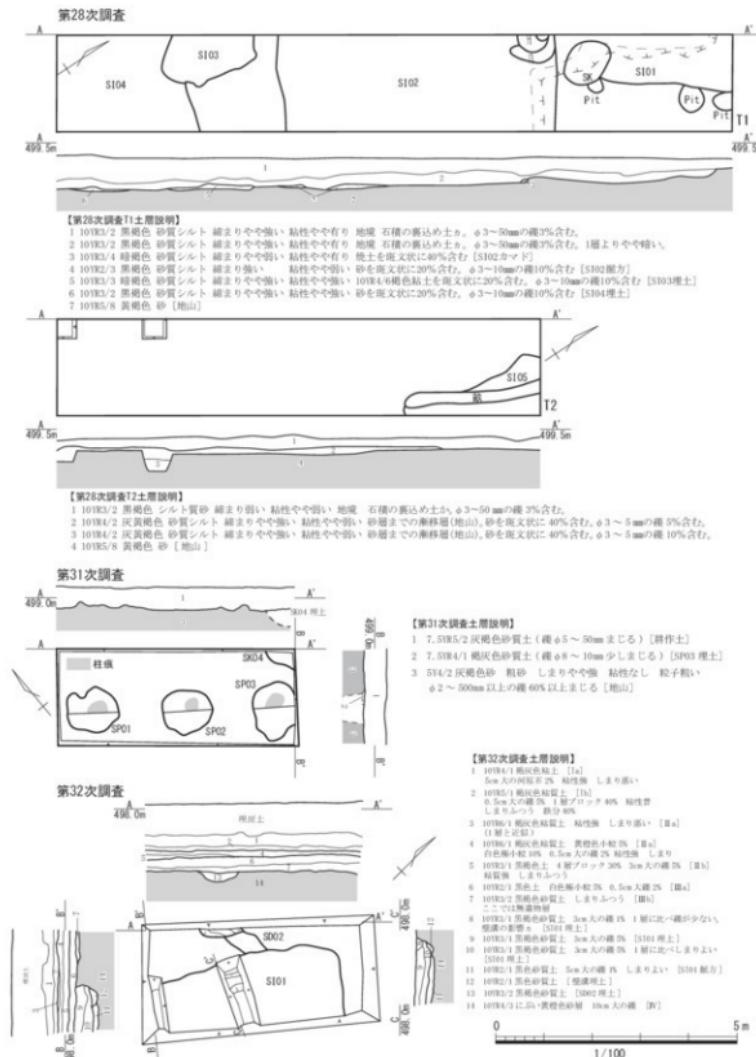
**第31次調査** 対象面積550m<sup>2</sup>に対し、事業者との協議の上トレンチを設定して10m<sup>2</sup>の調査を行った。表土除去後、現地表下約50cmで地山層を確認し、その上面で遺構検出を行った。遺構は土坑1基・柱穴3基を確認した。不整形を呈する柱穴は径1m弱と大形であり、これまで上町遺跡で確認されている大型掘立柱建物との関わりが想定された。遺物は表土層から須恵器・土師器片が出土した。特に墨書きのある須恵器杯B蓋が注目される。今回確認した遺構・遺物の状況から、周辺にも遺構が広がると想定された。柱穴跡は土囊で保護し、埋め戻しを行った。工事掘削は遺構面直上までのため、事前調査として第37次調査を実施することとなった。最終的に、事業者の理解のもと工事で遺構を壊さないよう掘削を行うこととなり、第37次調査は遺構検出までとなった。

**第32次調査** 対象面積158m<sup>2</sup>に対し、事業者との協議の上トレンチを設定して10m<sup>2</sup>の調査を行った。宅地造成のための理戻土層を除去後、上層より旧耕作土のI層、末土のI b層、平安時代から中近世までの遺物包含層と考えられるII a・II b層、弥生時代以降奈良時代の堆積層と考えられるIII a・III b層、地山層であるIV層を確認した。土層堆積は安定している状況であった。遺構検出を第IV層上面で行い、SI01がSD02を切ることを確認した。サブトレンチにて断ち割り調査を行い、SI01には壁溝が伴うことを確認した。サブトレンチよりハケメ調整の土師器細片が出土したが、SI01の年代決



第2図 第28～33-37次調査区配置図・グリッド設定図

定には至らなかった。工事掘削は遺構面に及び、調査対象地には遺構が良好に残存するものと想定されたため、事前調査として第33次調査を実施することとなった。



第3図 試掘確認調査遺構図

## 第2節 調査の方法と経過

### (1) 調査の方法

**グリッドの設定** 調査区画は世界測地系座標を基に  $100\text{ m} \times 100\text{ m}$  の大グリッドを設定し、その中に  $5\text{ m} \times 5\text{ m}$  の小グリッドを設定した。小グリッドは北から南へ A ~ T、西から東へ 1 ~ 20 とし、調査区画の呼称は北西角の杭番号を用いた。(第1・2図)

**掘削** 表土掘削は重機で行い、遺物包含層掘削、遺構検出、遺構掘削の各作業は全て人力で行った。なお、第37次調査は、遺構面より深く掘削が行われなくなったため、遺構掘削は行わなかった。

**記録作成** 遺構番号は検出順の通番とし、遺構記号は『発掘調査の手続き』(平成22年、文化庁)に準拠した。本報告書内では各次数の検出番号が重複するため、必要に応じて次数番号を頭に付して「29SI01」などのように記す。遺構平面図・断面図は三次元測量図化システムにより作図した。一部の断面図は手実測によるものをデジタルトレースして作図した。遺構調査に当たっては、原則として全て平面図を作成し、断面図については埋土が単層の土坑・柱穴以外を全て作成した。

計測は最大幅を長軸とし、それに直交する軸を短軸とした。深さは最も深い位置で計測した。搅乱や他遺構に切られている場合は残存値を計測し、括弧書きで記載した。

平面形状と底面形状は、円形・方形・不定形の3種に分類した。埋土堆積状況は、单層・水平堆積・中央が壅む堆積・片側の壁に偏る堆積がある堆積の4種に分類した。断面形状は、半円形・方形・逆三角形・逆台形・プラスコ形・2段掘り込み形の6種に分類した(第4図)。

記録写真は35mmカメラ(モノクロ・カラー)、中判カメラ(モノクロ・カラー)、デジタルカメラで撮影した。景観写真は、第30・33次調査ではラジコンヘリコプターで、第37次調査では高所作業車で撮影を行った。

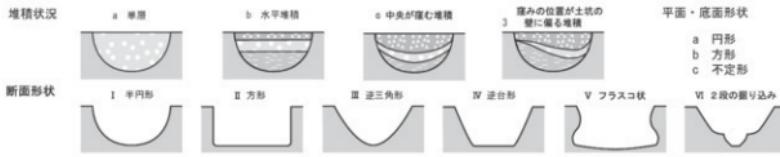
**遺物の取り上げ** 検出作業時並びに遺構内出土遺物については一点取り上げとし、遺物包含層出土遺物は小グリッドによる一括取り上げとした。

### (2) 発掘調査の経過

**第29次調査** 2012年3月25～30日、擁壁工事に伴う工事立会調査を実施した。竪穴建物跡4軒などの遺構を、飛鳥時代後半～奈良時代に属する遺物とともに確認。遺構掘削作業、平・断面図と写真撮影による記録保存作業を行った。

**第30次調査** 2013年5月9日、表土掘削開始。第29次調査で確認した竪穴建物跡の続きを確認。以降順次遺構検出作業を行う。

14日、断ち割りによる下層確認。試掘確認調査(第28次)2トレンチで遺構と考えられた黒褐色土広がりは、I層からの压しこみと判断。15日から遺構掘削開始。



第4図 遺構平面・断面・堆積分類図

17日から測量開始。20日、景観写真撮影実施。22日、土壤分析実施。同日現地説明会を実施し、70名が参加。岐阜県文化財保護センター・大宮次郎氏、三島誠氏来跡。飛騨市役所総務部古川町史編纂室職員3名来跡。23日、埋め戻しを開始し、翌24日に完了。現場撤収。

**第33次調査** 2013年6月10日、表土掘削の開始。広範囲で遺構を確認できる状況であった。

11日、表土掘削終了。遺構検出開始。竪穴建物や溝等の遺構、土器片・須恵器片などの遺物を確認。

14日、土壤分析実施。16日、首都大学東京大学院教授・山田昌久氏来跡。SD05の埋土は水洗フリイ選別を実施し、種実等の植物遺体が含まれるか確認するよう指導を受ける。

17日、遺構掘削開始。写真撮影・図面による記録作成を順次行う。

23日、㈱玉川文化財研究所調査研究部長・河合英夫氏来跡。SD05について、方形周溝墓の可能性もあるため、周溝内埋葬の想定もしながら掘削するよう指導を受ける。パリノ・サーヴェイ㈱・辻本裕也氏来跡。

25日、市民25名来跡、見学。26日、遺構部分の埋め戻し開始、翌27日完了。現場撤収。

**第37次調査** 2013年3月7日、表土掘削開始。11日、表土掘削を終えた範囲から遺構検出作業開始。検出作業段階での出土遺物を一点ずつ計測しながら取り上げる。17日、表土掘削が完了。

18日、㈱玉川文化財研究所調査研究部長・河合英夫氏来跡。掘立柱建物、竪穴建物が平安時代の遺構の可能性があり、上町遺跡の集落が散在していく時期にあたる旨の指導をいただく。測量開始。

19日、遺構検出完了。景観写真撮影。測量完了。

24日、現地説明会を実施し、79名が参加。現場撤収。

### (3) 整理作業の経過

**一次整理作業** 第30・33次調査では発掘調査終了後から2013(平成25)年12月16日まで㈱上智岐阜支店において、第37次調査では発掘調査開始時から2014(平成26)年5月12日まで飛騨市美術館において、遺物洗浄・注記等の一次整理作業を行った。注記は手書きにより行った。記入は遺跡略号(上町遺跡: KM)・調査次数・取り上げ番号とした。SD05埋土の水洗フリイ選別を行ったが、植物遺体は含まれていなかった。

**二次整理作業** 2014(平成26)年4月、飛騨市美術館において遺物接合作業を実施した。2015(平成27)年9月30日～2016(平成28)年3月24日にかけて、㈱上智岐阜支店への支援業務委託により実施した。作業にあたり、委託先の整理作業場へ出土遺物を持ち出した。出土遺物はまず遺構出土と遺構外出土に分け、遺構出土のものは遺跡の時期や性格を決定する資料と考えて報告書に掲載することとした。遺構外出土遺物は、遺跡の性格を反映するもの、資料的価値が高いもの、分類別の代表的なものを重視して掲載した。

出土遺物の検討として、2014(平成26)年3月26日には岐阜大学教授・早川万年氏に墨書き器についてご教示いただいた。2014(平成26)年5月11日には奈良文化財研究所考古第二研究室長・尾野善裕氏、㈱玉川文化財研究所調査研究部長・河合英夫氏に、6月9日には各務原市役所・渡辺博人氏に遺物の見方についてご教示いただいた。2015(平成27)年3月4日には富山大学教授・鈴木景二氏に墨書き器についてご教示いただいた。

普及活動として、2015(平成27)年11月27日～12月5日にかけて飛騨市図書館において上町遺跡発掘速報展を行った。また、5日には飛騨市高度情報センターにおいて第1回飛騨の歴史講座「上町遺跡の近年の調査成果から」と題した報告会を行い、16名の参加があった。報告書は2016年度に印刷した。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

上町遺跡は岐阜県飛騨市古川町から一部国府町（現高山市）に所在する。飛騨市は北に富山県、南に高山市、西に白川村と隣接し、富山県南部から美濃地方北部に広がる飛騨山地に位置する。飛騨山地は東側を飛騨山脈、西側を加越山地と接する。飛騨山地の中央部は古川・国府盆地や高山盆地等の平坦地が分布する。飛騨市は古川・国府盆地に位置し、盆地は宮川と荒城川によって形成された氾濫原（沖積平原）である。

一方、飛騨を地質的にみると、飛騨山地の基盤岩は片麻岩類・飛騨外縁帯・船津花崗岩で構成される。この基盤岩の上位には中生代の海あるいは湖に堆積した手取層が分布する。手取層が陸化した後、大規模な火山活動によって堆積したものが濃飛流紋岩・大雨見山層群となる。これ以降、大規模な地学現象は発生しておらず、新生代第四紀に宮川と荒城川の働きで段丘と氾濫原を形成した。この段丘上には約40万年前と34万年前の2度にわたって、軽石・火山灰が堆積した。

本遺跡は宮川と荒城川に挟まれた氾濫原に立地する。宮川は高山市の川上岳（標高1,626m）を分水嶺とする神通川水系の一部で、飛騨山地を北流する。本遺跡の北端で荒城川と合流し、さらに北流して富山県境の神通峡付近で高原川と合流して神通川と呼称される。さらに北流して富山平野、そして富山湾へ注がれる（第5図）。延長は約120kmに及ぶ。また、宮川には河岸段丘が形成され、第37次調査区の南東端において確認された約1mの段差がこの段丘崖と考えられる。

以上から、本遺跡は宮川と荒城川の段丘または氾濫原の平坦面という好立地に當まれ、また地形的にも東海と北陸を結ぶ交通の要衝であった。

### 第2節 歴史的環境

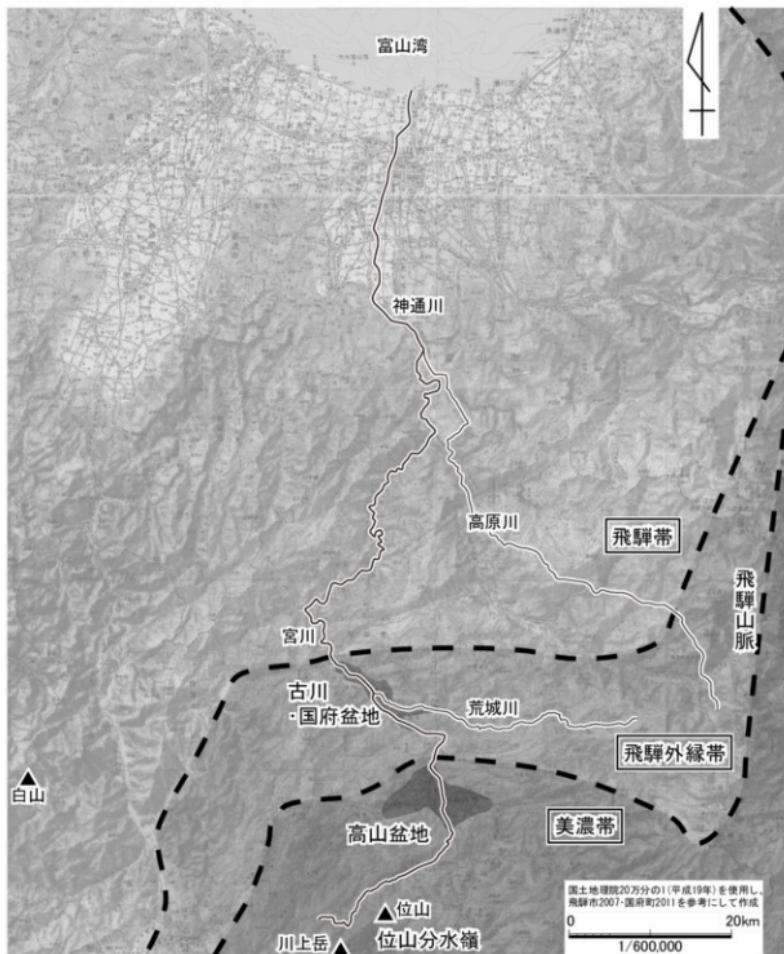
次に、上町遺跡とその周辺の歴史についてみていく。上町遺跡では2015年までに合計45次の試掘確認・立会・発掘調査が行われており、古墳前期・後期、古代（飛鳥期～平安後期）、中世（平安末期～室町期）の遺構・遺物が確認されている。その中で、今回報告する第28～33・37次調査においても概ね同様の時期と考えられる遺構を確認した。そこで、本節では本遺跡に関連する弥生時代から古代の遺跡を中心にみていく。なお、ここで取り扱う範囲は本遺跡の所在する旧古川町・旧国府町を中心とし、時代は縄文時代から古代にかけてとする（第6図）。

**旧石器～弥生中期** 現在、上町遺跡では人が生活した痕跡が確認されていない。本遺跡周辺では飛騨市の最古級の遺跡として、後期旧石器の飛騨市宮川町・宮ノ前遺跡が確認されている。縄文早期の飛騨市古川町・沢遺跡（6）等、本遺跡周辺では縄文時代の遺跡は比較的多く確認されている。縄文中期～後期では集落が形成されていき、その規模も大きくなる。飛騨市古川町・中野山越遺跡（5）・高山市国府町・森ノ木遺跡（10）等を挙げることができる。続く、縄文晚期～弥生中期では遺跡数が減少する。

**弥生後期～古墳前期** 弥生後期～古墳前期では集落とともに方形周溝墓が確認されている。飛騨市古川町・中野大洞平遺跡（8）・高山市国府町・南垣内円形周溝墓（16）と本遺跡のD地点及び第33

次調査においても確認されている。本報告の第33次調査に関しては周溝墓とするかは不明確な点が多く、ここではその可能性を指摘するに留めておく。弥生後期から古墳前期にかけて周溝墓が築かれるということは古川・国府盆地に有力者が存在し始めたことを示唆する。また、これら3遺跡が河川沿いに概ね等間隔に立地していることは注目される。

飛騨地域最大の古墳として高山市国府町・三日町大塚古墳(18)が確認されており、全長70~80mの前方後円墳である。以前は古墳中期とされていたが、最近の研究では古墳前期まで遡る可能性



第5図 調査地の周辺地形図と位置図

が指摘されており、飛騨地域の古墳時代を考える上で重要である。

**古墳中期～後期** 飛騨地域における古墳の分布をみると、大きく高山盆地と古川・国府盆地に分かれ、現在、高山盆地には約 50 基以上、古川・国府盆地には約 490 基確認されている（古川町史編纂室 2015）。この古墳の 2 極化と古代以降の荒城郡と大野郡との関係もまた注目される。

古川・国府盆地では本時期の古墳を多数確認しているが、集落は少なく、その分布も宮川と荒城川が合流する本遺跡と荒城川流域に限られる。本遺跡より下流では古墳のみ確認されており、現在は本遺跡が集落の北限となっている。また、古墳はいくつかの群が想定でき、これが時期差であるのか、集団的なまとまりであるのかはこれから研究課題である。

本遺跡に目を移すと、C 地点（上町遺跡 C 地点発掘調査団 1989）・D 地点（上町遺跡 C 地点発掘調査団 1991）と第 33 次調査区において竪穴建物と掘立柱建物で構成される集落が形成される。

**古代（飛鳥期）** 古川・国府盆地では本時期になると、寺院と須恵器・瓦の窯が新しく築かれるようになる。本遺跡内においても古町廃寺跡（70）・上町廃寺跡（71）・塔の腰廃寺跡（72）の 3 寺院が確認され、古川・国府盆地内においても概ね古墳群の位置と一致する。特に、本遺跡より上流では寺院の分布が多く、古墳群が下流に多く分布していたのとは逆になる。

本時期の窯は須恵器・瓦を併焼する瓦陶兼業窯で、窯跡に関しては現在詳細を把握できないが、寺院の建築とともに本地域に導入されたと考えられる。導入経路に関しては東海地域とするのが妥当と考えられるが、坪等にヘラ切りを使用する点においては北陸との関係も注目される。

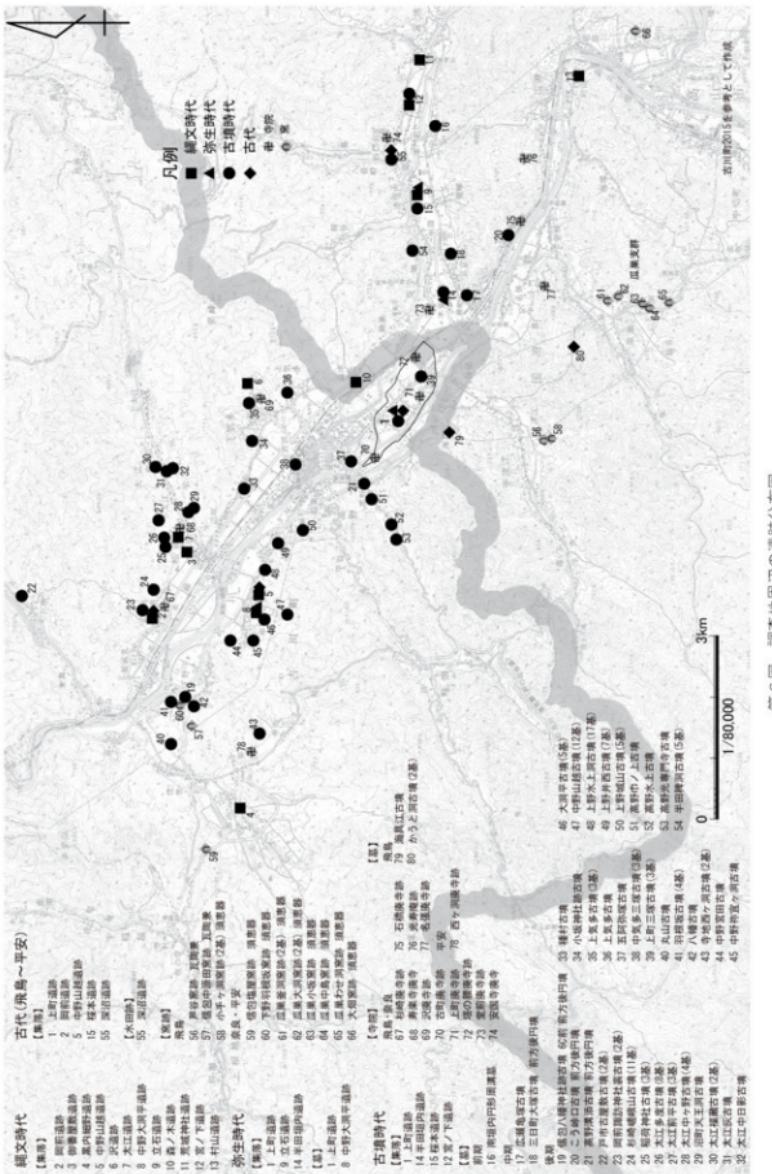
本遺跡では竪穴建物が増加する。本調査区では当時期の遺構は確認されず、坪 H・G といった須恵器が少量出土する程度である。

**古代（奈良期）** 集落は本遺跡と下流の岡前遺跡（2）・中野山越遺跡（5）、上流の桜本遺跡（15）・深沼遺跡（55）の 3 箇所に分布し、前時期からの勢力図がそのまま踏襲されている。寺院は本時期に最盛期を迎えると考えられる。また、須恵器生産は瓦陶兼業から須恵器専業へ移行し、いくつかの群が確認される。瓜巣支群（61～65）は最も窯が確認されているが、他は 1 基または 2 基のみである。窯跡の分布は宮川流域に分布し、荒城川流域には確認されていない。飛騨は東海諸窯と北陸諸窯の間に位置し、詳細な窯跡の分布とその内容把握が急がれる。

本遺跡の D 地点・水見地点・金子地点（古川町教委 2001）では大型掘立柱建物が確認でき、遺物では墨書き土器・硯などが出土している。本調査区では 8C 前葉から中葉の遺物が多く出土し、第 37 次調査区では竪穴建物と掘立柱建物が多数検出されている。これらのことから、本遺跡は官衙的要素をもつ遺跡であると推測されている。古墳のところで既述したが、古墳の分布が荒城郡と大野郡に影響を与えていた可能性がある。本遺跡は宮川と荒城川の合流点に位置し、また古川・国府盆地の中央にも位置している。遺跡の立地と弥生後期からの遺跡の変遷を考慮しても、本遺跡が古川・国府盆地の中心であり、官衙であった可能性が高い。

**古代（平安期）** 本時期以降、本遺跡はもとより古川・国府盆地の遺跡数が減少傾向にある。本遺跡においても 9 世紀以降の遺構・遺物は希薄になる。本調査では第 37 次調査区において竪穴建物が確認されているので、集落として 10 世紀頃までは確実に存続していたと推測される。しかし、衰退傾向にあったことは確実である。寺院は平安時代として西ヶ洞廃寺跡（78）が挙げられる程度である。焼物生産に関しても詳細は分かっていないのが現状である。

以上、7～8 世紀は古墳の分布からも古川・国府盆地が中心で、本調査区では 8 世紀後葉～9 世紀中葉の遺物が極端に減少することからも、飛騨の中心は高山盆地へ移行したと推察される。



第6図 調査地周辺の遺跡分布図

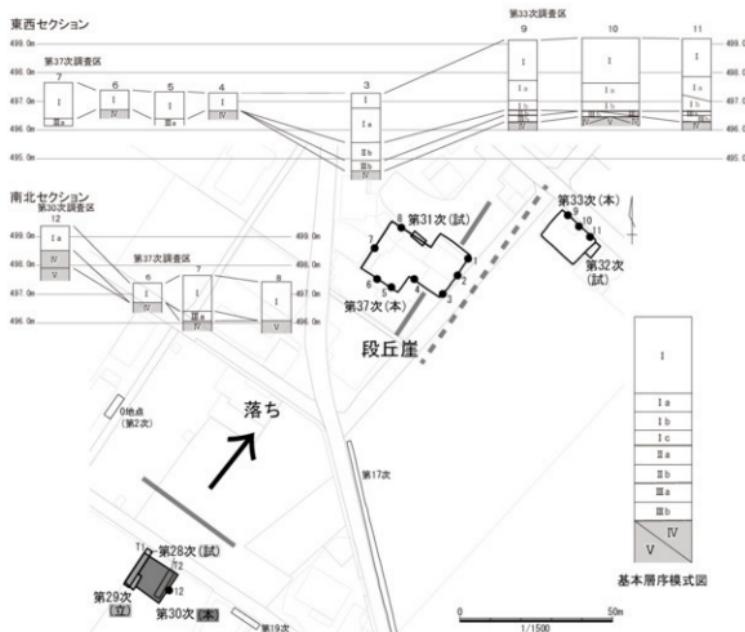
## 第3章 調査成果

### 第1節 層序

上町遺跡では、C・D地点をはじめ18,000 m<sup>2</sup>以上に及ぶこれまでの発掘調査により、第I～V層の大きく5層の基本層序を確認している。第30・33・37次の調査で確認された土層の堆積状況も、既往調査の基本層序に対応させることができた。このため、層名もそれに準拠している（古川町教育委員会1989・1991、飛驒市教育委員会2012）。調査面は1面であり、遺構検出面は第IV層から第V層の上面であった。第33・37次調査の一部では、第III層の残りが良好で細分することができ、平面的にも一部残存している状況を確認した。

**第I層** 表土層である。水田や畑作の耕土、住宅の造成土が該当する。水田においては上位の作土層、I a層と下位の床土層・I b層に細分される。また、土地改良前の旧耕作土をI c層とする。

**第II層** 平安時代以降中世までの遺物包含層である。中世から近世にかけての遺物包含層であるII a層と、平安時代の遺物包含層であるII b層に細分される。II層上辺には鉄の堆積やマンガン斑点



第7図 層序・柱状図

が見られる。

**第Ⅲ層** 弥生時代以降奈良時代にかけて堆積した土層である。上位のⅢa層と、Ⅳ層にかけての漸移層であるⅢb層に細分される。向町地点ではⅢa層上面が遺構面であり、Ⅲ層中に古墳時代から古代にかけての遺物を確認した。今回は第33・37次の一部で平面的な堆積を確認することができた。

**第Ⅳ層** 宮川に由来する黄橙色砂の無遺物層である。河岸疊層を覆う地山で、全面に認められない。

**第V層** 宮川に由来する河岸疊層である。遺跡内で起伏が認められ、その産みに第IV層の砂層が堆積している。

## 第2節 第29・30次調査

### (1) 遺構・遺物の概要

**遺構** 本調査区では第28～30次調査の合計3次に及ぶ試掘・立会・本発掘調査を行っており、堅穴建物4軒、土坑2基、柱穴4基の合計10基を検出した（第8図）。遺構は調査区の北西側に集中し、南東側では砂疊と砂の違いを図示した。砂疊と等高線から旧河川の流路が概ね南東から北西へ流れていたことを示している。第30次調査では土層堆積状況の分析調査を行っており、詳細は第4章で説明する。

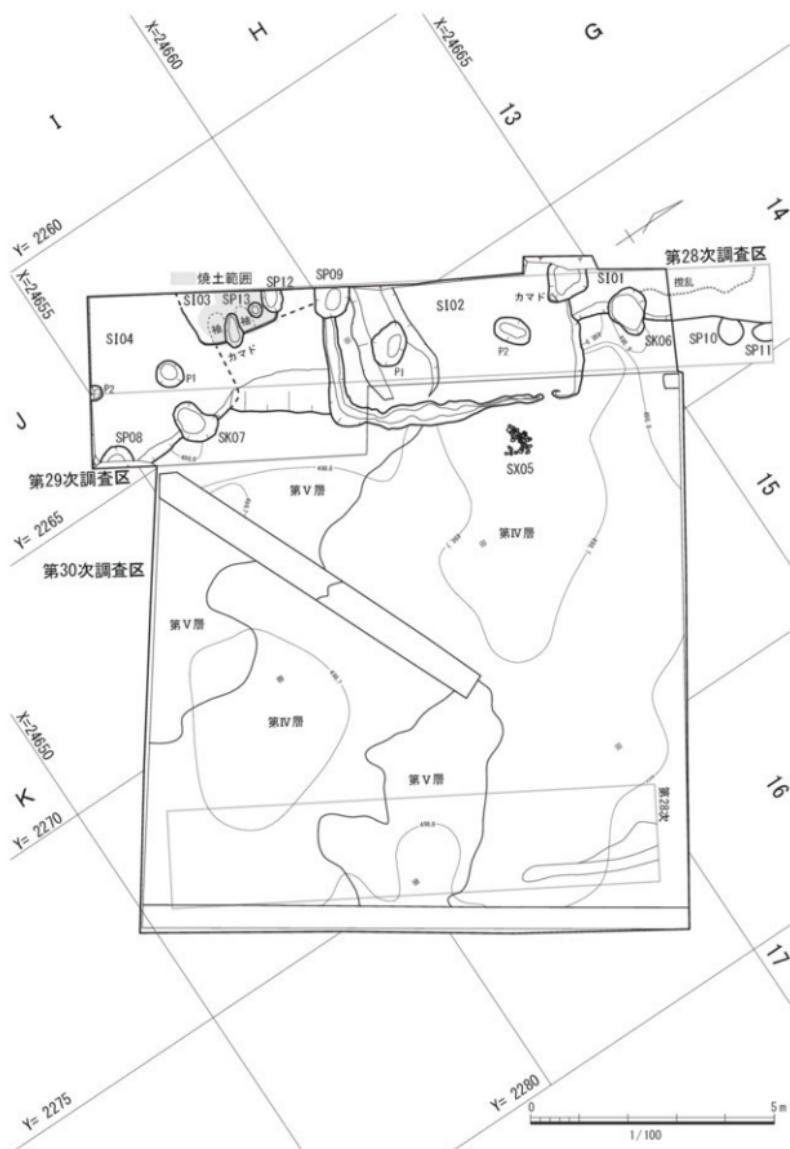
堅穴建物は調査区の北西端において4軒が重複した状況で検出された。しかし、そのほとんどが大きく搅乱を受けており、埋土がわずかに残っている程度で、建物と判断するのは困難であった。そういった中においてSI02・03ではカマドを検出することができ、建物と判断するに至った。カマドの残存状態も悪く、袖は推定線で示している。

第7図に示したとおり、本調査区と第31・37次調査区の間に段丘崖が想定され、本調査区が一段高い地点に位置している。本調査区と第31・37次調査区との間に想定される段丘崖までが本調査区で検出された建物群（集落）の範囲と推察される。

**遺物** 本調査区では須恵器・土師器・灰釉陶器が出土し、綠釉陶器・船載磁器はみられない。出土数量とその内訳は第2表に示した。時期は7世紀前葉から9世紀後葉と約200年の年代幅をもつ。時期別の割合は示すことはできないが、概ね7世紀が1割、8世紀が7割、9世紀が2割となるだろう。種別の割合では須恵器が6割、土師器が3割、灰釉陶器が1割未満となる。以上から、本調査区は8

第2表 第28～30次調査出土遺物集計表

種別 器種	須恵器												土師器				灰釉陶器			計
	坏H 蓋	坏G 身	坏A 蓋	坏B 身	坏類	平底碗	瓷器系	鉢	壺・瓶類	甕	赤彩	坏類	高坏	甕	碗・皿	瓶類				
SI01											1				4			5		
SI02	1				2						1		1	2	39			46		
SI03	1		1	1						1	5				8			17		
SI04	1		2	2	1	5				1	1	4			8	1	1	27		
SK07					1					1					1			3		
SX05					1					1	1						1	4		
遺構外	4	1	2	1	1	8	2	22	4	2	2	1	9	12	1	7	4	83		
器種計	7	1	2	1	3	11	4	31	4	2	2	3	11	24	2	1	2	185		
割合	4%	1%	1%	1%	2%	6%	2%	17%	2%	1%	1%	2%	6%	13%	1%	1%	36%	100%		
種別計	106												72				7	185		
割合	57%												39%				4%	100%		



第8図 第28～30次調査区全体図

世紀を中心とした一般的な集落と言えるだろう。詳細は第5章でみていくこととする。

## (2) 壓穴建物

### S101 (第9図、写真図版2・3・6)

位置層位 14G・14Hにおいて、第IV層上面で確認した。

重複関係 S102 及びSK06に切られる。

遺存状態 東壁の立ち上がりの一部を確認したのみである。

平面形状 他の壓穴建物の形状から方形と推測される。

規模 残存部で南北4.14、東西1.04mを測る。

主軸方位 東壁より求めると、N-35°-Eである。

壁 やや開きぎみに立ち上がり、壁高は約0.14mである。

床面 調査区の西隅で一部確認したが、多くは削平を受けて不明である。

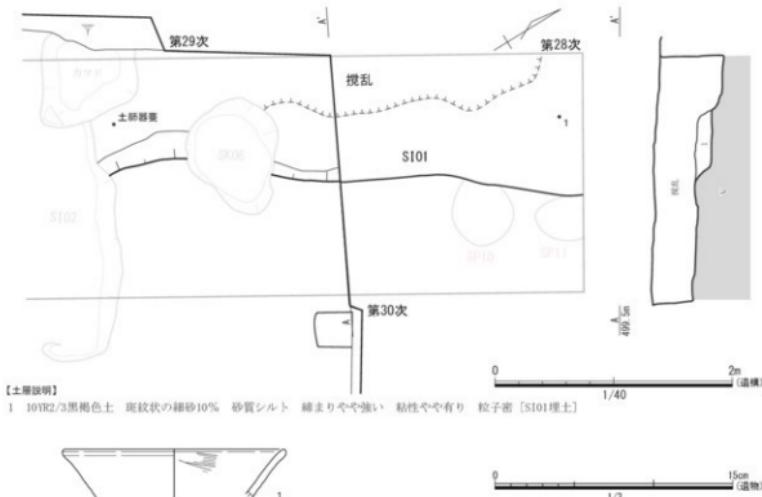
柱穴 確認されなかった。

壁溝 確認されなかった。

埋土 黒褐色土である。重複構造と後世の削平により大半が失われている。

厨房施設 調査範囲では検出されなかった。

出土遺物 土師器兩面赤彩土器1点・甕4点が出土した。1は土師器甕の口縁部片である。全面に摩耗を受けており、調整は不明瞭である。口縁部のみで全体を復元できないが、くの字甕と推測される。内面に横方向の板ナデを施した痕跡をわずかに残す。時期は古墳時代後期と推定される。



第9図 S101 平面・断面図、出土遺物図

**所 見** 壁の立ち上がりと埋土がかろうじて残存している状況であった。7世紀中葉のSI02に切られること、土師器甕1点が古墳時代後期のものと考えられることから、遺構は古墳時代後期の可能性がある。

#### SI02 (第10・11図、写真図版3・4・6)

**位置層位** 13H・14H・14Iにおいて、南側が第V層、北側が第IV層上面で確認した。

**重複関係** SI01を切る。

**遺存状態** 東側2分の1を確認した。西側2分の1は調査区外である。

**平面形状** 方形プランである。

**規模** 南北5.50m、東西は確認された範囲で2.97mである。

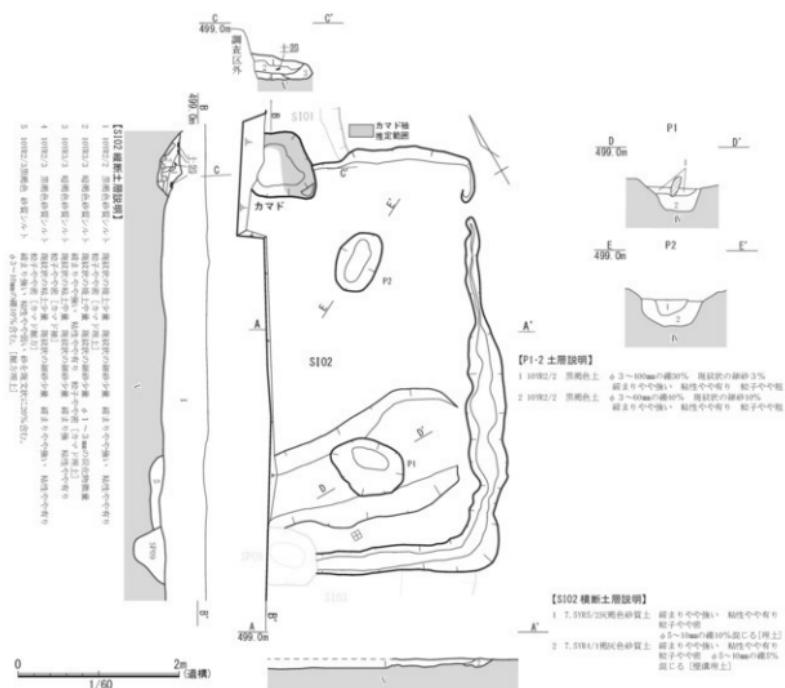
**主軸方位** N-28°-Eである。

**壁** やや開きぎみに立ち上がり、最も残りが良い北壁付近で壁高は0.29mを測る。

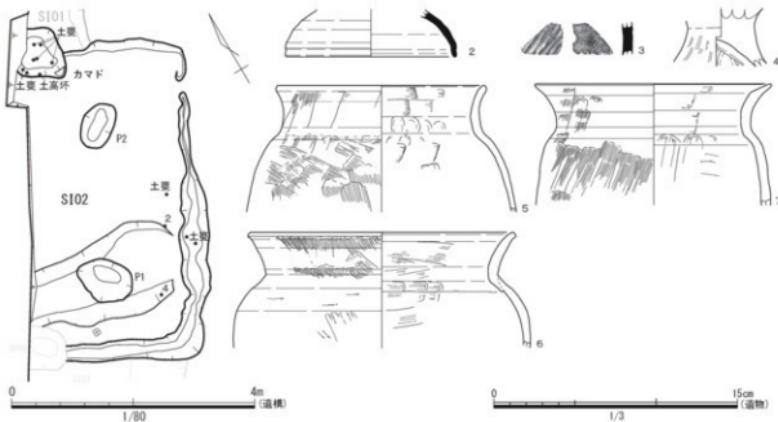
**床面** 贼床は確認できなかった。

**柱穴** 東側でP1・P2の2基を確認した。柱穴はSI02の四隅に配置されたものと考えられる。

P1は長径0.93m、短径0.69m、深さ0.40mを測る。P2は長径0.78m、短径0.51m、深さ0.48mを測る。



第10図 SI02 平面・断面図



第11図 SI02 出土遺物図

mを測る。ともに平面形は不定形を呈する。

**壁溝** 調査範囲では、壁に沿ってほぼ全周する。幅は0.14～0.50m、深さは0.12m程度を測り、断面形は逆台形状を呈する。

**埋土** 灰褐色土である。分層には至っていない。

**廚房施設** 北壁中央にカマドが設けられ、北壁側に深く掘り込まれている。焚口部から煙道の立ち上がりまで0.78mと東側袖部の一部を確認したが、焚口幅と西側袖部は後世の擾乱により確認できなかった。東側袖部は地山砂疊層を由来とする疊と粘性のある黒褐色土の構築材で形成される。

**出土遺物** 須恵器壺類3点・甕1点、土師器高窓2点・壺1点・甕19点を確認した。

2は壺II蓋の天井部から口縁部片である。成形は右回転のロクロナデを施し、天井部の調整は施されない。口縁部外面に稜を有する。時期は7世紀前葉から中葉と推定される。

3は甕胴部片である。外面には平行タタキを施し、内面はナデを施す。内面には当具痕と考えられる凹凸がわずかに確認でき、当具の後にナデ調整を施していると推測される。時期は不明である。

4は高壺脚部片である。壺部と脚部下半を欠損する。調整は摩耗により不明瞭であるが、外面に縦ミガキを確認できる。内面はナデを左回りに施す。時期は古墳時代の所産であろうか。

5～7は甕口縁部から胴部上半である。6は口縁部がくの字状で、5・7は外湾である。5・6は口縁部径に対して胴部径が大きいのに対して、7は口縁部径と胴部径が概ね同様である。口縁部の形状は、5・6が方形を呈する。7は口縁部内面に稜を有し、平坦面が生じる。そのためか口縁端部は先細りした形状を呈する。調整は部位によって工具・方向を使いわけている。5の外面は口縁部から頸部に縦ハケメ、肩部に斜めハケメ、胴部に縦ハケメ、内面には口縁部に横板ナデ、頸部に指押え後横板ナデ、胴部に縦板ナデを施す。6の外面は口縁部から頸部に縦と斜めハケメ、肩部に横板ナデ、胴部に縦板ナデ、内面には口縁端部

に横ナデ、口縁部から頸部に斜め板ナデ、頸部に横板ナデ、胴部に横板ナデを施す。7の外面は口縁部から頸部に縦ハケメ後粗く横ナデ、頸部から胴部に縦ハケメ、内面には口縁部から頸部に横板ナデ、胴部に縦板ナデと横板ナデを施す。時期は7世紀代と推定される。

**所 見** 第29次の工事立会時では、カマド周辺を除いて床面まで後世の搅乱を受けている状況であった。埋土及び貼床もほとんど残っていないものの、壁溝が検出されたため堅穴建物の形状が方形であることが分かった。床面近くで確認した2の年代から、SI02は7世紀前葉から中葉と推定される。

### SI03 (第12・13図、写真図版4・5・6)

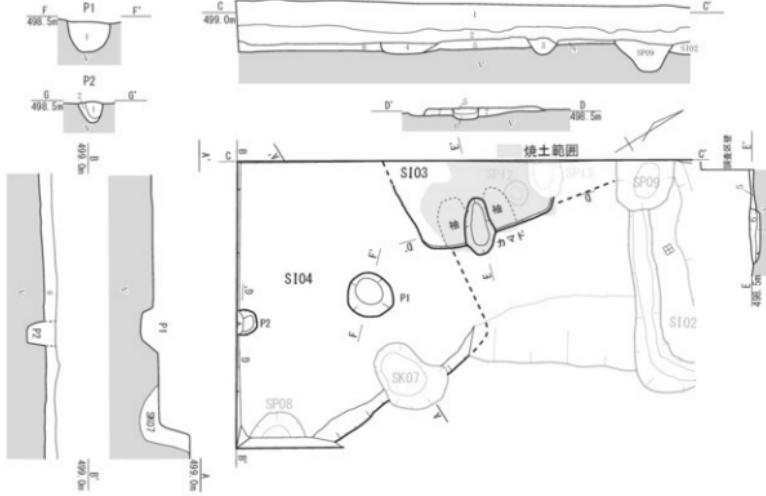
位置層位 13I・14Iにおいて、第V層上面で確認した。

重複関係 SI04を切る。

遺存状態 残りが悪く、全形は不明である。焼土とカマドの残存部より堅穴建物と判断した。

平面形状 方形と推測される。

規模 確認された範囲で、南北2.58m、東西は1.49mである。



#### 【SI03-04 土壌説明】

- 1 10B3/2黒褐色 砂質シルト 細まりやや強い 粘性やや有り 地質 砂質の基込め土か  
△3~5mmの礫3%含む。
- 2 10B3/2黒褐色 砂質シルト 細まりやや強い 粘性やや有り 地質 砂質の基込め土か  
△3~5mmの礫3%含む。(削りやや有り)
- 3 10B2/2黒褐色 砂質シルト 細まりやや強い 粘性やや有り 地質 砂質の基込め土か  
△1~3mmの礫1%含む △3~10mmの礫30% しまりやや強 粘性やや弱  
粘子やや弱 [SI03-1削上]
- 4 10B2/3黒褐色 砂質シルト 細まりやや強い 粘性やや弱 地質 10B4/4黒褐色粘土を複数例に20%含む。  
△1~3mmの礫10%含む。 [SI03層上]
- 5 10B2/3黒褐色 砂質シルト 細まりやや強 粘性やや弱 地質 10B4/4黒褐色粘土を複数例に20%含む。  
△1~3mmの礫10%含む。 [SI03カマド埋土]
- 6 10B2/3黒褐色 砂質シルト △1~3mm礫土少量 しまりやや強 粘性やや弱 [SI03 カマド埋土]
- 7 10B2/4黒褐色 砂質シルト 10B4/6黒褐色粘土を複数例に20% △3~5mmの礫10% しまりやや強  
粘性やや弱 地質 10B4/4黒褐色粘土を複数例に20%含む [SI03-1削上]
- 8 10B2/2黒褐色 砂質シルト 細まりやや強 内側を火焚式に20%含む。  
△3~10mmの礫10%含む。 [SI04層上]

#### 【SI04-P1 土壌説明】

- 1 10B3/3黒褐色 砂質シルト △5~10mmの小礫5% 細まり有り 粘性やや弱

#### 【SI04-P2 土壌説明】

- 1 10B3/3黒褐色 砂質シルト △5~10mmの小礫5% 細まり有り 粘性やや弱  
△3~5mmの礫5%含む。
- 2 10B3/4黒褐色 砂質シルト △5~10mmの小礫5% しまりやや強 黏性やや弱  
△3~5mmの礫5%含む。

第12図 SI03-04 平面・断面図

- 主軸方位** 東壁より求めると、N-13°Eである。
- 壁** ほぼ垂直に立ち上がり、最も残りが良い東壁付近で壁高は0.11mほどを測る。
- 床 面** 貼り床は確認されなかつた。
- 柱 穴** 確認されなかつた。
- 壁 溝** 確認されなかつた。
- 埋 土** 暗褐色土である。分層には至っていない。
- 厨房施設** 建物の南東隅にカマドが設けられたと考えられるが、焚口部は調査区外に及ぶ。確認された範囲では焚口部から煙道の立ち上がりまで1.22m、最大幅は1.74m、焚口幅0.54m程度であった。東側袖部は地山砂礫層を由来とする礁と粘性のある暗褐色土の構築材で形成される。袖部は暗褐色土と褐色粘土で形成され、火床面は皿状に浅く掘り込まれている。
- 出土遺物** 須恵器壺B蓋1点・壺B身1点・壺H蓋1点・鉢1点・甕5点、土師器甕8点を確認した。8は須恵器壺H蓋である。成形は左回転のロクロナデである。天井部と口縁部の境に凹線を有する。口縁端部は丸くおさめる。時期は7世紀前葉から中葉と推測され、東海地域と越中において生産されている。他の遺物と時期が異なり、SI02の時期と同じであることから、8はSI02からの混入と考えられる。
- 9は須恵器壺B蓋の天井部から口縁部である。成形は右回転のロクロナデである。天井部にはわずかにロクロケズリを1条確認でき、その範囲は狭い。天井部から口縁部では外反し、口縁部で垂下する。屈曲した部分は明瞭で、稜をなす。端部は外反し、内傾する。外面の一部に煤が付着する。また、天井部外面と内面に焼成のあまい部分がみられ、焼成時の重ね焼きの状況が分かる。上には同じ法量の蓋を載せ、径約16cmの壺B身の上に載っていたと推測される。時期は8世紀中葉である。
- 10は須恵器鉢の口縁部から体部である。成形は左回転のロクロナデである。調整は内外面とともに体部下半において縦板ナデを施す。体部の最大径は上位に位置し、口縁部から体部の断面形状はS字状を呈する。口縁部は端部を上方につまみあげているが、部分的にナデ調整を施すことにより、段差が消失する。時期は8世紀前葉から中葉と推測される。
- 11は須恵器甕の胴部片である。成形痕は内外面ともに釉状のもので不明瞭となっているが、平行タタキを確認できる。内面は当具後に板ナデ調整を施す。焼成が不良のため釉状のものは不完全な状態になり、灰色を呈するが、他のものは暗赤褐色や暗灰色に発色する。釉状のものについては第5章において詳述する。
- 12は須恵器甕胴部から底部である。底部は丸底である。破片がSI03とSI04において接合した。成形は内面に当具、外面にタタキであろう。しかし、外面は摩耗により成形痕が確認できない。底部内面には当具後に板ナデを施す。残存部分の内面の上端では横ナデを確認できる。注目点は胎土中に混和材として土師器片が混入していることである(写真図版6)。
- 所 見** 壓穴建物の南東隅近くに設けたであろうカマドを確認した。地山近くまで後世の搅乱を受けており、焼土範囲でおおよその平面の広がりを追って火床面の浅い掘り込みを認識するとともに、断面でかろうじて用材と埋土の違いを把握するに留まった。SI02に切られることと9・10の年代観から、時期は8世紀中葉と考えられる。

**SI04 (第12・13図・写真図版5・7)**

位置層位 13I・13Jにおいて、第V層上面で確認した。

重複関係 SI03 及び SK2 に切られる。

遺存状態 北東側 3 分の 2 を確認した。残りは調査区外である。

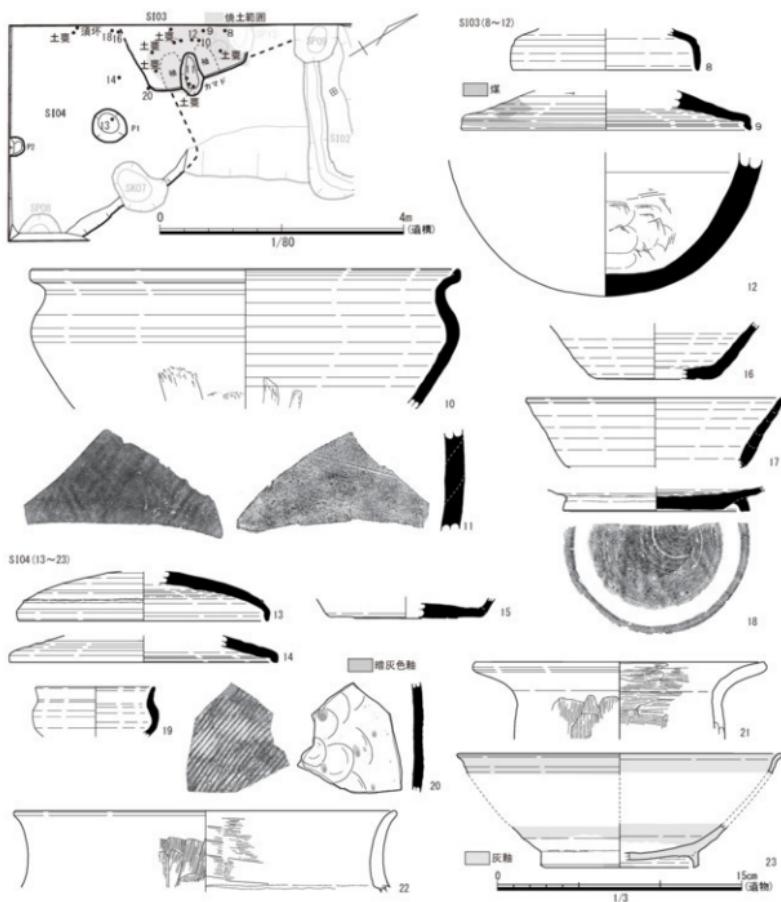
平面形状 確認範囲からは方形を呈するものと考えられる。

規模 確認した範囲で、南北 3.49 m、東西 2.95 m を測る。

主軸方位 東壁より求めると、N-0°-E である。

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、最も残りが良い東壁付近で壁高は約 0.29m を測る。

床 面 貼り床は確認されなかった。



第13図 SI03-04 出土遺物図

- 柱穴** 北東隅のP1、中央東寄り辺のP2の2基を検出した。柱穴は堅穴建物の四隅を中心に配置されたものと考えられる。P2は調査区外に及ぶ。P1は長径0.59m、短径0.53m、深さ0.38mを測る。P2は長径0.31m、確認範囲で短径0.26m、深さ0.26mを測る。全て平面形は円形を呈する。
- 壁溝** 確認されなかった。
- 埋土** 黒褐色土である。分層には至っていない。
- 厨房施設** 確認されなかった。
- 出土遺物** 須恵器坏A2点・坏B蓋2点・坏B身1点・坏類4点・坏H蓋1点・鉢1点・壺1点・甕4点・不明1点・土師器甕8点・灰釉陶器碗1点を確認した。
- 13は須恵器坏B蓋である。つまみを欠損する。成形は右回転のロクロナデである。天井部から口縁部は内湾し、口縁部は垂下する。天井部と口縁部の境は稜を有する。口縁端部は丸くおさめる。天井部の約3分の2にロクロケズリを3回転施し、中央にはつまみの貼付けナデを確認できる。屈曲部のやや上に重ね焼き時の口縁端部の一部が付着し、9と同様の重ね焼き状況を確認できる。器形からは8世紀前葉と推測されるが、これらの特徴は8世紀中葉までみられることから、ここでは8世紀前葉から中葉とする。
- 14は須恵器坏B蓋の天井部から口縁部である。成形はロクロナデを施し、回転方向は不明である。天井部にロクロケズリを確認でき、約2分の1の範囲と推測される。天井部から口縁部は緩やかに外反し、短く垂下する。口縁部と天井部の屈曲部は丸く、口縁部は内側に巻くような形状である。時期は9世紀前葉と推測される。
- 15は坏A体部から底部である。成形は右回転のロクロナデを施す。底部の切り離しはへラ切り技法で、底部にロクロケズリを4回転施す。体部の傾きは不明である。時期は8世紀前葉と推定される。
- 16は坏A体部から底部である。成形は右回転のロクロナデを施す。底部の切り離しはへラ切りである。体部の傾きはやや大きい。時期は8世紀前葉または9世紀前葉から中葉と推定される。
- 17は坏B身口縁部から体部である。成形は右回転のロクロナデを施す。腰部の屈曲は明瞭で稜をなす。体部の傾きは大きく、器高がやや低い。口縁部には重ね焼きの痕跡があり、焼成時に蓋を被せていたと推測される。時期は8世紀前葉である。
- 18は須恵器坏B身底部である。成形は右回転のロクロナデで、底部の切り離しは糸切りである。底部は糸切り後、縁辺にロクロケズリを2回転施し、中央は糸切り痕を残す。高台は方形で高い。貼付け位置が体部になるため高台と底部の間が構状を呈する。体部の器壁は薄い。時期は、猿投窯跡群の岩崎25号窯式にも確認でき、このことから8世紀中葉と推定される。
- 19は須恵器小型鉢である。底部を欠損する。成形は右回転のロクロナデを施す。体部は中位で最大径となり、口縁部から体部の断面形状はやや崩れたS字状を呈する。時期は、猿投窯跡群の岩崎45号窯に類似した器種を確認でき、このことから9世紀前葉と推定される。
- 20は須恵器甕胴部片である。器壁は薄い。成形は、外面に平行タタキ、内面に当具を施す。当具は無文で、後にナデを施す。外面に暗灰色の釉、内面に暗灰色の釉の滴を確認できる。
- 21は土師器甕口縁部から胴部である。口縁部は下方に屈曲し、端部は面取りにより方形

を呈する。胴部は欠損しているが、寸胴を呈すると推測される。外面は口縁部にナデ、頸部から胴部に縦ハケメを施し、内面には横板ナデを施す。時期は7世紀から8世紀と推定される。

22は土師器甕口縁部である。口縁部は緩やかに外湾し、端部は丸くおさめる。頸部には口縁部との接合痕の段差が生じる。外面には口縁端部にナデ、下部に縦ハケメを施し、内面には横板ナデを施す。時期は7世紀から8世紀と推定される。

23は灰釉陶器碗である。実測図は底部と口縁端部の2個体で復元したもので、胎土が類似することから同一個体と判断した。口縁部は外反し、内外面には灰釉を確認できる。底部は外面にクロコケズリを施し、底部と体部の境に高台を貼付ける。高台は内端接地で、端部はとがる。外観はほぼ垂直であるが、内面は弓形である。灰釉は体部外面と内面に確認でき、見込み部にはみられない。ハケ塗りか浸け掛けかの区別は不明である。時期は黒窯90号窯式期で、9世紀中葉から後葉と推定する。

**所 見** 断面C-C'でSI04はSI03に切られることを確認したが、床面近くまで削平を受けていたため平面的に切り合いを確認することができなかった。SI03に切られること13・16・17・18の年代観から、8世紀前半のものと考えられる。なお、SI04では8世紀前葉から9世紀後葉にかけての遺物が出土し、約200年間の年代幅をもつことになる。時期の中心は8世紀前葉から中葉と9世紀前葉から中葉の2時期にある。遺構は大きく搅乱を受けていたこともあり、2時期の建物が存在した可能性も考えられる。

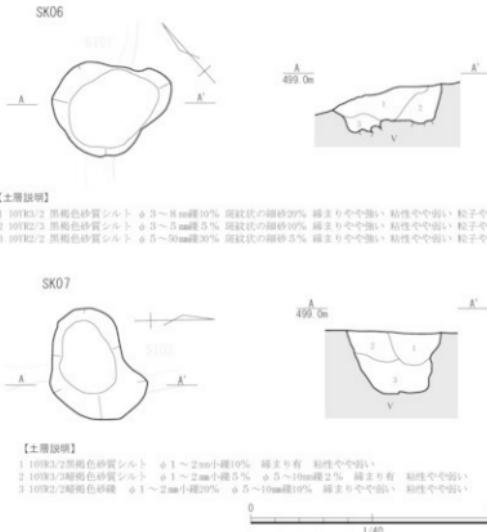
### (3) 土坑

#### SK06(第14図・写真図版6)

14G・14Hに位置する。第IV層上面で確認し、SI01を切る。平面形は不整形を呈し、規模は長径0.98m、短径0.82m、深さ0.36mを測る。壁はやや開き気味に立ち上がり、底面は第V層砂礫層まで達し、平坦である。埋土は3層に区分されるが、層界は不明瞭である。出土遺物はなく、時期は不明である。しかし、SI01を切っていることから古墳時代以降と推測される。

#### SK07(第14図・写真図版6)

13Iに位置する。第V層上面で確認し、SI04を切る。平面形は不整形を呈し、規模は長径0.95m、短径0.79m、深さ0.50m



第14図 土坑平面・断面図

を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、段を有する。底面は平坦である。埋土は3層に区分される。遺物は須恵器杯類1点・甕1点、土師器甕1点が出土した。時期はSI04を切っていることから8世紀中葉以降と推測される。

#### (4) 集積遺構

##### SX05 (第15図、写真図版6・7)

14Hに位置する。第IV層上面で1.42m、1.25mの範囲に15cm大の礫が集まる。礫は南辺に集中し、中央部分には疎らである。掘り込みを確認することはできなかった。遺物は須恵器瓶類1点・甕1点・不明1点、灰陶陶器瓶類1点が出土し、その状況を第15図に図示した。

24は瓶の底部である。成形は左回転のロクロナデである。底部と胴部の境にはロクロケズリを施し、面を有する。底部の切り離しは糸切り技法である。内面には焼成時の灰やスサ入壁片が粒状に降灰する。器種は不明であるが、底部の形状から手付瓶のような瓶類と推測される。また、種別は一見すると須恵器のようであるが、時期は9～10世紀と推定される。

25は甕胴部下半である。外面は平行タタキを格子状に施し、内面は横板ナデを施す。当具痕の凹凸は確認できないが、当具後に板ナデ調整を施していると推測される。

遺構の時期は出土遺物から9～10世紀頃と考えられる。

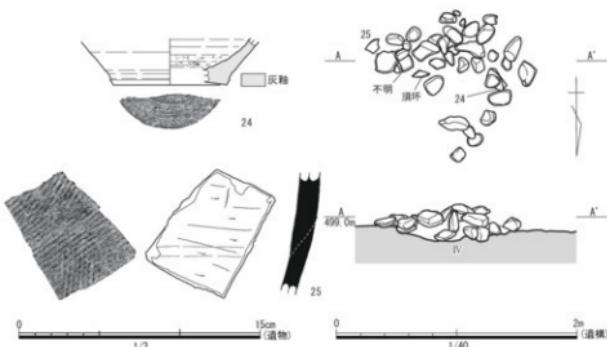
#### (5) 遺構外出土遺物 (第16図、写真図版7)

遺構外出土遺物は遺構内で出土していない器種や本調査区で特徴的なものを選別した。

26は須恵器坏口蓋である。成形は右回転のロクロナデを施す。天井部の調整は確認できない。天井部と口縁部の境に稜ではなく、内湾する。口縁端部は丸くおさめる。時期は7世紀前葉から中葉と推定される。

27は須恵器坏口蓋である。成形はロクロナデで、回転方向は不明である。天井部の調整は確認できない。天井部と口縁部の境に稜と凹線を確認できる。口縁端部は丸くおさめる。時期は7世紀前葉から中葉と推定される。

28は須恵器坏口身である。成形は左回転のロクロナデを施す。底部の切り離し及び調整は不明で



第15図 SX05 平面・断面図、出土遺物図

ある。受部は、端部がやや肥厚し、内湾する。立ち上りは短く内傾し、端部を丸くおさめる。時期は7世紀前葉と推定される。

29は須恵器坏G蓋である。つまみを欠損する。成形は右回転のロクロナデを施す。天井部は低く内湾する。かえりはやや内傾し、先端は尖る。かえりは口縁部からやや下へ出る。調整は天井部の6分の5程度にロクロケズリを8回転細かく丁寧に施す。時期は7世紀中葉から後葉と推定される。

30は須恵器坏G身である。成形は右回転のロクロナデを施す。体部は緩やかに内湾し、口縁部では弱く外反する。口縁端部は内傾し、面の中央に凹線がみられる。時期は7世紀中葉から後葉と推定される。

31は須恵器坏B蓋である。つまみを欠損する。成形は右回転のロクロナデを施す。天井部から口縁部は低く緩やかに内湾する。天井部と口縁部の境は明瞭で、垂下する。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。調整は天井部の約2分の1にロクロケズリを3回転施す。天井部の中央にはつまみの貼付けナデを確認できる。時期は8世紀中葉である。

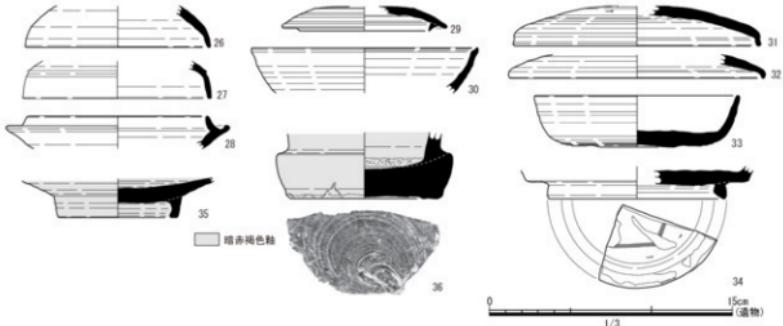
32は須恵器坏B蓋である。天井部の大半を欠損し、残存部分の端にロクロケズリをわずかに確認できる。成形は右回転のロクロナデを施す。天井部から口縁部は低く内湾する。天井部と口縁部の境は不明瞭で内湾し、短く垂下する。口縁部は丸くおさめる。屈曲部の内面は丸みをおび、境は不明瞭である。時期は9世紀前葉から中葉と推定される。

33は須恵器坏Aである。成形は右回転のロクロナデを施す。底部の切り離しはヘラ切り技法で、その後ナデ調整を施す。器高は低く、体部の傾きは小さい。時期は8世紀中葉と推定される。

34は須恵器坏B身底部である。底部に墨書を確認できる。墨書は「口」の下部と推定されるが、全体は不明である。成形は右回転のロクロナデを施す。底部にはロクロケズリを施しており、切り離し技法は不明である。高台は外端接地面で内傾し、底部のやや内側に貼付けられる。底部と体部の境は明瞭で棱を有する。時期は8世紀前葉から中葉と推定される。

35は須恵器盤と考えられる。成形は右回転のロクロナデを施す。底部にはロクロケズリを施しており、切り離し技法は不明である。高台は長く、底部と体部の境に貼付けられる。高台の底面は平坦で、両端接地面である。外面は内傾し、内面は内湾する。体部の器壁は薄く、残存部分の端では上方にわずかに屈曲する。全面に赤褐色釉を確認できる。時期は8世紀代と推定される。

36は須恵器鉢である。成形は右回転のロクロナデを施す。底部の切り離しは糸切り技法である。



第16図 遺構外出土遺物図

第3表 第28～30次調査遺構一覧表

遺構名	グリッド	検出面	層位	形状	法量 (cm)			出土遺物	備考	
					平面	断面	長径	幅	深さ	
S1 01	G-H 14	IV	1	方形 方形	(4, 14)		(1, 04)	0.14	上: 2点	第28～30次
S1 02	H-I 13-14	IV	1	方形 方形			5.50	(2, 97)	0.09	同じ: 3点・壁1点、上: 1点・底2点・壁10点
カマツ	H 14	—	4	—	遺台形		(0, 80)	0.78	0.61	第28～30次
F 1	H 14	—	2	不定形 遺台形			0.93	0.69	0.40	第28～30次
F 2	H 14	—	2	不定形 平円形			0.78	0.51	0.48	第28～30次
壁構	H-I 13-14	—	1	方形 平円形	(0, 09)	(0, 19)～(0, 32)	0.11	—	—	第28～30次
無段	カマツ 1	I 13	—	3 不定形 平円形	(1, 74)		(1, 22)	0.11	—	第28～30次
S1 04	I-J 13	IV	1	方形 平円形	(3, 49)		(2, 95)	0.16	—	第28～30次
無段	F 1 I 13	—	1	円形 平円形	0.59		0.53	0.38	同じ: 1点・底4点・壁1点・壁6点、同じ: 1点	第28～30次
F 2	I-J 13	—	2	円形 平円形	0.31		(0, 26)	0.26	—	第28～30次
SK 05	H 14	IV	—	不定形	1.42		1.25	0.32	同じ: 壁1点・壁1点・底1点、同じ: 壁1点	第30次
SK 06	G-H 14	IV	3 不定形 遺台形	0.98		0.82	0.36	—	—	第30次
SK 07	I 13	IV	3 不定形 遺台形	0.95		0.79	0.50	—	—	第30次
SP 08	I-J 13	IV	1 不定形 平円形	0.69		(0, 31)	0.39	—	—	第30次
SP 09	H-I 13	IV	1 不定形 平円形	0.71		(0, 62)	0.39	—	—	第30次
SP 10	H 14	IV	—	不定形 —	0.52		0.57	—	—	第30次
SP 11	H 14	IV	—	不定形 —	(0, 40)		0.36	—	—	第28次
SP 12	H 14	IV	1 不定形 平円形	0.32		0.27	—	—	—	第28次
SP 13	H 14	IV	1 圓形 平円形	(0, 40)		0.43	0.22	—	—	—

第4表 第28～30次調査遺物観察表

番号	種類	遺物名	法量 (cm)	形状・特徴・調査場所		出土	構成	色調	検出面	備考
				内面	外側					
1	土器	S101 (G-I, 10, 10) (2, 20)	鉢	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	直角	直角	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	上: 2点	KMD-4
2	土器	S102 (G-I, 10, 10) (2, 20)	鉢	クロナツ	内: 地白 外: 黄褐色	直角	直角	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	上: 1点	KMD-18 クロマツ
3	土器	S103 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-8
4	土器	S104 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-10
5	土器	S105 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-26
6	土器	S106 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-27 KMD-28
7	土器	S107 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-29
8	土器	S108 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-30
9	土器	S109 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-31
10	土器	S110 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-32 KMD-33
11	土器	S111 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-34
12	土器	S112 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-35 KMD-36
13	土器	S113 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-37 KMD-38
14	土器	S114 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-39 KMD-40
15	土器	S115 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-41 KMD-42
16	土器	S116 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-43 KMD-44
17	土器	S117 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-45 KMD-46
18	土器	S118 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-47 KMD-48
19	土器	S119 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-49 KMD-50
20	土器	S120 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-51 KMD-52
21	土器	S121 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-53 KMD-54
22	土器	S122 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-55 KMD-56
23	土器	S123 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-57 KMD-58
24	土器	S124 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-59 KMD-60
25	土器	S125 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-61 KMD-62
26	土器	S126 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-63 KMD-64
27	土器	S127 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-65 KMD-66
28	土器	S128 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-67 KMD-68
29	土器	S129 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-69 KMD-70
30	土器	S130 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-71 KMD-72
31	土器	S131 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-73 KMD-74
32	土器	S132 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-75 KMD-76
33	土器	S133 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-77 KMD-78
34	土器	S134 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-79 KMD-80
35	土器	S135 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-81 KMD-82
36	土器	S136 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-83 KMD-84
37	土器	S137 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-85 KMD-86
38	土器	S138 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-87 KMD-88
39	土器	S139 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-89 KMD-90
40	土器	S140 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-91 KMD-92
41	土器	S141 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-93 KMD-94
42	土器	S142 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-95 KMD-96
43	土器	S143 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-97 KMD-98
44	土器	S144 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-99 KMD-100
45	土器	S145 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-101 KMD-102
46	土器	S146 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-103 KMD-104
47	土器	S147 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-105 KMD-106
48	土器	S148 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-107 KMD-108
49	土器	S149 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-109 KMD-110
50	土器	S150 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-111 KMD-112
51	土器	S151 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-113 KMD-114
52	土器	S152 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-115 KMD-116
53	土器	S153 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-117 KMD-118
54	土器	S154 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-119 KMD-120
55	土器	S155 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-121 KMD-122
56	土器	S156 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-123 KMD-124
57	土器	S157 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-125 KMD-126
58	土器	S158 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-127 KMD-128
59	土器	S159 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-129 KMD-130
60	土器	S160 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-131 KMD-132
61	土器	S161 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-133 KMD-134
62	土器	S162 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-135 KMD-136
63	土器	S163 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-137 KMD-138
64	土器	S164 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-139 KMD-140
65	土器	S165 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-141 KMD-142
66	土器	S166 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-143 KMD-144
67	土器	S167 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-145 KMD-146
68	土器	S168 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-147 KMD-148
69	土器	S169 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-149 KMD-150
70	土器	S170 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-151 KMD-152
71	土器	S171 (G-I, 10, 10) (2, 20)	盆	カマツ	内: 地白 外: 黄褐色	平行	平行	PV-外周: 0.05cm 黄褐色	直角	KMD-153 KMD-154
72	土器	S								

底部の器壁は厚い。全体的な形状は古墳期からみられる鉢と類似するが、底部に刺突痕を確認できない。底部内面にはリング状に砂丘状の痕跡がみられ、また灰や釉が発泡したような痕跡もみられる。これらのことから、中に碗や皿などの小型品を入れたとも推察され、サヤ鉢として使用されていたと考えられる。全面に暗赤褐色釉を確認できる。時期は8世紀代と推定される。

### 第3節 第33次調査

#### (1) 遺構・遺物の概要

**遺構** 本調査区と第37次調査区の間に段丘崖があり、本調査区は下位段丘面の端に立地する(第7図)。本調査区では竪穴建物3軒、掘立柱建物1棟、土坑3基、溝5基、柱穴11基の合計23基検出した。遺構は溝と竪穴建物と掘立柱建物の大きく3種類に分かれ、重複関係から遺構の変遷を概観する。

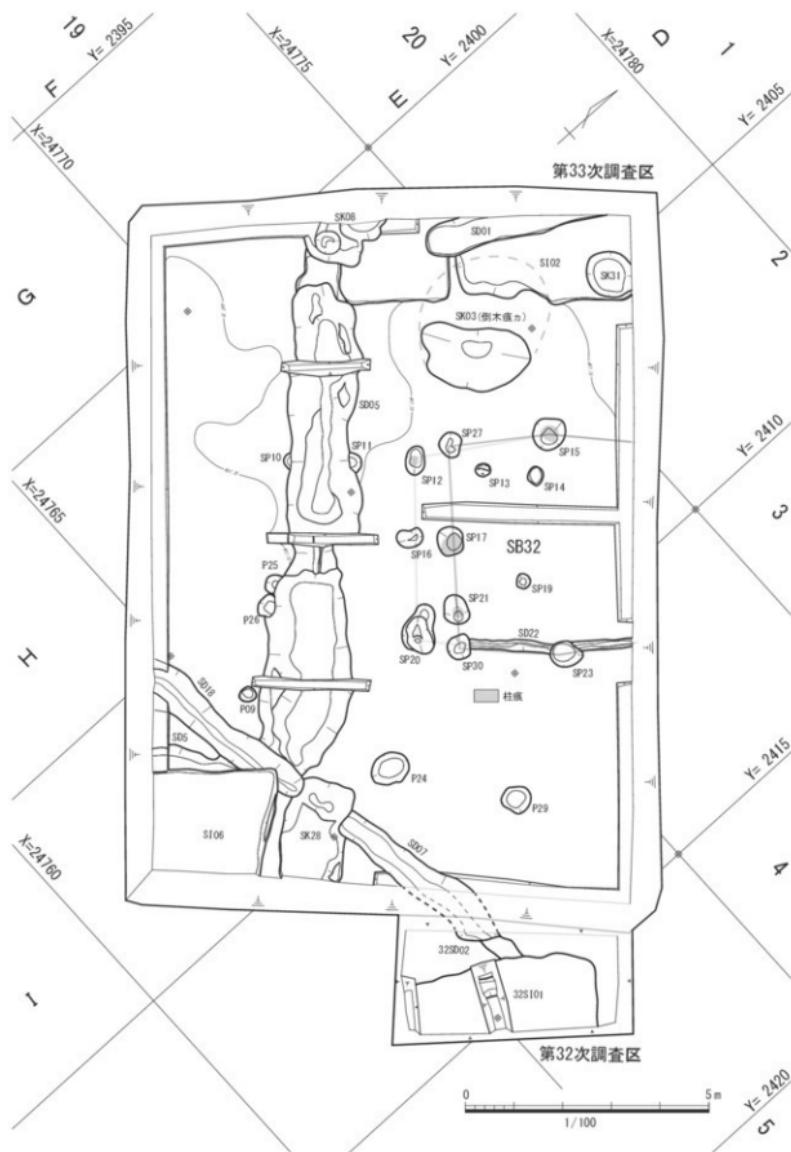
最も古く位置づけられる遺構はSD05である。SD05は、平面形状が不整形で、底面に凹凸がみられ、土坑が連結した形状を呈する溝である。SK03の平面形は三日月状を呈し、断面においても土層が不明瞭であり、さらにSI02の一部が不整形になっているため倒木痕の可能性もある。これに続く遺構はSD07で、SD05を切り、SK28に切られる。これにより、SK28とSD05には時期差が生じることになるので、別遺構と判断した。SD07を切る遺構として、SK28とSI06・33がある。SI02は重複しないが、軸方向が同じであることからここに含める。続くものとして、SD01がくる。SB32は現状どこに置くのか判断できないが、状況から竪穴建物と同じにするのが適当ではないかと考える。

以上から、SD05→SD07→竪穴建物→掘立柱建物→SD01と遺構の変遷をみることができる。

**遺物** 本調査区では須恵器・土師器が出土し、灰釉陶器・綠釉陶器・舶載磁器はみられない。出土種別の割合は須恵器が3割、土師器が7割と、土師器の割合が多いことを特徴とする(第5表)。時期は6世紀後葉から7世紀前葉と一部8世紀を含む。竪穴建物では高环と壺・碗類・甕の器種構成で、その他の遺構でも概ね一致する。また、須恵器は溝と遺構外からの出土で、竪穴建物から出土してい

第5表 第32・33次調査出土遺物集計表

種別 器種	須恵器										土師器					計
	壺H	壺G	壺A	壺B	壺・碗類	平底碗	瓷器系	鉢	壺・瓶類	甕	赤彩	碗	壺・碗類	高环	甕	
	蓋	身	蓋	身			碗	皿								
SI02																4
SI06		1										1	26	2		30
32S101												1		4		5
SB32												3				3
SD01												5				5
SD05										1		3				4
SD07														1		1
SP09												1				1
遺構外	1					19				1	4	2		17		44
器種計	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	45	2	22	97
割合	1%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	20%	0%	0%	0%	0%	46%	2%	23%	100%
種別計						23						74				97
割合						24%						76%				100%



第17図 第32-33次調査区全体図

ないことも注目される。本調査区の遺物の時期は概ね6世紀後葉から7世紀前葉の範疇におさまり、遺構の変遷もこの時期幅の中におさまると考えられる。

## (2) 竪穴建物

### S102 (第18図・写真図版9)

位置層位 1E・1F・2E・2Fにおいて、第IV層上面で確認した。

重複関係 SD01に切られる。

遺存状態 南西側5分の1を確認した。残りは調査区外である。

平面形状 方形プランである。

規模 確認された範囲で南北3.62m、東西1.73mである。

主軸方位 N-45°-Eである。

壁 やや開きぎみに立ち上がり、最も残りが良い南隅付近で壁高は0.08mを測る。

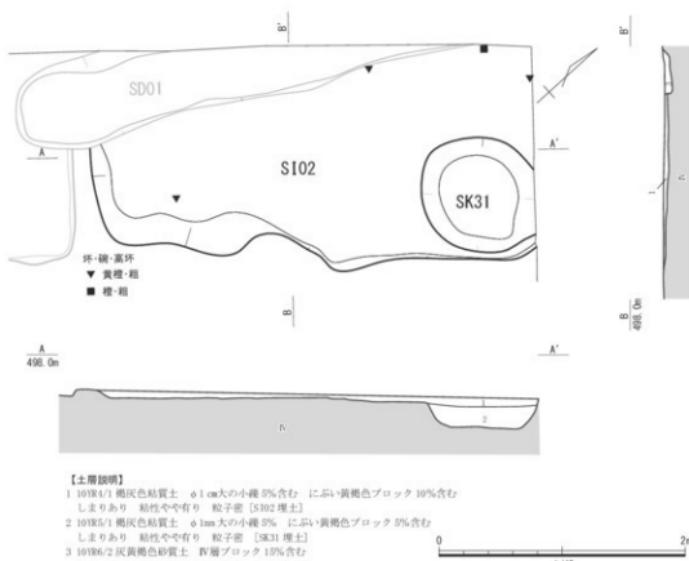
床面 確認されなかった。

柱穴 柱穴は確認されなかつたが、床面でSK31を確認した。長径0.90m、短径0.85m、深さ0.23mを測り、平面形状は概ね円形を呈する。

周溝 確認されなかつた。

埋土 褐色粘質土を呈し、分層には至っていない。

厨房施設 確認されなかつた。



第18図 S102 平面・断面図

- 遺 物** 遺物は器種判別不明な土師器を4点出土した。壺・碗・高壺のいずれかの可能性が高い。いずれも胎土は粗い。色調は黄橙色と橙色を呈するが、まとまりある分布を見出すことはできない。
- 所 見** SK31はSI02の下層に位置し、SI02に伴うものと考えられた。SI02の南東端が乱れていることに関して、SK03が倒木痕であった場合、その影響を受けた可能性も想定される。

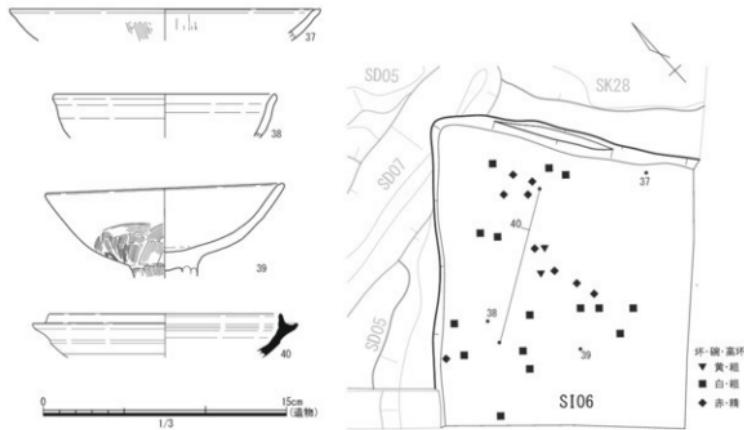
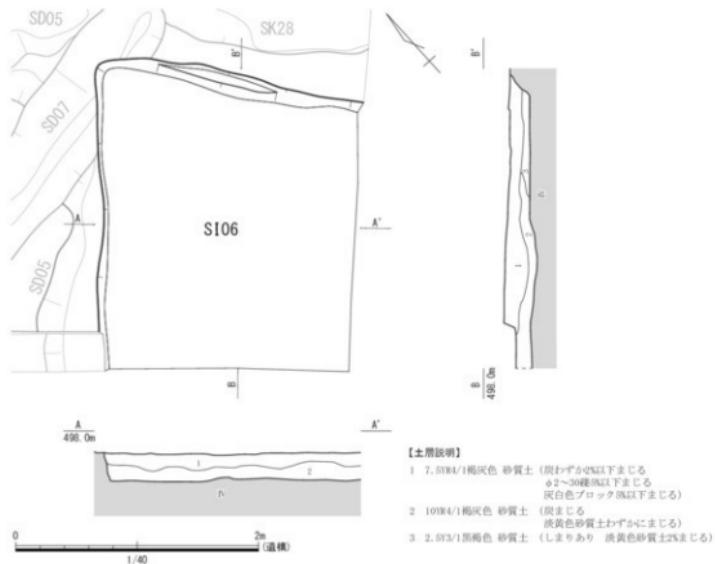
**S I O 6** (第19図・写真図版7・9)

- 位置層位** 2Hにおいて、第IV層上面で確認した。
- 重複関係** SD05・SD18を切る。
- 遺存状態** 北側5分の2を確認した。残りは調査区外である。
- 平面形状** 方形プランである。
- 規模** 確認された範囲で南北2.50m、東西2.30mである。
- 主軸方位** N-41°-Eである。
- 壁** 開きぎみに立ち上がり、最も残りが良い西壁で壁高は0.20mを測る。
- 床 面** 贊床は確認されなかった。
- 柱 穴** 確認されなかった。
- 壁 溝** 確認されなかった。
- 埋 土** 3層に区分される。上層では炭化物が若干混入する。遺物は細片が多く出土した。
- 厨房施設** 確認されなかった。
- 遺 物** 土師器の破片を28点と須恵器壺II身1点が出土した。その内、器種が判別可能で実測可能なものを選別し、37～40を図示した。第19図には出土状況図を図示した。実測したもの以外は小片のため、胎土・色調により分類した。1つ目は黄色・粗いもの、2つ目は白色・粗いもの、3つ目は赤色・精製のもの。器種はすべて壺・碗・高壺と考えられ、甕はみられない。
- 37は土師器高壺の口縁部片である。口縁端部は横ナデを施すことにより、弱く外反する。口縁部下半はやや内湾し、内面に縦位板ナデ、外面に縦位ハケメを施す。
- 38は土師器碗の口縁部から体部片である。全体的に摩耗を受けているため、調整等は不明である。口縁部はやや外反する。
- 39は土師器高壺の壺部である。全体的に摩耗を受けているため、調整等は不明瞭である。壺部外面には放射状にハケメを外から内側へ施される。脚部は縦位ハケメを施す。
- 40は須恵器壺II身の口縁部から体部片である。立ち上がりは短く、ほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸くおさめる。受け部の端部は上方に折り曲げる。体部はやや内湾し、口縁部との境で外反する。体部外面にはわずかにロクロケズリを確認できる。
- 所 見** 37～40は概ね6世紀後葉から7世紀前葉と推定され、良好な一括資料である。遺構の時期も遺物の年代観から6世紀後葉から7世紀前葉のものと考えられる。

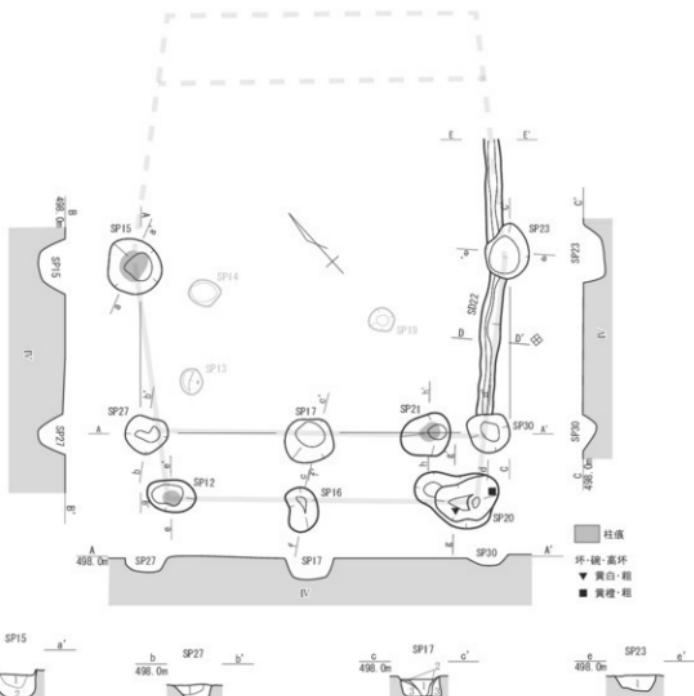
## (3) 挖立柱建物

**S B 3 2** (第20図・写真図版10)

- 位置層位** 1F・2F・3F・2Gに位置し、柱穴は第IV層上面、SD22は第IIIa層上面で確認した。
- 柱穴構成** SP15・27・17・30・23(SB32-1)で、南側にSP12・16・20(SB32-2)へ拡張すると推測される。

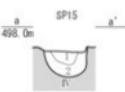


第19図 SI06平面・断面図、出土遺物図



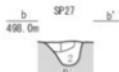
## 【P15土層説明】

- 1 10YR4/2褐色灰色砂質土  
1cm大の小礫10% [柱痕]
- 2 7.5YR8/3に5~6cm褐色砂質土  
粒φ2~30 15%混 IV層5%混



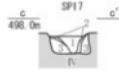
## 【P27土層説明】

- 1 10YR5/1褐色灰色砂質土 1cmの大さの小礫20%まじる
- 2 7.5YR5/3に5~6cm褐色砂質土 1層30%まじる



## 【P17土層説明】

- 1 10YR5/2褐色灰色砂質土 1cmの大さの小礫10% [柱痕抜取底]
- 2 7.5YR4/1褐色灰色砂質土  
粒φ2~30 15%混 IV層5%混 [柱材抜取底]
- 3 10YR5/1褐色灰色砂質土 粒φ2~10 5%



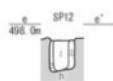
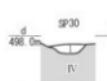
## 【P23土層説明】

- 1 10YR5/1黒褐色灰色砂質土  
0.5cm大の小礫20%



## 【P30土層説明】

- 1 10YR4/1黒褐色砂質土  
0.5cm大の小礫20%



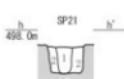
## 【P20土層説明】

- 1 10YR5/1褐色灰色砂質土
- 2 10YR5/1褐色灰色砂質土  
1cmの大さの小礫10%
- 3 10YR7/6明黃褐色砂質土  
10YR5/1褐色灰色砂質土20%



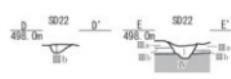
## 【P21土層説明】

- 1 10YR3/1黒褐色結質土[柱痕]
- 2 7.5YR4/1褐色灰色砂質土  
IV層ブロック5%混



## 【P22土層説明】

- 1 10YR4/1褐色灰色砂質土



0 1 2m  
1/60

第20図 S832 平面・断面図

また、SP21・P30 は柱間 0.7m と狭いが直線上に並ぶ。SP20 は 2 基重複している可能性がある。SP30 と SP23 をつなぐ SD22 を検出している。これは布掘状と仮定すると建物基礎の一部と考えることもでき、SD22 を SB32 の中に記載した。

**重複関係** 確認されなかった。

**遺存状態** 南西側 1 間 2 間分を確認し、2 間 2 間の棟持柱建物と想定される。

**規模** SB32-1 は梁行・桁行ともに 2.0 ~ 2.2m、全長 4.0 ~ 4.4m 四方を測る。SB32-2 は梁行 2.9 ~ 3.0m、桁行 1.6 ~ 2.1m で、全長梁行 5.8 ~ 6.0、桁行 3.2 ~ 4.2m を測る。SD22 は現存長 3.80 m、最大幅 0.23 m、最大深 0.08 m を測る。

**主軸方位** N-41°-E である。

**掘り方** 柱穴の平面形状は不整梢円形を呈する。規模は直径 0.6m 程度、深さは最大でも 0.31m である。SP12・15・21 では柱材を褐色砂質土で埋めた状況を確認した。

**遺物** SP20 から土師器片が 2 点出土した。器種・時期は不明確である。

**所見** SD22 は III a 層から掘り込まれているため、奈良時代以降と推定される。

#### (4) 連結土坑状溝（土坑・溝）

**SD05** (第 21 図・写真図版 7-11)

**位置層位** 1F、1G、2G にかけて直線的に延び、ほぼ直角に折れて 2H を通り調査区南西壁に続く。第 III b 層上面で確認した。

**重複関係** SI06 と SD18 に切られる。

**遺存状態** グリッド 2G で直角に折れる。約 2.0 ~ 2.5m の深い部分、約 0.3 ~ 0.5m の浅い部分が交互に連結し、グリッド 1F で閉じる。遺構は調査区外へ続くと想定され、全体形状は不明である。

**規模** 南北方向の現存長 10.10 m、最大幅 1.92 m、最大深 0.49 m を測る。

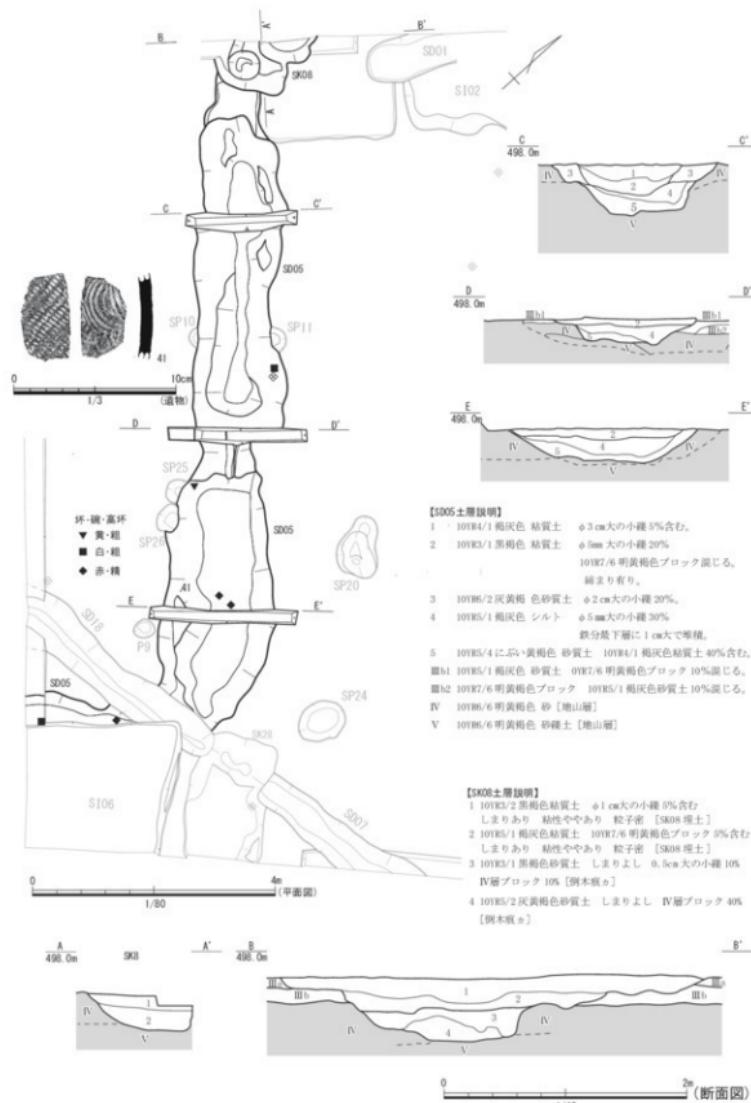
**主軸方位** N-41°-E である。

**断面形状** 半円形を呈する。

**埋土** SD05 は 5 層に区分され、層界は明瞭である。断面 C-C' では 1・2 層、3 層、4・5 層の 3 つに分かれ、4・5 層が堆積した後と、3 層が堆積した後に掘削しているようである。これは一度埋まった後に、もう一度掘り返している痕跡と考えられ、少なくとも 3 度の掘削・埋没を繰り返して溝状を呈したと推察される。このため浅い部分と深い部分が交互に生じることになったと理解することができる。

**遺物** 土師器片 6 点・須恵器甕 1 点が出土した。41 は須恵器甕の胴部片である。外面に格子目タキ、内面に同心円文当具を観察できる。

**所見** 古墳時代後期の SI06 に切られるため、それ以前のものと考えられる。調査時は直角に屈曲する形状や、調査区内で掘り残されている箇所があることから、方形周溝墓の可能性を想定していた。一方 SK08 と同一遺構と想定することも可能である。SK08 は SD05 の延長上に位置する。断面 B-B' の 2 層底面レベルと SD05 底面レベルが一致する。また、断面 B-B' の 3・4 層は地山層を抱きかかえているようにみえ、土層が不明瞭であることから倒木痕の可能性がある。このため SK08 は倒木痕の上に SD05 の一部として掘削された遺構の可能性も想定される。仮に SK08 が SD05 と同一遺構とすると、SK08 は壁面において北へ方向を変えていることから、方形周溝墓の可能性は否定され、クランク状を呈する溝となる。



第21図 連続土坑状溝 (SD05・SK08) 平面・断面図、出土遺物図

## (5) 溝

## SDO 1 (第22図・写真図版9)

位置層位 1Fから1Eにかけて直線的に延び、調査区外へ続く。第III b層上面で確認した。

重複関係 SI02を切る。

規模 現存長3.80m、最大幅0.65m、最大深0.28mを測る。

主軸方位 N-25°-Eである。

断面形状 半円形を呈する。

埋 土 黒褐色を呈し、單層である。

遺 物 土師器片5点が出土しているが、小片のため、詳細不明である。

所 見 III a層に覆われており、III b層を切り込んでいることから、奈良時代以前と考えられる。

## SDO 7 (第23図・写真図版8)

位置層位 1H・2H・2G・3G・3Hに位置する。第III a層上面で確認した。

遺存状態 SD18とSD07の軸線及び検出面が同じであるため、同一遺構と考えられる。SD07とSD8の間には掘り残しがある。SD07は32SD02に続いていると考えられる。

重複関係 SD18はSI06に切られ、SD05を切る。32SD02は32SI01に切られる。

規模 現存長10.15m、最大幅0.65m、最大深0.33mを測る。

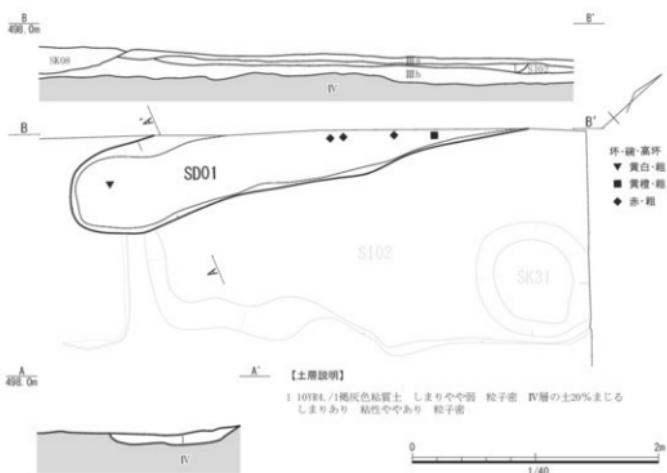
主軸方位 N-83°-Eである。

断面形状 逆三角形を呈する。

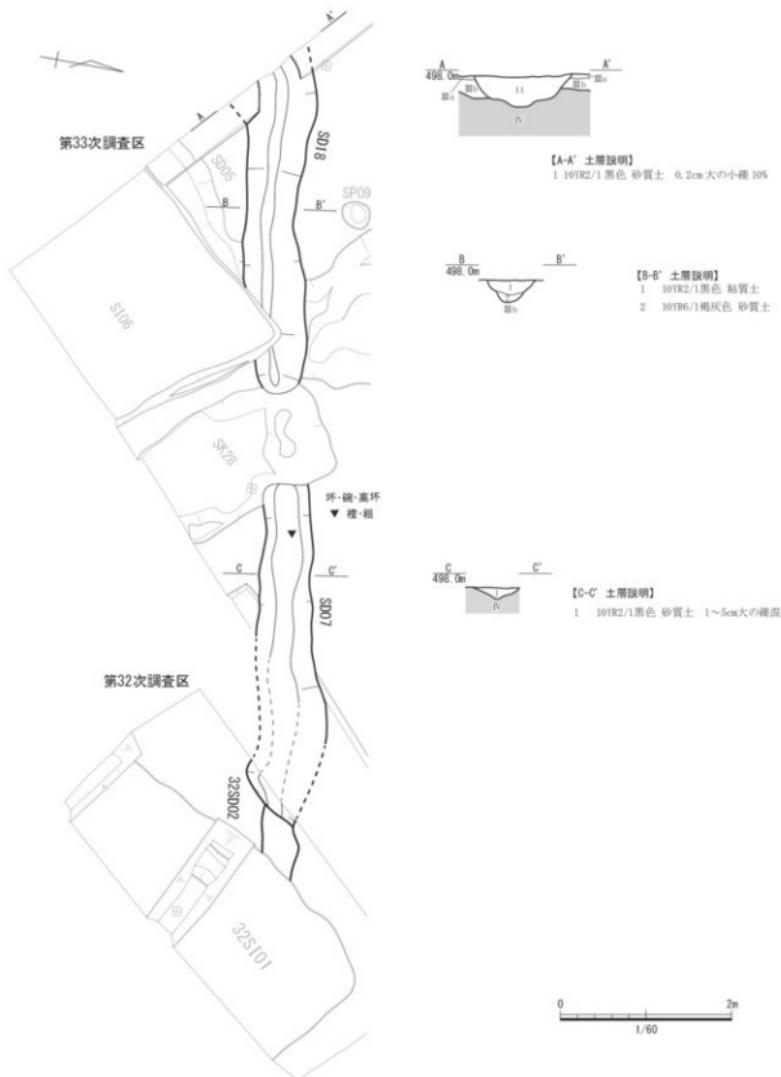
埋 土 黒褐色土を基調とし、2層に分かれる。

遺 物 土師器片が1点出土しているが、小片のため、詳細不明である。

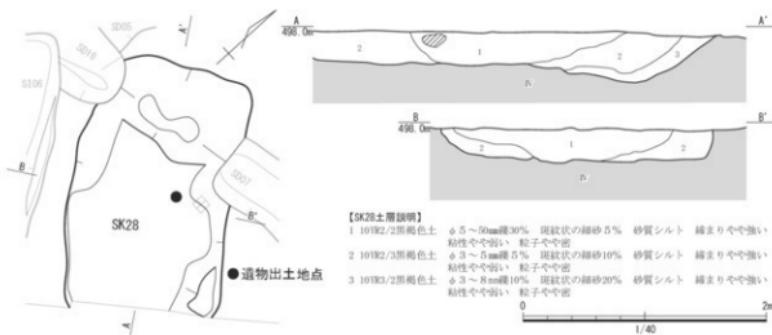
所 見 出土遺物はSK28の土師器片と類似したこと、切り合い関係から古墳時代後期と推定される。



第22図 SD01 平面・断面図



第23図 SD07 平面・断面図



第24図 SK28平面・断面図

## (6) 土坑

## SK28 (第24図、写真図版9)

位置層位 2G・2H・3Hに位置し、第IV層上面で確認した。

遺存状態 東側は調査区外へ続く。

重複関係 SD07・18に切られる。

平面形状 方形を呈する。

規模 確認した範囲で長径2.10m、短径1.30m、深さ0.20mを測る。

壁 開き気味に立ち上がる。

埋 土 黒褐色を基調とし、3層に区分される。

遺 物 土師器片が8点出土している。器種判別は困難であるが、他の遺構出土の遺物から、黄白・粗が2点、橙白・粗が2点、黄橙・粗が2点、褐・粗が1点、黄橙・精が1点で、器種は壺・碗・高壺の可能性が高く、甕も含まれていると考えられる。黄橙・精は壺または碗であろう。

所 見 明確に時期判別可能な遺物はみられないが、胎土等から6世紀代と推定される。

## (7) 遺構外出土遺物 (第25図、写真図版7)

土師器壺または碗4点・甕17点・不明2点、須恵器壺H蓋1点・壺または碗6点・甕1点・不明13点が出土した。

42は須恵器壺H蓋のつまみである。つまみは、断面形状が三角形で、中央が凹んだ環状を呈する。時期は6世紀代と推定される。その他の遺物は時期不明のものが大半を占め、概ね6世紀から8世紀の間に集約する。



第25図 遺構外出土遺物図

第6表 第32・33次調査遺構一覧表

遺構名	グリッド	棟出番	層位	形状		法量(m)			出土遺物	備考
				平面	断面	長径	短径	深さ		
SI 02	1・2 E-F	IV	1	方形	方形	(3.62)	(1.73)	0.68	漆器、土、土和壁、灰、長角骨質、山、山葉根 有刺貝、鐵、鐵劍頭	
施設 SK31	2 E	—	1	円形	半円形	0.90	0.85	0.23	土:环柄輪4点	
SI 06	2 H	IV	3	方形	方形	(2.50)	(2.30)	0.24	土:环柄輪6点	
32 SI 01	3・4 G-H	IIIb	5	方形	方形	(4.23)	(2.87)	0.47	土:环柄輪1点・櫛4点	SD05-SD18を切る。
施設 施設	3 G	—	1	直線	半円形	(0.31)	0.49	0.16		第32次
SD 01	1-E-F	IIIc	1	直線	半円形	3.80	0.65	0.28	土:櫛6点	SD02を切る。
SD 05	1・2 E-H	IIIb	5	L字状	半円形	10.10	1.92	0.45	土:櫛1点、土:环柄輪6点	
SD 07	2・3 G	IIIc	1	直線	逆三角形	3.05	0.65	0.33	土:櫛1点	SD18・第32次SD02と同一 第32次、SD07・SH18と同一
32 SD 02	3 G	IIIc	1	直線	逆三角形	1.15	0.45	—		第32次SD02・SD07と同一
SD 18	2 H	—	1	直線	逆三角形	4.10	0.65	0.33		
SK 03	1 F	IV	3	不定形	逆三角形	2.10	1.00	0.60		倒木楕カ
SK 08	1 F	IIIb	2	不定形	半円形	1.60	0.80	0.34		SD05と同一カ
SK 28	2・3 G-H	IV	3	方形	逆台形	2.10	1.30	0.20	土:环柄輪8点	
SB 32-1	—	IV	—	—	—	幅:2.0~2.2	厚:2.0~2.2			2間2開
SP 15	2 F	IV	2	円形	半円形	0.67	0.60	0.35		
SP 27	2 F	IV	2	円形	半円形	0.50	0.48	0.25		
SP 17	2 F	IV	3	円形	半円形	0.60	0.55	0.27		
SP 30	2 G	IV	1	円形	半円形	0.55	0.45	0.22		
SP 23	3 F	IV	1	円形	半円形	0.68	0.55	0.25		
SP 21	2 G	IV	1	円形	半円形	0.55	0.50	0.33		
SB 32-2	—	IV	—	—	—	幅:2.0~3.0	厚:1.0~2.1			2間2開、柱頭
SP 12	2 F	IV	1	円形	半円形	0.60	0.35	0.26		
SP 16	2 F	IV	1	円形	半円形	0.55	0.35	0.24		
SP 20	2 G	IV	1	円形	半円形	1.00	0.60	0.39	土:环柄輪3点	
SD 22	2・3 F	IIIa	3	直線	半円形	3.80	0.23	0.68		
SP 09	2 G	IV	1	円形	半円形	0.32	0.30	0.35	土:环柄輪1点	
SP 10	1 G	IV	1	円形	半円形	0.30	0.15	0.05		
SP 11	1 F	IV	1	円形	半円形	0.40	0.25	0.05		
SP 13	2 F	IV	1	円形	半円形	0.30	0.27	0.32		
SP 14	2 F	IV	1	円形	半円形	0.34	0.30	0.09		
SP 19	2 F	IV	1	円形	半円形	0.26	0.25	0.12		
SP 24	2 G	IV	1	円形	半円形	0.80	0.60	0.05		
SP 25	2 G	IV	1	円形	半円形	0.40	0.30	0.05		
SP 26	2 G	IV	1	円形	半円形	0.52	0.30	0.05		
SP 29	3 G	IV	1	円形	半円形	0.80	0.60	0.08		

第7表 第32・33次調査遺物観察表

報告 No.	種類 遺構	遺構名	層位	法量(cm)		成形・調製・装飾等		地土	構成	色調	種類 部位 性状	備考
				内面	外面	内面	外面					
37	土師器 高井戸	S306	口径:(19.0)、深さ:(1.90) 高井戸	口沿:櫛ナゲ 底内:櫛ナゲ 底外:櫛ヘケメ	口沿:櫛ナゲ 底内:櫛ナゲ 底外:櫛ヘケメ	小中粒 石英・蛋白石	良好	内・外面:2.5%1/2灰白色 外面:15%				
38	土師器 陶	S306	口径:(13.8)、深さ:(2.7) 底内	摩耗のため不明	摩耗のため不明	粗 石英	中や良好	内・外面:2.5%2灰白色 外面:10%				
39	土師器 高井戸	S306	口径:(14.75)、深さ:(5.8) 底内	摩耗のため不明	放射状ハケメ	粗 石英	中や良好	内面:2.5%2灰白色 外面:2.5%2灰白色 ~7.0%2灰褐色	杯・團 50%			
40	陶器器 陶臼身	S306	立上部:(14.2)、深さ:(2.8) 底部:(16.0)	ロクロナゲ 底外:ロクロケヅリ	ロクロナゲ 底外:ロクロケヅリ	やや劣	不良	内・外面:2.5%3灰黄色 外面:9%	ロクロ左			
41	陶器器 底	S305	口径:12.3、深さ:3.5 底内	同心円文当具	格子目タタキ	密	不良	内・外面:2.5%2灰白色 外面:1%	耐 1%			
42	陶器器 臼	S305	口径:~、深さ:(1.6) 底内	ロクロナゲ	細密	良好	内・外面:5%灰白色 外面:10%	つまみ ロクロ左				

## 第4節 第37次調査

### (1) 遺構・遺物の概要

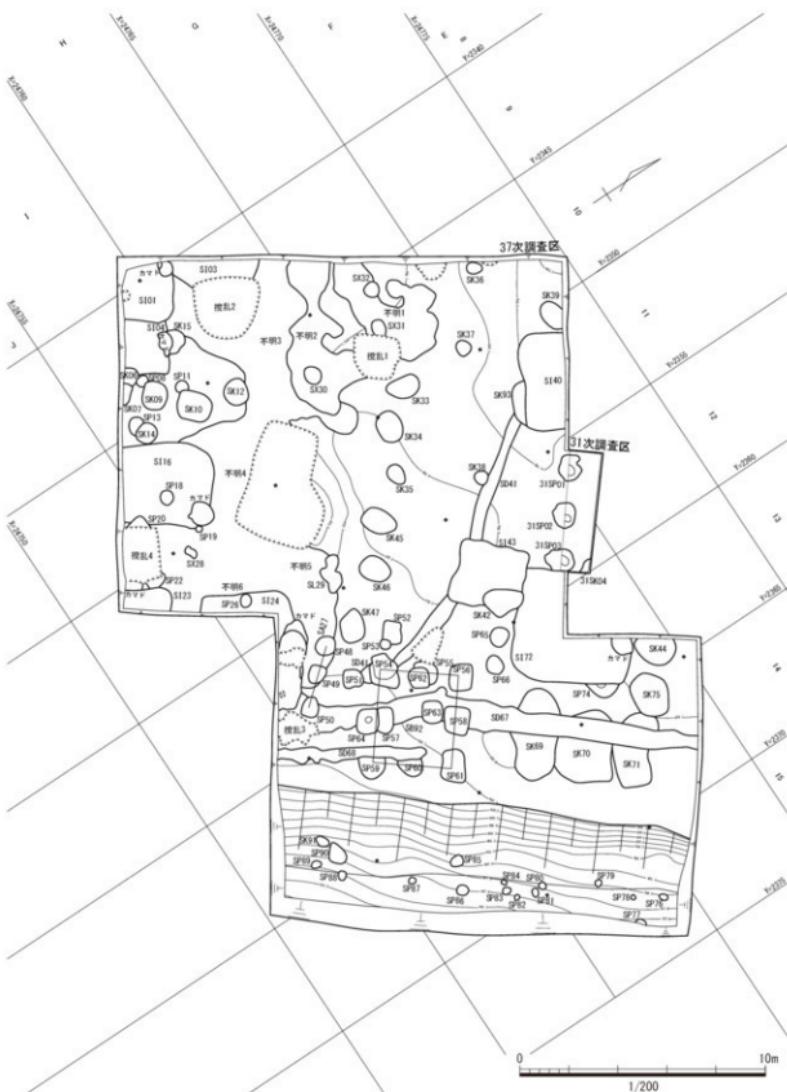
**遺構** 第31・37次調査区では堅穴建物9軒・掘立柱建物1棟・柵列1列・その他の柱穴33基・土坑23基・溝3条・不明遺構2基の合計72基検出した。また、遺物の分布が集中する範囲を仮に不明1～6と呼称する。不明1・2はIIIa層より上層の黒褐色土層を平面的に捉えた範囲である。IIb層に該当する可能性が高いと考えられた。不明3～6とはIIIa層を平面的に捉えた範囲であるが、遺構と想定される部分もある。特に、不明5・6とした範囲はカマドが確認されていることからも堅穴建物の可能性がある。しかし、調査時においてその範囲を明確にすることは困難であったことから、本書では堅穴建物になる可能性がある範囲に留めておく。掘立柱建物と柵列は柱穴の切り合いより、1基以上が想定された。

本調査区は第28～30次調査区と同一面で、第32・33次調査区より一段高い段丘面にある。本調査区東側の段丘崖で分かれる。本調査区は段丘面の端に立地し、遺構は北西方向に広がっていると想定され、段丘崖沿いに分布していると考えられる。また、全ての遺構はこの段丘崖を意識して作られている。

**遺物** 第31・37次調査区では7世紀から13世紀代の土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗が出土した（第8表）。種別の割合は概ね須恵器8割と土師器2割で、灰釉陶器と山茶碗は1割未満である。この割合からすると、8世紀を主体とした構成で、7世紀と9世紀以降は希薄である。7世紀の遺物は遺構外からのものがほとんどで、9世紀以降は須恵器では少数で、灰釉陶器のみと言っても良いだろう。灰釉陶器とそれを模倣した瓷器系須恵器は合計しても全体の7%とその割合は極めて低い。器種構成では、須恵器が壺と甕、土師器が甕、灰釉陶器が碗・皿でどの遺構においても概ね一致し、遺構外でも同様である。このことから、日常食器として須恵器・灰釉陶器・山茶碗の壺・碗・皿、貯蔵具として須恵器の甕、煮炊具として土師器の甕を使用しており、通例の器種構成となる。灰釉陶器については釉薬がほとんどかかっていないものや焼成時に飛んだようなものが多く、精製品はないようである。土師器の甕に注目すると、遺構外の出土数量を除けば、当然のことながら煮炊きを行う堅穴建物からの出土数量が多い傾向にある。しかし、SK44では土師器甕が堅穴建物より多く出土している。これはSK44がSI43の北西隅に位置していることから、SK44がカマドであった可能性が考えられる。また、カマドは建物の廃棄時に破壊する風習があったため、カマドの一部を破壊してSK44が作られた可能性も想定できる。

既述してきたように、ここまで一般的な集落の特徴を示している。一方、本調査区では墨書き器や転用硯が出土している。墨書きは解読不明瞭なものがほとんどで、「東カ・厨カ・泊カ・入カ・草書」と推定される文字がある。特に注目されるのはSK44から硯と墨書き「厨カ」が出土していることである。墨書き器の出土からは識字層の集落が想定される。

本調査区での注目遺物は暗赤褐色と暗灰色に発色した釉を有する須恵器である。これについて第5章において検討する。



第26図 第31-37次調査区全体図

第8表 第31・37次調査出土遺物集計表

種別 器種	須恵器										土師器				灰釉陶器		山 茶 碗	鐵 製 品	
	坏H 蓋 身	坏G 蓋 身	坏A 蓋 身	坏B 蓋 身	坏烟 蓋 身	平底碗 盤 碗	盤 盤	瓷器系 鉢 皿	鉢 皿	壺 瓶 煙	壺 瓶 煙	赤彩 壺	坏類 皿	高坏 皿	要 壺				
SI01				1	3	1	1				1	2				1		10	
SI03							2					2				1		5	
SI04					2	7						12				7	2	30	
SI16				2	9							8				7	4	30	
SI23				1	3			2							3	2	2	13	
SI24				2	10	2					2		1			8		25	
SI40				1					2									3	
SI43																1		1	
SI72						4					1		1			5		11	
不明5-6				1	5	4	10				7					5	1	33	
SK10											1	1						2	
SK12						1											1	2	
SK33						1	1									2		4	
SK42					2	1	1			1	3					11		20	
SK44					1	1	1									2		5	
SK69					1	1					1					3		6	
SK70					1													1	
SK71											1					1		2	
SK75					2											4		6	
SD41																1		1	
SD67	1			2	2					2						2		10	
SK30				1			1			1						4		7	
SK32						1				1								2	
SP19											1							1	
SP26						1										1		2	
SP66																1		1	
SP74																1		1	
SP56(SB92)																		1	
SP61(SB92)																		1	
不明1					3	1					3							7	
不明2					3	8	2	1		1	13	1				7	1	37	
不明3					1	2	1	3	1		6	1	1	1	2	1		21	
遺構外	3	1	2	0	8	57	33	213	26	1	11	8	0	48	207	2	5	54	21
器種計	3	2	2	0	8	57	33	213	26	1	11	8	0	48	207	2	5	0	136
割合	0%	0%	0%	0%	1%	7%	4%	26%	3%	0%	1%	1%	0%	6%	26%	0%	1%	0%	136
種別計						621										152		32	
割合						77%										19%		4%	
																	0%	100%	

## (2) 積穴建物

S101 (第27・28図、写真図版13・16)

位置層位 8H・8I・9H・9Iにおいて、第IIIa層上面で確認した。

重複関係 SI04を切り、SI03に切られる。

遺存状態 北東側4分の1を確認した。4分の3は調査区外である。

平面形状 方形プランである。

規模 確認した範囲で、東西2.11m、南北2.46mを測る。

主軸方位 東壁より求めると、N-43°-Eである。

壁 やや開きぎみに立ち上がる。

厨房施設 北壁中央にカマドが設けられる。北側はSI03に切られ、また西半分は調査区外に及ぶため、全景は不明である。東側袖部は疊と粘性のある橙色土の構築材で形成される。

出土遺物 須恵器坏B蓋1点・坏B身3点・坏1点・碗1点・壺1点・甕2点、土師器甕1点、不明

土器1点を確認した。

43は須恵器碗である。成形はロクロナデで、底部の切り離しは糸切りである。焼成は黄褐色で不良と考えられるが、同じ色のものは一定量存在することから意図的な焼成とも考えられる。底部内面には環状の重ね焼き痕跡が残る。体部は腰部がやや張る。時期は8世紀中葉と推定される。

44は須恵器壺B身の口縁部から体部で、口径は復元できなかつた。成形は右回転のロクロナデである。器壁は厚く、体部の傾きはやや大きくなる。口縁部の一部に自然釉が掛かる。時期は8世紀前葉から中葉と推定される。

45は須恵器壺B身の底部片である。成形は右回転のロクロナデで、底部外面にはロクロケズリを施す。高台は方形を呈し、やや外向きに貼付けられる。接地面は外端である。時期は8世紀前葉から中葉と推定される。

**所見** 出土遺物から、遺構の時期は8世紀中葉と考えられる。北壁中央に位置するSI01カマドがSI03に切られるがそれほど時期差はないと推測される。

#### SI03（第27・28図、写真図版13・16）

**位置層位** 8H・9Hにおいて、第IIIa層上面で確認した。

**重複関係** SI01に切られる。

**遺存状態** 東側3分の1を確認したが、後世の擾乱により東側は大きく削られている。西側3分の2は調査区外である。

**平面形状** 方形プランである。

**規模** 確認した範囲で東西2.48m、南北3.39mである。

**主軸方位** 東壁より求めるとN-69°-Eである。

**壁** やや開きぎみに立ち上がる。

**厨房施設** 確認されなかった。

**出土遺物** 須恵器壺2点・甕2点、土師器甕1点を確認した。

46は須恵器壺B身の口縁部から体部である。成形は右回転のロクロナデである。体部の傾きが大きい。体部外面に自然釉が掛かる。時期は8世紀前葉から中葉と推定される。

47は須恵器甕の底部である。全面に暗赤褐色釉を塗っていると考えられ、焼成が不良であることから、発色は褐色である。調整は外面とも横ナデ後に粗く板ナデを施す。時期は8世紀中葉から9世紀と推定される。

**所見** SI01カマドを切っているが、出土遺物からは8世紀中葉と考えられる。両者にはそれほど時期差は認められず、SI03はSI01より新しいものの、8世紀中葉の範疇と推測される。

#### SI04（第27・28図、写真図版13・16）

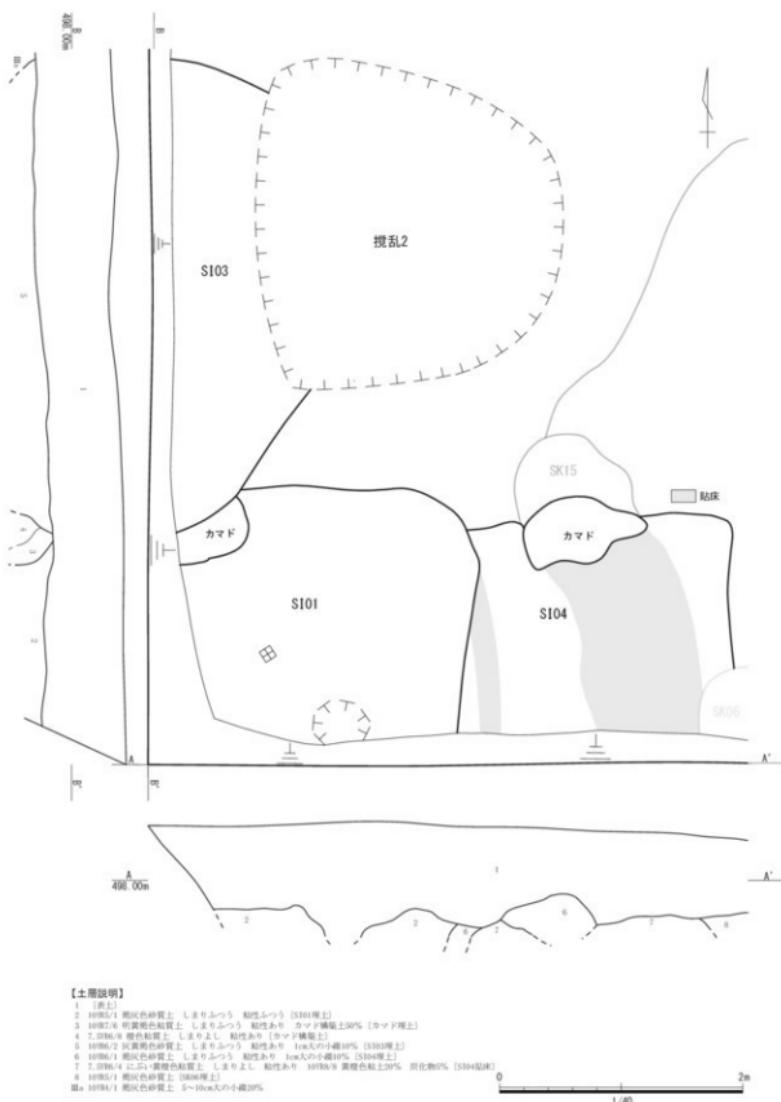
**位置層位** 9H・9Iにおいて、第IIIa層上面で確認した。

**重複関係** SI01・SK06に切られる。

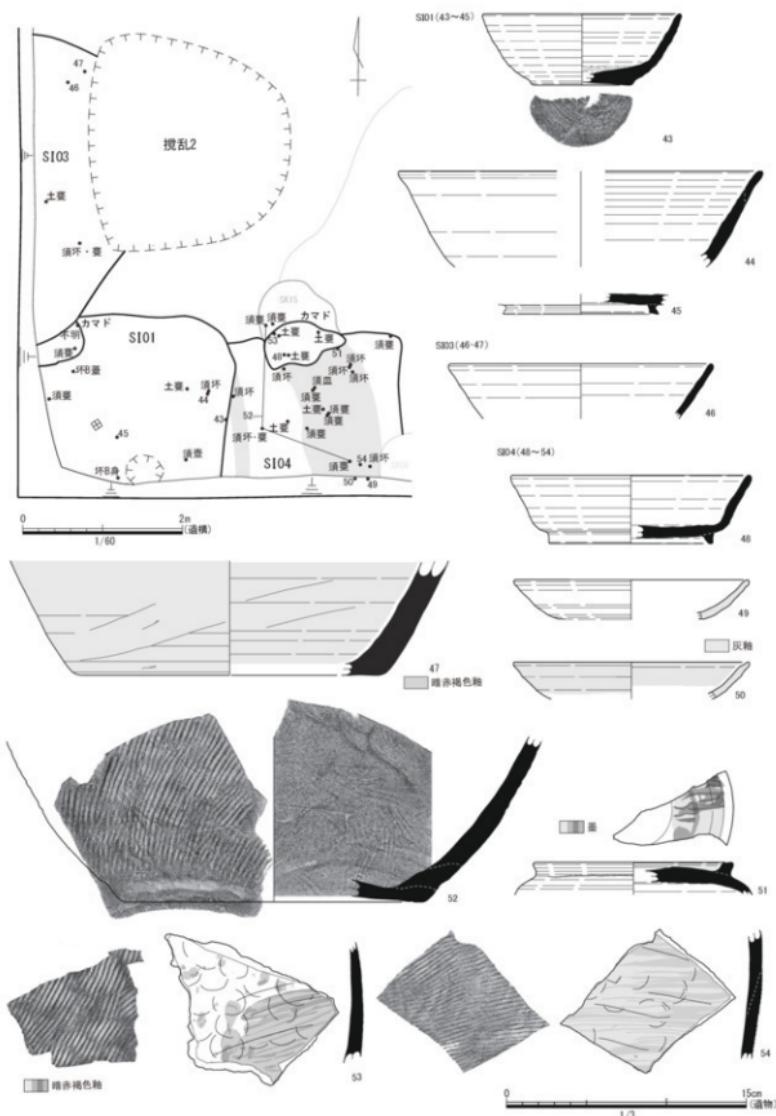
**遺存状態** 北側3分の1を確認したが、残りは調査区外である。また、一部貼床を検出し、埋土は多くが失われている状況を確認した。

**平面形状** 方形プランである。

**規模** 確認した範囲で、東西2.45m、南北2.19mを測る。



第27図 SI01-03-04 平面・断面図



第28図 SI01-03-04出土遺物図

- 主軸方位** 東壁より求めると、N-32°-Eである。
- 壁** 不明である。
- 厨房施設** 北壁にカマドが設けられ、北壁側に大きく掘り込まれる。確認した範囲では焚口部から煙道の立ち上がりまで 1.04 m、最大幅は 1.02 m 程度であった。
- 出土遺物** 須恵器壺 B 身 2 点・壺 7 点・甕 12 点、土師器甕 7 点、灰釉陶器皿 2 点を確認した。  
48 は須恵器壺 B 身である。成形は右回転のロクロナデで、底部外面にはロクロケズリを施す。高台は逆台形を呈し、やや丁寧に貼付けられる。体部の傾きはやや大きく、器高は低い。体部外面には厚く自然釉が付着し、高台では薄くなる。時期は 8 世紀前葉から中葉と推定される。  
49-50 は灰釉陶器皿で、高台を欠損する。50 は内面と外面の上部 3 分の 2 程度に灰釉を確認できる。49 は灰釉を確認できないが、胎土から灰釉陶器と判断した。成形は右回転のロクロナデである。時期は 9 世紀代と推定される。  
51 は須恵器壺 B 身の転用硯である。成形は右回転のロクロナデで、底部外面にはロクロケズリを施す。高台は方形を呈し、やや外に向く。接地面は外端である。底部外面の中央は面を持ち（墨堂）、中央から高台は回む（墨池）。高台は硯縁に相当する。墨は墨池から硯縁で確認でき、筆の痕跡と考えられる部分もみられる。時期は 8 世紀前葉から中葉と推定される。  
52 は須恵器甕底部である。底部は平底で、径約 10 cm と大型の甕である。胴部外面には平行タタキと、下部にヘラケズリを施す。内面には同心円文当具痕と、下部にナデを施す。当具の同心円文は不明瞭である。  
53・54 は須恵器甕胴部片である。成形は外面に平行タタキ、内面に当具痕を残す。内面は当具後に板ナデを施しており、同心円文が不明である。両者とも内外面に暗赤褐色の釉を確認できる（以下、暗赤褐色釉と呼称する）。内面はハケ塗りの痕跡を確認でき、53 は滴痕も確認できる。このことから、暗赤褐色釉は意図的に塗られた釉であると考えられる。52～54 の時期は概ね一致すると考えられ、9 世紀前葉から中葉と推定される。
- 所見** 検出時に貼床と考えられる硬化面を確認し、埋土は一部しか残存していない状況と想定された。時期は出土遺物から 9 世紀前葉から中葉と推定され、8 世紀代の遺物は他からの混入と考えられる。

#### S I 1 6 (第 29-30 図、写真図版 13-16)

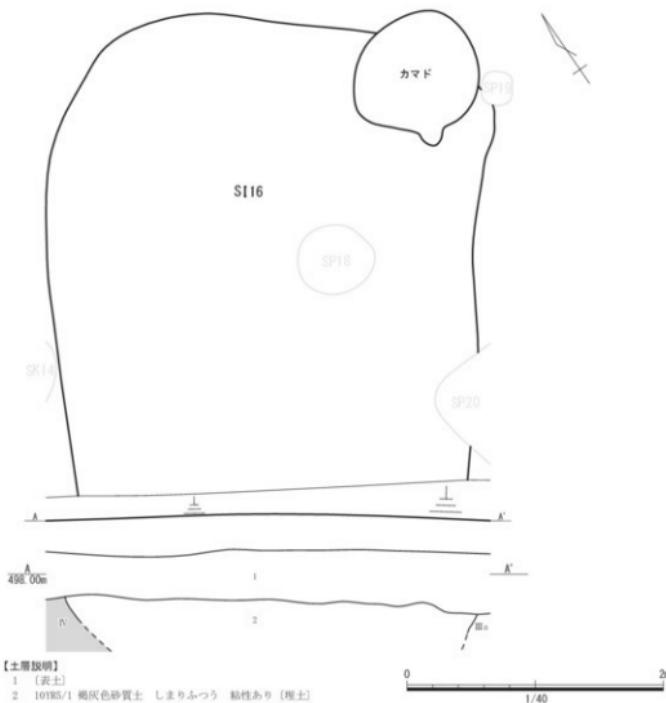
- 位置層位** 10I・10Jにおいて、第III a 層上面で確認した。
- 重複関係** SP20 に切られる。
- 遺存状態** 北側 5 分の 4 を確認したが、残りは調査区外である。
- 平面形状** 方形プランである。
- 規模** 確認した範囲で、東西 3.32 m、南北 3.68 m を測る。
- 主軸方位** N-36°-E である。
- 壁** やや開き気味に立ち上がる。
- 厨房施設** 北東隅にカマドが設けられ、北壁側に大きく掘り込まれる。確認した範囲では焚口部から煙道の立ち上がりまで 0.96 m、最大幅は 0.96 m 程度であった。
- 出土遺物** 須恵器壺 B 盖 2 点・壺 9 点・甕 8 点、土師器甕 7 点、灰釉陶器碗 3 点・皿 1 点、不明土

器1点が出土した。

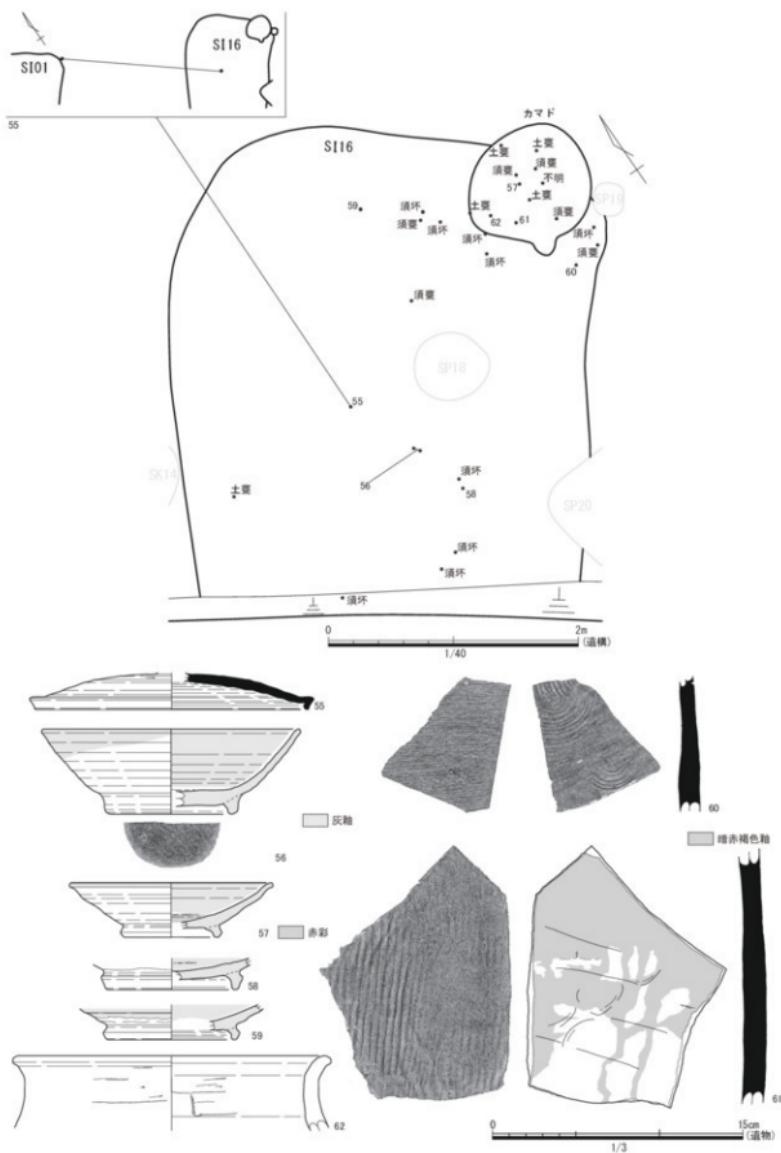
55は須恵器壺B蓋で、つまみを欠損する。成形は右回転の細かいロクロナデで、天井部の約2分の1にロクロケズリを2回転確認できる。中央はつまみの貼付けナデにより不明である。天井部は緩やかに内湾し、口縁部との境付近で外反する。天井部と口縁部の境は明瞭で、口縁部は内傾して垂下する。時期は8世紀中葉から後葉と推定される。

56は灰釉陶器碗と考えらえる。胎土は須恵器と見分けがつかず、器形は灰釉陶器である。口縁部外面から体部内面にかけて薄く釉が確認できる。これらのことから、東海諸窯からの搬入ではなく、地元産と推測される。成形は右回転のロクロナデで、底部の切り離しは静止糸切りである。高台は三日月状であるが、つくりは粗雑で、底部と体部の境から体部に貼付けられる。体部は緩やかに内湾する。時期は10世紀前葉から中葉と推定される。

57は灰釉陶器皿である。灰釉は口縁端部外面から体部内面にかけてわずかに確認できる程度である。底部内面は露胎で、赤色が確認できるが、詳細は不明である。成形は右回転のロクロナデで、底部の切り離しは糸切りである。高台は三日月状を呈する。体部は直線



第29図 SI16 平面・断面図



第30図 SI16出土遺物図

的で、口縁部で外反することにより、弱い稜をもつ。時期は10世紀中葉から後葉と推定される。

58・59は灰釉陶器の碗または皿と考えられる。成形は右回転のロクロナデである。58の底面外側にはロクロケズリを施し、59は糸切り後未調整である。高台は三日月状を呈する。

58は内面に灰釉をハケ塗りする。59は体部の内外面に灰釉を確認でき、ハケ塗りかは不明瞭である。時期は58が9世紀中葉から後葉、59が10世紀前葉から中葉と推定される。

60・61は須恵器甕胴部片である。60の成形は内面に同心円文当具、外面に格子目タタキを施す。内面には当具後に格子目タタキが部分的に確認できる。外面にはタタキ後に力キメを施す。61の成形は内面に当具、外面に平行タタキを施す。内面の当具後に板ナデを施すことにより同心円文かは不明である。60は外側面に暗赤褐色釉が施され、内面は釉が流れた状態を確認できる。

62は土師器甕である。口縁部は外湾する。内外面には右方向への横板ナデが施される。

**所見** 出土遺物の年代観から、10世紀前葉から中葉の遺構と考えられる。

#### S I 2 3 (第31図、写真図版13・17)

**位置層位** 11Jにおいて、第IIIa層上面で確認した。

**重複関係** SP22を切る。

**遺存状態** 北西側6分の1を確認したが、残りは調査区外である。

**平面形状** 方形プランである。

**規模** 確認した範囲で、南北1.94m、東西0.95mを測る。

**主軸方位** N-27°-Eである。

**壁** やや開き気味に立ち上がる。

**厨房施設** 西壁中央付近にカマドが設けられ、西壁側に大きく掘り込まれる。しかしながら、南側半分は調査区外に及び、西側は後世の擾乱により失われている。このため、全景を知りえない。

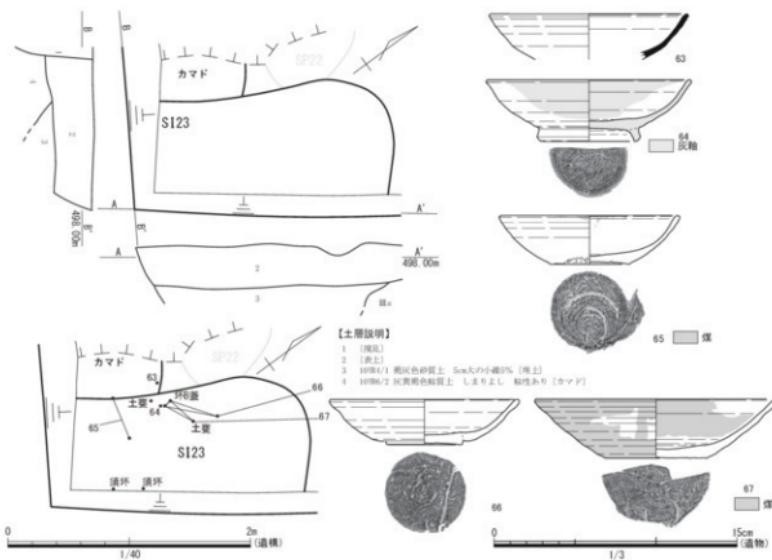
**出土遺物** 須恵器壺B蓋1点・皿2点・壺3点、土師器皿3点・甕2点、灰釉陶器皿2点が出土した。

63は須恵器皿で、底部を欠損する。器形は灰釉陶器皿と類似するが、胎土が須恵器であることから、ここでは須恵器と判断し、瓷器系（瓷器模倣）と考える。成形は右回転のロクロナデである。口縁部外側に1条の凹みがあるため、外反した形状を呈する。

64は灰釉陶器皿である。体部の形状は63と類似する。灰釉は内外面に確認でき、口縁端部外側から体部内面にかけて波状に確認できる。成形は右回転のロクロナデで、底部の切り離しは糸切りである。高台は三日月状を呈し、外面や端部が鋭く尖る。高台の貼付けナデは丁寧に施される。時期は63・64ともに10世紀前葉から中葉と推定される。

65～67は土師器皿である。成形は3点とも同様で、右回転のロクロナデで、底部の切り離しは糸切りである。底部切り離しの高さによる違いと考えられるが、65・67の底部は平底で、66は低い平高台状を呈する。体部は、65・66が緩やかな内湾、67が直線で、66はナデを1回転施すことにより弱く外反する。65・67には煤が付着し、灯明皿として使用されたと推測される。65は口縁端部にわずかに付着し、67は内外面に付着する。また、67は流状痕が確認できる。時期は9世紀～10世紀と推定される。

**所見** 出土遺物から、遺構の時期は10世紀前葉から中葉と考えられる。



第31図 SI23平面・断面図、出土遺物図

## S I 2 4 (第32・33図、写真図版14・17)

位置層位 III-11J-12I-12Jにおいて、第III a層上面で確認した。

重複関係 SP26を切る。

遺存状態 北東側3分の1を確認したが、残りは調査区外である。

平面形状 方形プランである。

規模 認証した範囲で、南北4.38m、東西は4.83mである。

主軸方位 N-27°-Eである。

壁 やや開き気味に立ち上がる。

厨房施設 北壁中央にカマドが設けられ、北壁側に少し掘り込む。周辺には焼土が広がる。南側は調査区外に及び、東側は後世の擾乱により失われている。このため全景を知りえない。

出土遺物 須恵器壺B蓋2点・碗2点・壺10点・甕2点・土師器壺1点・甕8点、不明土器2点が出土した。

68は須恵器壺B蓋である。成形は右回転のロクロナデで、天井部にロクロケズリを約2分の1の範囲に4回転確認できる。天井部は低く、口縁部との境は内湾する。口縁部の垂下は短く内湾し、天井部との境は不明瞭である。口縁端部が内傾する。口縁部内のナデは粗い部分と丁寧な部分があり、つくりが粗雑になっている。時期は9世紀前葉と推定される。

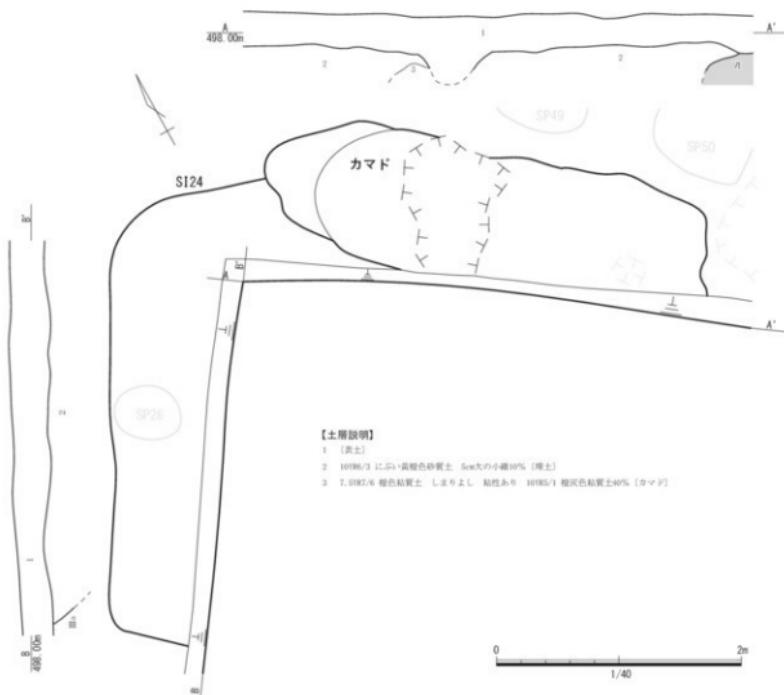
69は須恵器壺の口縁部片である。成形は右回転のロクロナデである。体部の傾きは小さ

い。外面に薄く自然釉が掛かる。時期は8世紀中葉と推定される。

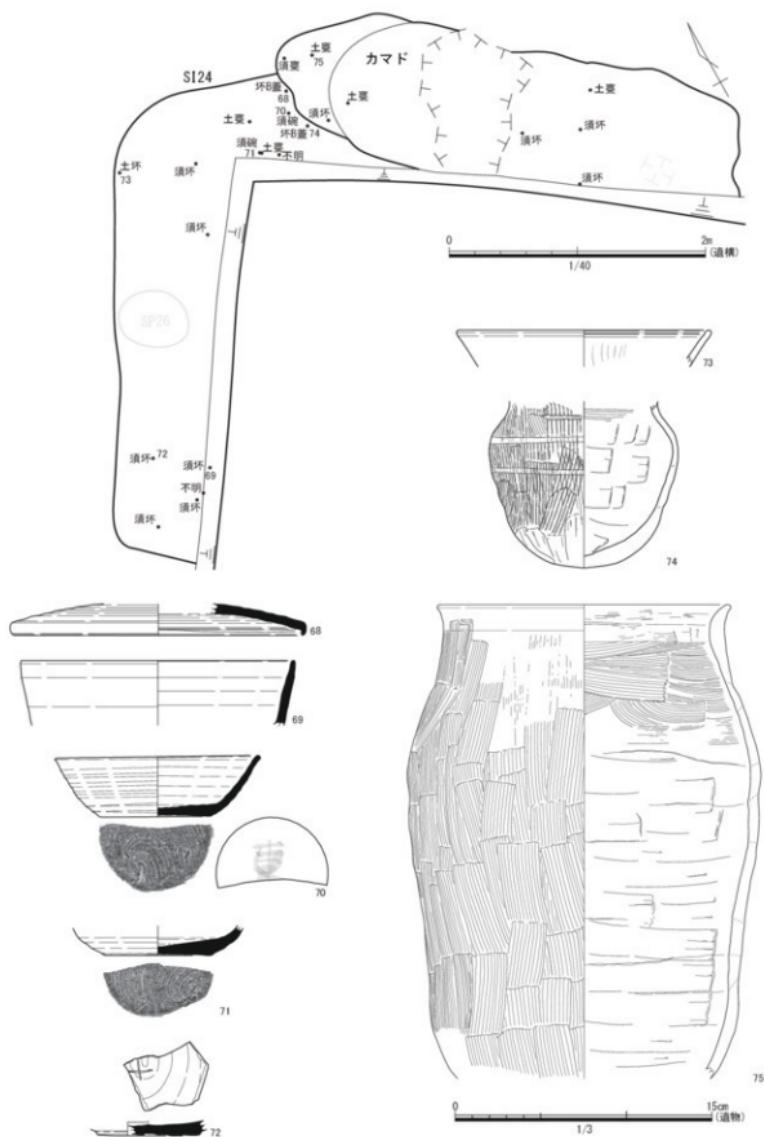
70・71は須恵器碗で、平底を呈する。71は底部のみである。成形は右回転のロクロナデで、底部の切り離しは糸切りである。70は底部外面に墨書を確認でき、文字は「東」の可能性はあるが、下半を欠損していることもあり判読困難である。69の体部は直線的で、71は腰部が張った形状を呈する。両者ともに赤褐色から褐色で、この器種の色調は概ね統一されているようである。時期は70が8世紀中葉から後葉、71が8世紀前葉から中葉と推定される。

72は須恵器壺Aの底部である。内面には「×」の線刻がある。成形は右回転のロクロナデで、底部の切り離しはヘラ切りである。時期は8世紀から9世紀と推定される。72は土師器壺である。体部内面に放射状の暗文が施される。口縁部内面に1条の凹線がめぐる。時期は8世紀代と推定される。

74・75はカマドで使用されたであろう土師器壺である。74は小型丸底壺で、口縁部を欠損する。胴部最大径は上部にあり、やや肩が張った形状を呈する。外面には胴部に縦方向のハケメ、底部に縦方向の板ナデを施す。また、胴部のハケメ後に3条の刻み及びナデを



第32図 SI24平面・断面図



第33図 S124出土遺物図

施し、文様を形成する。内面は胴部から底部に横方向の板ナデ、頸部に横方向のハケメを施す。75は長胴甕で、底部を欠損する。頸部では肥厚し、口縁部において短く外反する。外面は縦方向のハケメを口縁部から底部へ向かって順に施し、口縁端部と胴部の一部にナデを施す。内面は胴部に横板ナデ、頸部に横方向のハケメ、頸部から口縁部はナデを施す。時期は両者ともに8世紀代と推定される。

**所見** 須恵器の年代観から、8世紀後半の遺構と考えられる。

**S I 4 O** (第34図・写真図版14・18)

**位置層位** 11F・11Gにおいて、第V層上面で確認した。

**重複関係** 確認されなかった。

**遺存状態** 南側2分の1を確認したが、北側は調査区外である。

**平面形状** 不整形プランである。

**規模** 確認した範囲で、南北2.20m、東西は3.90mである。

**主軸方位** N-31°-Eである。

**壁** 確認されなかった。

**厨房施設** 確認されなかった。

**出土遺物** 須恵器壺A1点・壺1点・横瓶1点が出土した。

76は須恵器壺Aである。成形は右回転のロクロナデである。内外面に板ナデを施し、外面はロクロ目がなく、外面は板ナデの凹凸がみられる。体部の傾きが大きい。内外面に煤が付着し、灯明皿として使用された可能性がある。時期は8世紀前葉または9世紀代と推定される。

77は須恵器横瓶の胴部片である。成形は外面に平行タタキ、内面に当具である。当具は無文である。粘土紐のつなぎ目には縦方向のナデ、中央では横方向のナデを施す。時期は8世紀代と推定される。

78は須恵器壺である。成形は右回転のロクロナデである。肩部に5条の沈線が施される。胴部は肩部に最大径をもつ卵倒状を呈する。頸部はくの字状を呈し、口縁部は断面三角形を呈する。肩部の沈線と口縁部の特徴は加賀の双耳壺と類似しており、注目される器種である。時期は9世紀代と推定される。

**所見** 出土遺物から、遺構の時期は9世紀代と推定される。

**S I 4 3** (第35図、写真図版14・18)

**位置層位** 12G・12Hにおいて、第V層上面で確認した。

**重複関係** SI72を切り、SK42に切られる。

**遺存状態** ほぼ全体が残る。

**平面形状** 方形プランを呈する。

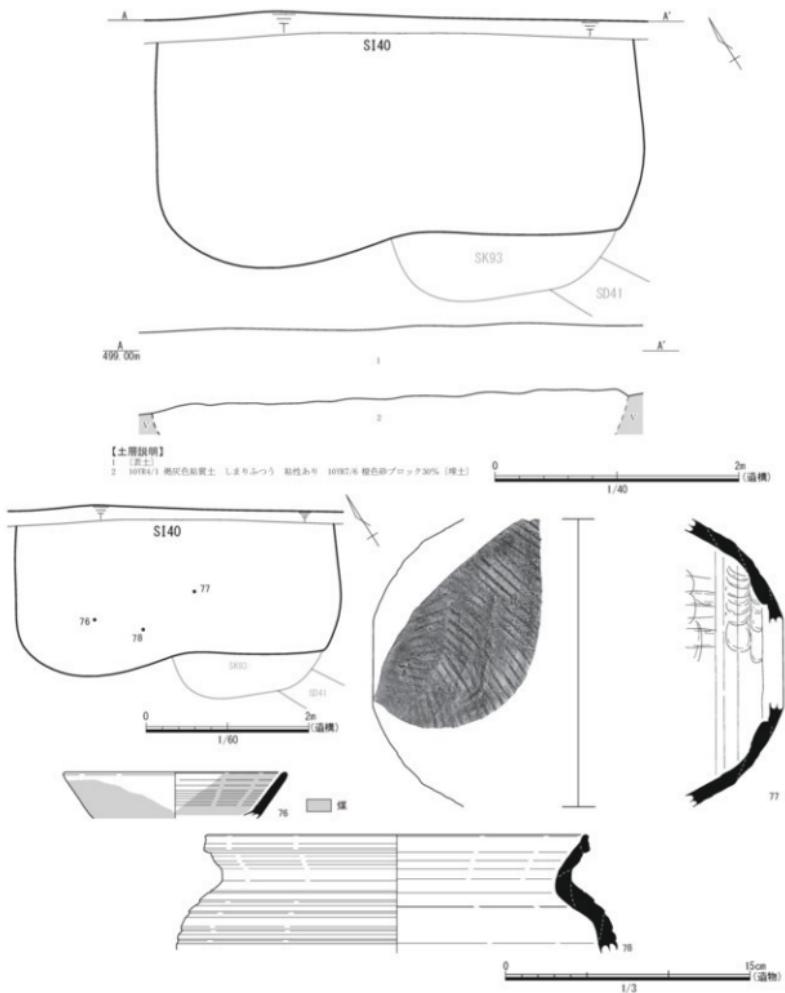
**規模** 南北2.70m、東西2.88mを測る。

**主軸方位** N-43°-E

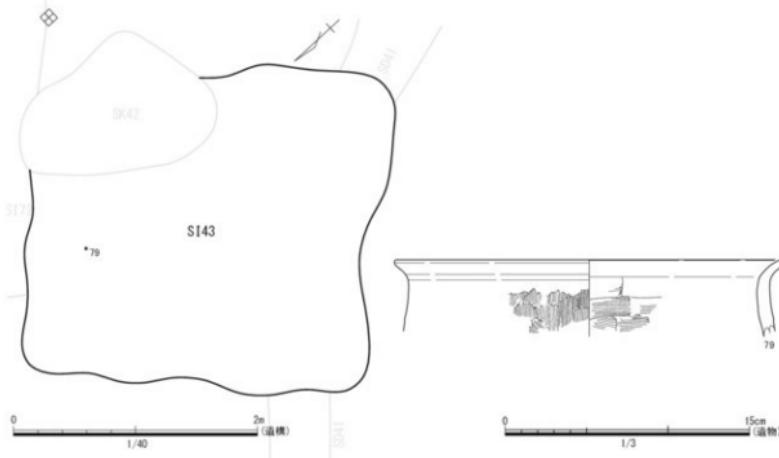
**壁** 確認されなかった。

**厨房施設** 痕跡を確認できなかったものの、SK42により切られた範囲以外では確認できないため、北東隅に設けられていたものと想定できる。

**出土遺物** 土師器甕 1 点が出土した。79 は土師器長胴甕である。口縁部から頸部はくの字状を呈し、胸部は張らず、寸胴と推測される。外面は口縁部～頸部に横方向のナデ、胸部に縦方向のハケメ、内面は口縁部から頸部に横方向の板ナデ、胸部に横方向のハケメを施す。時期は概ね 8 世紀代と推定される。



第34図 SI40 平面・断面図、出土遺物図



第35図 SI43 平面図、出土遺物図

**所見** SK42に切られることと78の年代観より、遺構の時期は8世紀前葉から中葉と考えられる。

**S I 7 2** (第36図、写真図版14・18)

**位置層位** 12G・12H・13G・13Hにおいて、第V層上面で確認した。

**重複関係** SK42・SI43に切られ、SP74を切る。

**遺存状態** 南東側4分の3を確認したが、残りは調査区外である。

**平面形状** 方形プランである。

**規模** 南北4.90m、東西4.55mを測る。

**主軸方位** N-33°-Eである。

**壁** 確認されなかった。

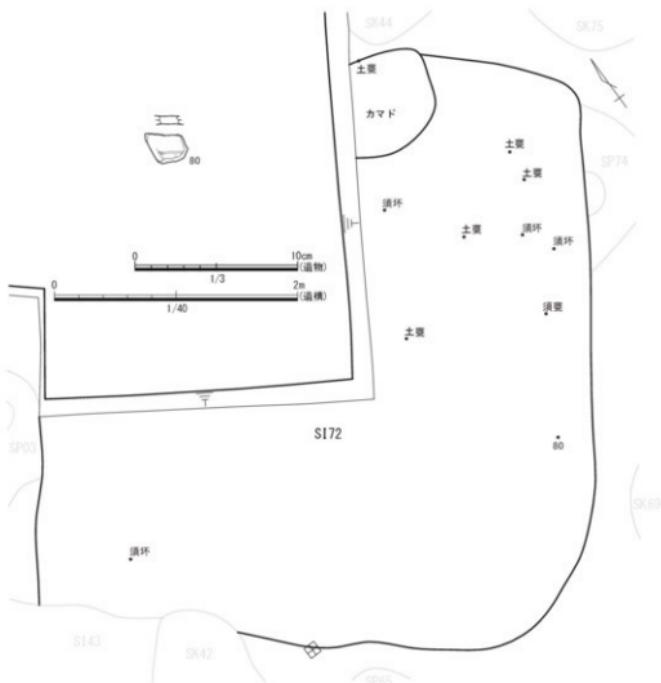
**廚房施設** 北壁中央にカマドが設けられる。壁面を掘り込まない。西側は調査区外に及ぶため、全景を知りえない。

**出土遺物** 須恵器壺4点・甕1点、土師器壺1点・甕5点が出土した。

80は土師器壺底部と考えられる。成形はロクロナデで、底部外面にヘラケヅリを施す。

底部外面には墨書きを確認でき、「田」の上部と判読した。土師器壺の特徴である金雲母を胎土に多量含んでいる。時期は8世紀代と推定される。

**所見** 8世紀前葉から中葉のSI43に切られることから、8世紀前半を下限とすることができると考えられる。



第36図 S172 平面図、出土遺物図

## (3) 掘立柱建物

SB92 (第37図、写真図版14・15)

位置層位 12H・12I・13H・13Iにおいて、第V層上面で確認した。

重複関係 SB92を構成するSP54がSD41を、またSP57・SP58がSD67を切る。SP59・SP60はSD68に、またSP55・SP57はSP62・SP64にそれぞれ切られる。

遺存状態 8基の柱穴で構成される。それぞれの遺存状態は良好で、全景を復元することができる。

規模 2間四方、一辺3.6m四方の側柱建物である。

主軸方位 N-40°-Eである。

柱間寸法 梁行・桁行とも、柱間は1.8m(6尺)である。

掘り方 柱穴跡の平面形は基本的に方形であるが、SP59・SP60は橢円形を呈する。規模は直径1m程度である。SP56のみ半裁し、深さが0.61mであると判明した。SP54では柱抜取穴痕を確認した。

出土遺物 SP56とSP61から土師器甕の細片が1点ずつ出土した。

所見 大型の掘り方を持つ柱穴により構成される掘立柱建物である。検出段階では方形の柱穴を想定したものの、若干不整形状を呈した。またSP56においては断ち割り調査を実施し

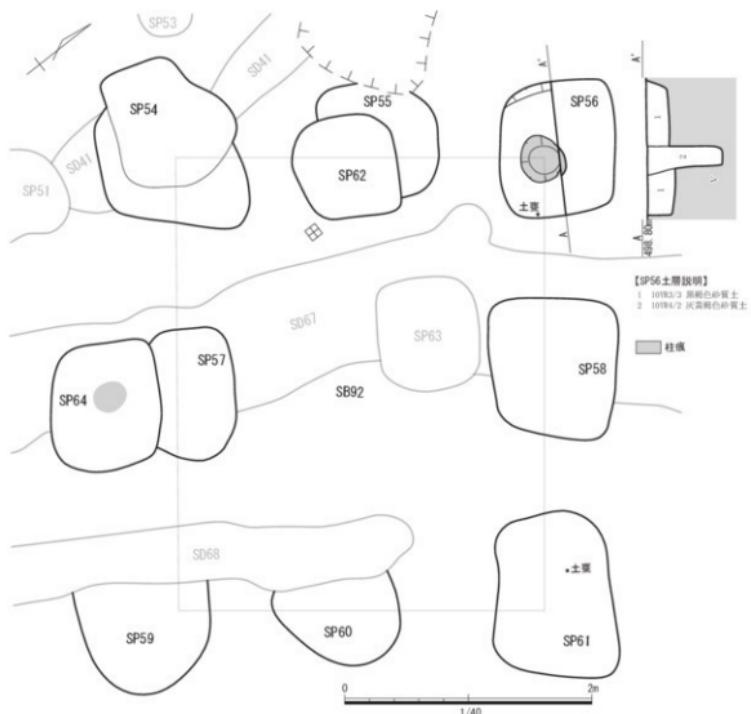
たが、柱部分のみ掘り方からさらに下方まで掘り下げている状況を確認した。軸線が東側の自然地形の落ち込みと平行しており、自然地形を意識して建てられたものと考えられる。SP62・57は柱穴の切り合いを確認できる。建物の拡張や建替えも想定されたが、現状では並び等の確認には至らなかった。柱穴の形状と掘り方のあり方からは、8世紀前半代の官衙を想定するような建物跡とは一線を画すものと考えられる。出土遺物による年代の検討は難しいものの、7世紀後半のSD67を切ること、遺跡全体の出土遺物の年代観により、8世紀後半以降9世紀代までの範疇にはおさまるものと想定するに留めておく。

#### (4) 柵列

**S A 2 7** (第38図、写真図版12)

位置層位 12Iにおいて、第V層上面で確認した。

重複関係 他構造との重複関係は認められない。



第37図 SB92 平面・断面図

遺存状態 良好で、全景を復元することができる。

規模 2間、2.40mを測る。

主軸方位 N-42°-Wである。

柱間寸法 柱間は1.2m(4尺)である。

掘り方 平面形は直線を呈する。規模は直径0.70m程度である。

遺物 確認されなかった。

所見 むしろ東に位置する自然地形の落ち込みと柵列跡

SA27の軸線はほぼ直交する。出土遺物による年代の検討は難しいが、SB92と同様、8世紀後半から9世紀代と幅を広く取って考えておきたい。

#### (5) 土坑(第39~44図、写真図版14・18)

遺構 23基確認した。検出面が第IIIa層のものは6基あり、平安時代のものと考えられる。一方、第IV・V層で検出したものは17基ある。完掘していないこともあり、出土遺物がないものは年代決定根拠に欠ける。平面形状は、楕円形16基、方形2基、不定形が5基である。径は1m程度におさまるものが18基、2m程度のものが2基、3mに及ぶものが3基ある。

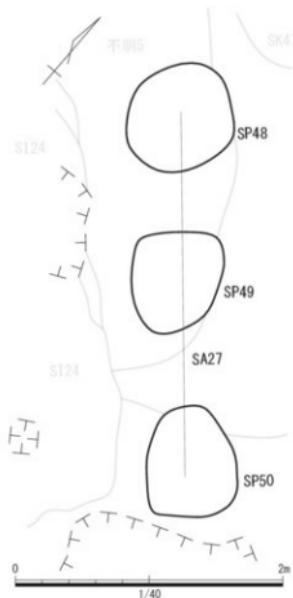
不定形で長径3m程度のSK69~71は、7世紀前半と考えられるSD67に切られるため、それ以前のものと考えられる。

また、楕円形か不定形を呈するSK33~SK34~SK35~

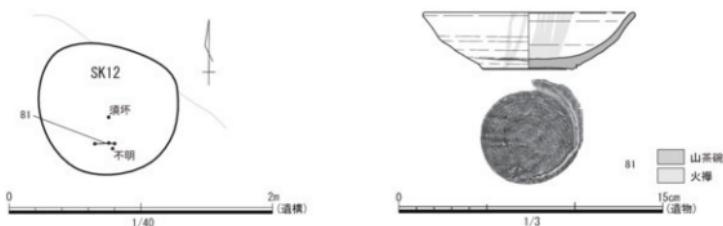
SK45~SK46~SK47は、列状に並ぶように見えるが、間隔が一定とはならず、軸線も直線で通らない。このため柱穴跡ではなく、検出までの現状調査では土坑と判断した。

遺物 SK12では、須恵器壺1点、山茶碗小皿1点が出土した。81は山茶碗小皿である。成形は右回転のロクロナデで、底部の切り離しは糸切りである。糸切りは体部まで及ぶ。体部は中央で屈曲し、口縁部では弱く外反する。内外面に焼成時の火襷がみられる。時期は北部系5~6型式に比定され、12世紀後半から14世紀前半である。

SK33では須恵器壺1点・碗1点、土師器甕2点が出土した。82は須恵器碗で、高台がつくかどうか不明である。成形は右回転のロクロナデである。体部の傾きは大きく、外反する。内面に横方向の



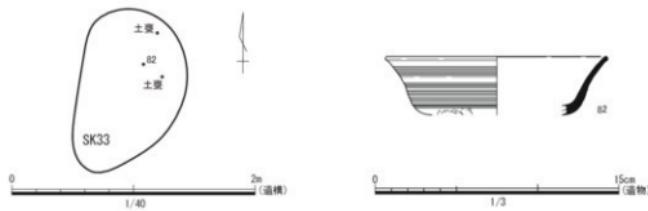
第38図 SA27平面図



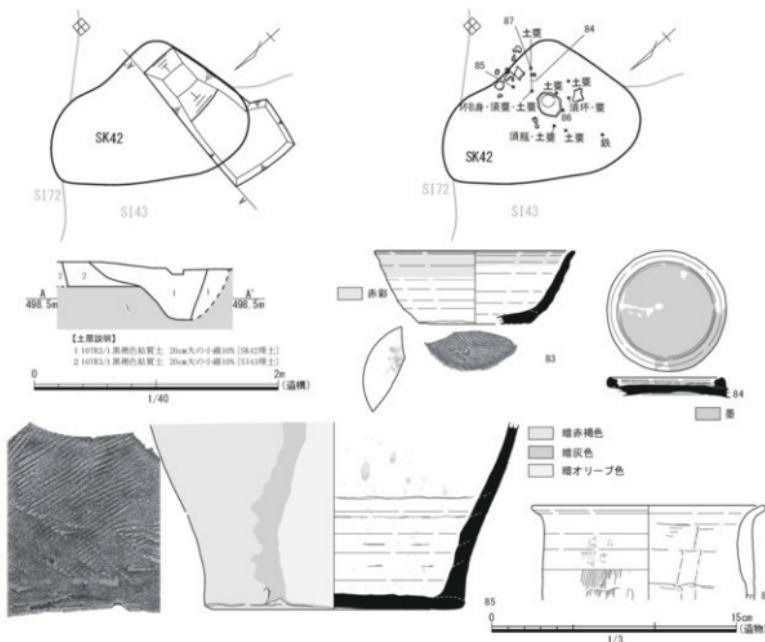
第39図 SK12平面図、出土遺物図

板ナデ、外面には底部付近に縦方向の板ナデを施す。特徴は体部外面に多条沈線がみられることで、これに関しては文様と板ナデの2つの可能性が考えられる。また、胎土は精緻で他よりつくりが丁寧である。時期は8世紀後葉と推定される。

SK42は検出時に須恵器甕が正位に据えられているように観察されたため、半裁により断面観察を行った。底面は有段で深く掘り込まれ、最深部で0.42mを測る。埋土は単層であり、埋めたような痕



第40図 SK33 平面図、出土遺物図



第41図 SK42 平面・断面図、出土遺物図

跡を読み取ることはできなかった。遺物は、須恵器壺B身2点・壺1点・碗1点・壺・瓶類1点・甕3点、土師器甕11点、鉄製品1点が出土した。

83は須恵器碗である。成形は右回転のロクロナデで、底部の切り離しは糸切りである。色調は黄褐色である。体部は腰がやや張った形状を呈する。底部外面には墨書を確認でき、「厨」の可能性はある。欠損部があるため判読困難である。時期は8世紀前葉から中葉と推定される。

84は須恵器壺B身を転用した甕である。成形は右回転のロクロナデで、底部の切り離しは糸切りである。底部は糸切り後に中央を残して縁辺にロクロケズリを施す。糸切り部分が墨堂で、ロクロケズリ部分が墨池となる。高台は硯線に相当し、形状は方形を呈し、やや内傾する。墨は高台端面の一部と高台内面にみられる。時期は8世紀前葉から中葉と推定される。

85は須恵器甕の胴部下半から底部である。底部は平底である。成形は粘土紐を輪積みし、外面に平行タタキ、内面の当具痕は確認できず、ナデのみである。外面には3色に発色した釉がみられ、暗赤褐色・暗灰色・灰オリーブ色である。内面には暗灰色釉の滴痕が多数みられる。時期は8世紀から9世紀と推定される。

86は土師器長胴甕である。胴部は寸胴を呈する。頸部付近で器壁が厚くなり、口縁部は外反する。胴部外面に縦方向のハケメを施し、器壁の厚い部分にはハケメの上から横板ナデを施す。内面は横方向の板ナデを施す。時期は8世紀代と推定される。遺構の時期としては、出土遺物から8世紀中葉と考えられる。

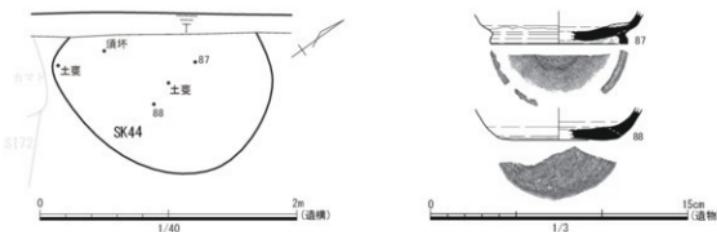
SK44では、須恵器壺B身1点・壺1点・碗1点、土師器甕2点が出土した。

87は須恵器壺B身の底部である。SK42の84と類似する。底部に火ぶくれがみられる。8世紀前葉から中葉と推定される。

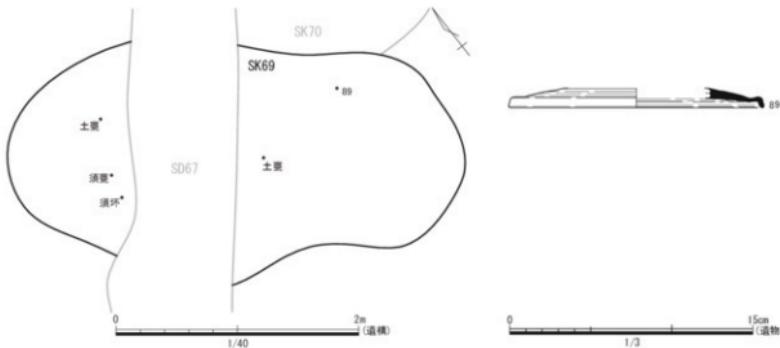
88は須恵器碗の底部である。成形は右回転のロクロナデで、底部の切り離しは糸切りである。色調は黄橙色である。体部はやや内湾して立ち上る。時期は8世紀中葉から後葉と推定される。遺構の時期としては、須恵器87・88の年代観から、8世紀後半代と考えられる。

SK69では、須恵器壺B蓋1点・壺1点・甕1点、土師器甕3点が出土した。89は須恵器壺B蓋の口縁部である。成形は右回転のロクロナデで、天井部の約2分の1にロクロケズリを施す。天井部は口縁部との境で外反し、口縁部では垂下する。口縁部はやや外に開く。時期は8世紀中葉から後葉と推定される。遺構の時期としては、出土遺物から8世紀中葉から後葉と考えられる。

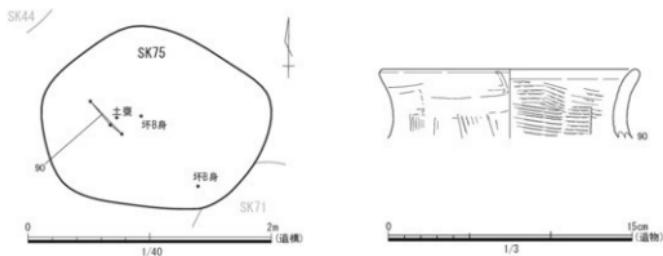
SK75では、須恵器壺B身2点、土師器甕4点が出土した。90は土師器甕の口縁から頸部片である。器壁が厚い。口縁部は緩やかに外反する。口縁端部の内外面に横方向のナデ、口縁部外面に横方向の



第42図 SK44平面図、出土遺物図



第43図 SK69平面図、出土遺物図



第44図 SK75平面図、出土遺物図

板ナデ、頭部外面に縦方向のハケメを施す。内面は横方向のハケメを施す。ハケメ・板ナデともに目幅が広く深い。時期は8世紀代と推定される。

#### (6) 溝

##### S D 4 1 (第45図, 写真図版12)

11G・12G・11H・12H・11I・12Iに位置し、第V層上面で確認した。SI40・SI43・SP54・SP51に切られる。現存長11.36m、最大幅0.31～0.68mを測り、グリッド12Hあたりで屈曲する。南端はSP51あたりまでと確認できたが、北端は調査区外に及ぶため確認できていない。北側の主軸方位はN-35°-Wであり、南側の主軸方位はN-12°-Wである。

遺物は土師器甕の胴部片を出土しているが、時期は不明である。

遺構の時期はSI40・43とSB92に切られることから、8世紀中葉以前と推定される。

##### S D 6 7 (第45図, 写真図版12・18)

12I・13I・12J・13Jに位置し、第V層上面で確認した。SK69・SK70・SK71を切り、SB92、SP63・

SP64、SA27に切られる。現存長16.90m、最大幅1.30mを測る。南北両端とも調査区外に及び、全景を知りえない。主軸方位はN-36°-Eであり、自然地形の落ち込み上端とほぼ平行に走る。

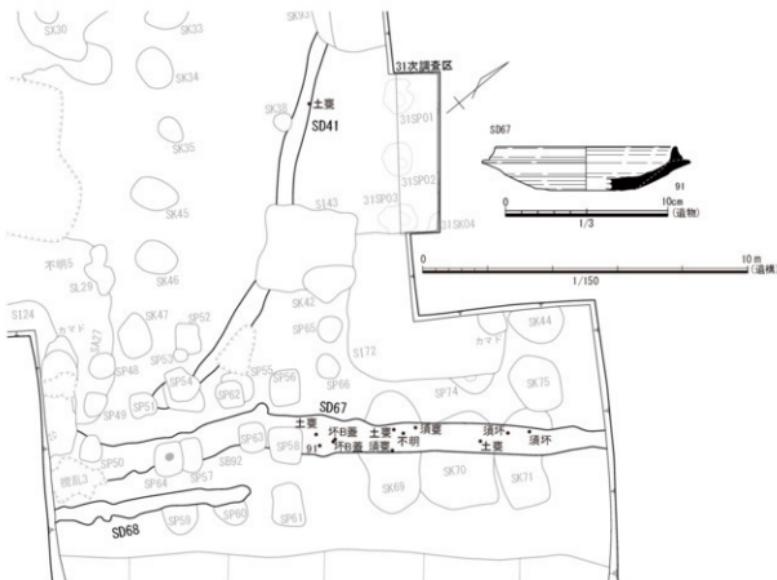
遺物は須恵器壺H身1点・壺B蓋2点・壺類2点・甕2点、土師器甕3点が出土した。91は須恵器壺H身である。成形は右回転のロクロナデである。底部外面の約3分の2の範囲にロクロケズリを6回転施す。体部は緩やかに内湾し、口縁部では弱く外反する。受部は水平で、立ち上り部はほぼ垂直である。断面形状は三角形を呈しており、器壁が厚い。端部は丸くおさめる。時期は6世紀後葉から7世紀前葉と推定される。

遺構の時期は出土遺物に壺B蓋が出土し、SB92に切られていることから、8世紀中葉以前と推定され、SD41とほぼ同時期と考えられる。7世紀前葉の91は1点のみで、他の遺物は8世紀代と考えられることから、遺構の埋没時期は8世紀中葉頃と推測される。遺構の上限は7世紀前葉と推定してもよいが、1点のみでは混入の可能性も考えられる。

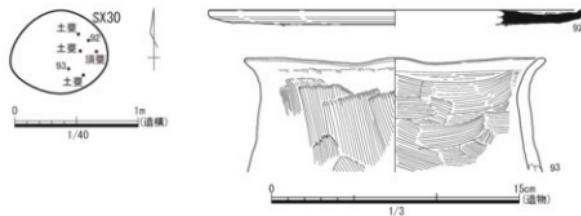
#### SD68 (第45図、写真図版12)

12～14G～Iに位置し、第V層上面で確認した。SB92を構成する柱穴跡SP59・SP60を切る。遺構は現存長6.05m、最大幅0.65mを測る。南端は調査区外に及び、全景を知りえない。主軸方位はN-32°-Eであり、自然地形の落ち込み上端とほぼ平行に走る。

遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明確であるが、SB92を切っていることから9世紀以降と推定される。



第45図 SD41-67-68 平面図、出土遺物図



第46図 SX30 平面図、出土遺物図

## (7) 不明遺構

## SX30 (第46図・写真図版18)

10Hに位置し、包含層上面で確認した。平面形状は梢円形を呈し、長径0.79m、短径0.67mを測る。遺物は須恵器高盤1点・甕1点、土師器甕4点が出土した。

92は口縁端部が他と比較しても短いこと、傾きや外面の欠損部に接合部の痕跡が確認できることから壺B蓋ではなく高盤と判断した。成形はロクロナデで、回転方向は不明である。内面には重ね焼きの痕跡がみられる。時期は9世紀前葉と推定される。

93は土師器甕である。口縁部は歪む。胴部から口縁部にかけて外湾し、端部は丸くおさめる。調整は部位により工具や方向を変えている。外面の外湾する部分から下部は上から下へ3~3.5cm幅のハケメを施し、下部には下から上への幅が狭いハケメを施す。内面には右から左方向のハケメを施す。口縁端部の内外面には横ナデを施す。

遺構の時期は9世紀前葉と推定される。

## 不明2・3 (第47図・写真図版18)

不明2は包含層、不明3はIIIa層である。遺物が特に集中する範囲として注目され、遺構が存在する可能性も想定される。

遺物は須恵器壺12点・壺A1点・壺B蓋5点・碗5点・壺2点・甕19点・不明6点、土師器壺1点・皿1点・甕7点、灰釉陶器碗2点が出土した。

94は須恵器壺である。成形は右回転のロクロナデである。胴部最大径は肩部にあり、卵倒状を呈する。頸部は外湾し、口縁部は面を有する。口縁端部では上方につまみ上げる。

95は灰釉陶器碗である。底部外面に墨書を確認できるが、判読不明である。書体は草書と推測される。高台は方形で、丁寧に貼り付けられる。底部の切り離しはロクロケズリが施されているため不明である。灰釉は体部のみ塗られる。時期は9世紀前葉と推定される。

96は須恵器碗である。成形はロクロナデで、回転方向は不明である。底部の切り離しはヘラ切り技法で、縁辺のみ不定方向のヘラケズリを施す。体部下半に弱い腰部を有し、そこから口縁部にかけて弱く外反する。体部外面に暗灰色に発色した釉を確認できる。内面には焼成不良の灰または釉が厚く堆積する。胎土・焼成・釉から特殊な器種と考えられる。時期は類似する底部糸切りの平底碗の器形から8世紀中葉から後葉と推定される。

97は須恵器の壺B身に類似する器形である。成形は右回転のロクロナデで、底部の切り離しはロクロケズリにより不明である。底部縁辺には4条の溝を確認でき、高台を貼り付ける際の痕跡と考え



第47図 不明2・3平面図、出土遺物図

られる。溝の両側には高台の貼付けナデを確認できる。体部の傾きは小さい。坏Bとは異なる特徴として、口縁端部が肥厚し、面を有すること、そして、底部に円形孔を穿つことである。円形孔は焼成後に上と下から打ち割っている。時期は8世紀中葉から後葉と推定される。

98は土師器の坏と考えられる。底部のみで全体を復元できない。成形はロクロナデである。底部内面と体部に暗文を施し、屈曲部には施されない。暗文は鋸歯文状と平行文状である。底部外面はヘラケズリを施す。この器種の特徴として胎土に金雲母が多量に含まれる。時期は8世紀前葉から中葉と推定される。

### 不明 5・6 (第48図・写真図版19)

不明5・6はⅢa層の範囲で、遺物が集中している範囲である。不明5とした北西隅に焼土範囲を確認できる。この焼土範囲は位置的にもカマドの可能性が高く、不明5・6が堅穴建物である可能性も考慮に入れ、ここで取り上げることとした。不明5・6は遺物の分布範囲が分かれており、1軒以上の堅穴建物の可能性も想定される。また、不明4では遺物の分布が少ないが、大きく搅乱に破壊されている。堅穴建物のカマドは北側に構築される傾向にあり、遺物が集中する範囲が搅乱を受けてい

るものと推察される。よって、不明1～6の範囲には3基以上の竪穴建物が想定されるが、発掘調査が平面での調査に限られており、推測の域を出ないことから本書では竪穴建物とはせず、不明として遺物の集中範囲として報告する。

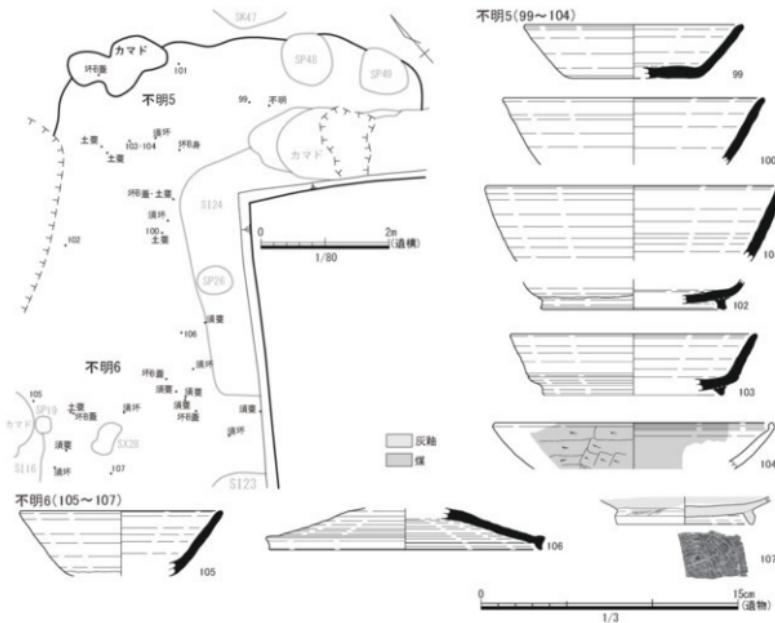
不明5では須恵器壺A1点・壺B蓋2点・壺B身4点・壺類1点、土師器壺1点・甕4点が出土した。

99は須恵器壺Aである。成形は右回転のロクロナデで、底部の切り離しはヘラ切りである。ヘラ切り後、底部縁辺のみナデを施す。底部と体部の境は明瞭で、体部の傾きは大きく器高は低い。時期は8世紀前葉と推定される。

100・101は壺類の口縁部から体部である。底部を欠損しているので、器種判別は困難であるが、器形から壺B身の可能性が高い。成形は右回転のロクロナデである。体部の傾きは99と比較するとやや小さい。時期は8世紀前葉から中葉と推定される。

102は壺B身の底部である。成形は右回転のロクロナデで、底部の切り離しはロクロケズリのため不明である。高台は方形で、中央部よりやや外側を接地点とする。高台の内側は丁寧に貼付けられているのに対して、外側はやや粗く貼り付けられる。内面に降灰や自然釉が厚く堆積する。時期は8世紀前葉から中葉と推定される。

103は須恵器壺B身である。底部と体部の境に1条の沈線を施す。成形は右回転のロクロナデで、底部の成形・調整は不明である。高台は逆三角形で、やや外側を向いて内端接地となる。高台の貼付



第48図 不明5・6 平面図、出土遺物図

けは丁寧である。体部の傾きはやや大きい。時期は8世紀中葉と推定される。

104は土師器杯と考えているが、体部の傾きと器高から皿の可能性もある。成形はロクロナデである。体部は緩やかに内湾し、口縁部では隅丸方形を呈する。口縁部内面に溝が1条確認できる。外面には右から左方向へのヘラケズリを施す。内外面の一部に煤が付着し、胎土には金雲母が多量に含まれる。時期は8世紀代と推定される。

不明6では須恵器杯A1点・杯B蓋4点・杯類5点・甕6点、土師器甕1点、灰釉陶器碗または皿1点が出土した。

105は須恵器杯Aである。成形は右回転のロクロナデで、底部縁辺にヘラ切り痕を確認できる。体部の傾きは大きく、器高が高い。口縁端部には自然釉が掛かり、体部は露胎である。これは重ね焼きの痕跡と考えられる。時期は8世紀前葉から中葉と推定される。

106は須恵器杯B蓋である。成形は右回転のロクロナデである。ロクロナデは目が細かい。天井部は緩やかに外反し、口縁部で垂下する。屈曲部は外面に鋭い稜を有する。口縁部はやや外反し、逆三角形を呈する。天井部の約3分の1の範囲にロクロケズリを2回転施す。時期は8世紀中葉から後葉と推定される。

107は灰釉陶器の碗または皿の底部である。成形は右回転のロクロナデで、底部の切り離しは糸切りである。高台の外面には稜を有し、内面は平坦で内湾しない。高台の貼付けナデは範囲が広く粗い。高台外面の上半にはナデによるシワ状の痕跡がみられる。体部の器壁は薄い。灰釉は体部の内外面に塗られる。時期は10世紀前葉と推定される。

#### (8) 遺構外出土遺物（第49図・写真図版19）

ここでは主に表土中から出土した遺物のことを指す。第8表のとおり、遺構外からは506片出土し、全体の約6割を占める。時期幅は7世紀前葉から13世紀に及ぶ。

108は須恵器杯B蓋である。天井部に墨書「柏または泊口」を確認できる。「白」は判読できるが、へんの方がわずかに確認できる程度で、判読は困難である。「泊」が有力と考えている。また、対角線上にはらいが確認できる。杯B蓋ではつまみを確認できる例が少なく、貴重な資料である。つまみは擬宝珠を上から圧縮した形状を呈する。成形は左回転のロクロナデで、天井部にロクロケズリを施す。胎土の中に、混和材として白色の纖維状のものが入る。時期は8世紀代と推定される。

109は須恵器杯B身である。成形は右回転のロクロナデである。体部の傾きは小さい。内面には暗赤褐色、外面には暗赤褐色から緑色に発色する釉を確認できる。内面はハケ状工具により塗られている。時期は8世紀中葉から後葉と推定される。

110は須恵器杯B身である。器壁は薄く、成形・調整も丁寧で、他の杯Bとは異なる特殊なものと考えられる。成形は右回転のロクロナデで、底部にはロクロケズリを施す。高台は方形で、やや外を向く。全面接地である。体部の傾きはやや大きく、口縁部外面にはナデによる1条の凹線がみられる。109と同様に、内外面に暗赤褐色に発色する釉が掛かる。時期は8世紀前葉から中葉と推定される。

111は須恵器杯の底部片である。外面に墨書「口入」と判読できる。外面にはヘラ切り後粗い板ナデを施し、内面にはロクロナデ後横ナデを施し、滑らかとなる。

112は須恵器高盤である。110と同様に丁寧なつくりをしている。成形はロクロナデである。体部は直線的で、口縁部では端部をつまみ上げる。内外面に暗灰色に発色する釉が掛かる。時期は9世紀前葉と推定される。

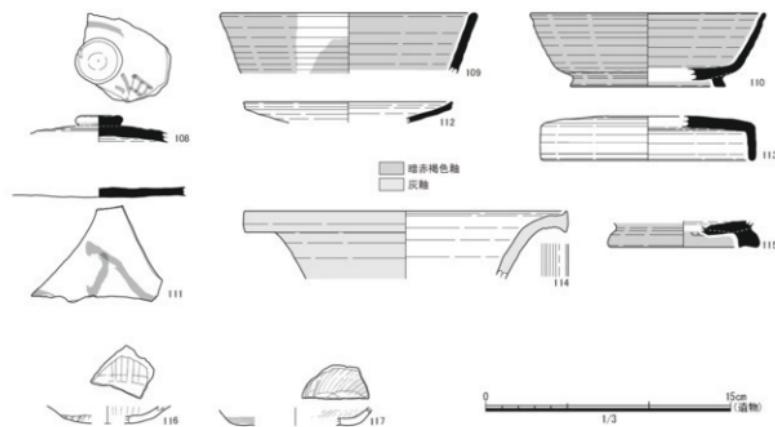
113は須恵器壺蓋である。成形は左回転のロクロナデで、天井部全面にロクロケズリを施す。天井

部から口縁部は垂下し、口縁端部は丸くおさめる。口縁端部以外に自然釉が掛かる。時期は8世紀代と推定される。

114は灰釉陶器壺の口縁部である。成形は右回転のロクロナデである。口縁部は端部で強く外反し、端部は上方に弱くつまみ上げることにより縁帯を形成する。口縁部外面には3条の沈線を確認できる。しかし、この部分は外から見える部分ではないので、装飾として施されたとは考えにくい。沈線部分は強く外反する部分に相当し、口縁部を形成する過程で残された工具痕の可能性が想定される。全面に灰釉がみられる。時期は9世紀前葉から中葉と推定される。

115は須恵器壺または瓶類の高台と考えられる。成形は右回転のロクロナデで、底部にはロクロケズリを施す。底部中央はナデにより凹む。欠損しているため詳細は不明であるが、穿孔の可能性も考えられる。高台は内外面ともに内湾し、端面は凹むことにより、内端と外端接続となる。外面には暗赤褐色に発色する釉が掛かる。

116・117は土師器坏の底部片で、径を復元することはできない。116・117の内面には暗文を確認でき、117は底部と体部の境にも暗文を確認できる。底部はヘラケズリを施す。116の暗文は直線の平行線である。体部内面に確認できる。117では底部内面に円、体部では斜めの平行線を2段に分けて確認でき、外面は3条の平行線を確認できる。成形はロクロナデである。時期は8世紀代と推定される。



第49図 遺構出土遺物図

第9表 第31・37次調査遺構一覧表(1)

遺構名	グリッド	検出面	層位	形状			法量(m)			出土遺物	備考
				平面	断面	長径	短径	深さ			
SI 01	8+9	B-I	■a	方形	—	(2.46)	(2.11)	—	領:环B壙1・环B身3・环1・壙1・壙2・土:壙1、不明1		
施設 カマド	8+9	H	—	梢円形	—	(5.95)	5.90	—			
SI 03	8+9	H	■a	方形	—	(3.39)	(2.48)	—	領:壙2・壙2、土:壙1		
SI 04	9	B-I	■a	方形	—	(2.45)	(2.19)	—	領:环B身2・环7・壙12、土:壙7、灰: ■2		
施設 カマド	9	B-I	—	梢円形	—	(1.04)	(1.02)	—			
SI 16	10	I-J	■a	方形	—	(3.68)	3.32	—	領:环B壙2・环9・壙1・壙2、土:壙7、灰: ■3、不明1		
施設 カマド	10	I	—	梢円形	—	0.96	0.96	—			
SI 23	11	J	■a	方形	—	1.94	(0.95)	—	領:环B壙1・壙2・环3、土:壙1・壙2、灰: ■2		
施設 カマド	11	J	—	梢円形	—	(0.70)	(0.39)	—			
SI 24	11+12	I-J	■a	方形	—	4.83	4.38	—	領:环B壙2・壙2・环10・壙2、土:环1・壙8、不明2		
施設 カマド	11+12	I	—	梢円形	—	(1.27)	1.10	—			
SI 40	11	F-G	V	不整形	—	3.90	(2.20)	—	領:壙1・壙1・瓶1		
SI 43	12	G-H	V	方形	—	2.88	2.70	—	土:壙1		
SI 72	12+13	G-H	V	方形	—	4.90	4.55	—	領:壙4・壙1、土:环1・壙5		
施設 カマド	13	G	—	梢円形	—	(0.80)	0.81	—			
SK 06	9	I	V	梢円形	—	(0.79)	(0.70)	—			
SK 07	9	I	V	梢円形	—	0.88	(0.37)	—			
SK 09	9	I	V	方形	—	1.17	1.00	—			
SK 10	9+10	I	V	方形	—	1.42	1.17	—	領:壙1・壙1		
SK 12	10	H	V	梢円形	—	1.10	1.04	—	領:环1、山:昌、不明1		
SK 14	9+10	I	V	梢円形	—	0.86	0.79	—			
SK 15	9	B-I	V	梢円形	—	(0.97)	(0.70)	—			
SK 33	10+11	G	V	不整形	—	1.38	0.88	—	領:壙1、土:环1・壙2		
SK 34	10+11	G-H	V	梢円形	—	1.30	1.02	—			
SK 35	11	H	V	梢円形	—	0.89	0.66	—			
SK 36	10	F	V	梢円形	—	0.64	0.48	—			
SK 37	10	G	V	梢円形	—	0.64	0.59	—			
SK 38	11	G	V	梢円形	—	0.58	0.56	—	不明1		
SK 39	10+11	F	V	梢円形	—	(1.24)	0.86	—			
SK 42	12	G-H	V	I 不整形	段状	1.62	1.13	—	領:环B身2・壙1・环1・壙1・瓶1・壙2、土:壙7、铁:1		
SK 44	13	F-G	V	梢円形	—	1.72	1.08	—	領:环B身1・壙1・环1、土:壙2		
SK 45	11	H	V	梢円形	—	1.47	0.98	—			
SK 46	11+12	H	V	梢円形	—	1.29	1.00	—			
SK 47	12	B-I	V	梢円形	—	1.40	0.98	—			
SK 69	13+14	G-H	V	不整形	—	3.76	1.95	—	領:环B壙1・环2・壙1、土:壙3		
SK 70	13+14	G-H	V	不整形	—	3.00	(2.26)	—	領:壙1		
SK 71	14	G-H	V	不整形	—	(3.06)	1.48	—	領:壙1、土:壙1		
SK 75	13+14	G	V	梢円形	—	1.81	1.47	—	領:环B身2、土:壙3		
SK 91	13	J	V	梢円形	—	0.58	0.38	—			
SK 93	13	F-G	V	梢円形	—	(1.83)	(0.55)	—			
SD 41	11+12	F-I	V	曲輪	—	11.36	0.31～0.68	—	土:壙1		
SD 67	12+13	I-J	V	蛇行	—	16.90	0.48～1.30	—	領:环H身1・环H壙2・环2・壙2、土:壙3、不明1		
SD 68	12+14	G-I	V	直輪	—	6.05	0.35～0.65	—			
SK 28	10+11	I	■a	不整形	—	0.53	0.29	—			
SK 30	10	H	■a	梢円形	—	0.79	0.67	—	領:环B壙1・壙1、土:壙5		
SK 31	10	G	■a	梢円形	—	(0.70)	0.56	—			
SK 32	10	G	■a	円形	—	0.63	0.61	—	領:壙1・壙1		
SA 27	12	I	V	直輪	—	2.65	—	—			
構成	SP 48	12	I	V	円形	—	0.86	0.79	—		
	SP 49	12	I	V	方形	—	0.85	0.73	—		
	SP 50	12	I	V	方形	—	0.83	0.67	—		

第10表 第31・37次調査遺構一覧表(2)

遺構名	グリッド	検出面	層位	形状		法量(m)			出土遺物 遺物番号、土・土器類、瓦・瓦器類、石・石器類 目・目録番号、鉢・壺類等	備考
				平面	断面	長径	短径	深さ		
SB 92	12-13	H-I	V	—	長方形	—	3.65	2.93/3.54	—	
SP 56	12-13	H	V	2	方形	T字	1.09	0.94	0.61	上:壁I
SP 58	13	H	V	—	方形	—	1.11	1.02	—	
SP 61	13	H-I	V	—	方形	—	1.33	0.94	—	上:壁I
SP 66	13	I	V	—	複円形	—	1.06	(0.70)	—	
SP 59	13	I	V	—	複円形	—	(0.90)	1.09	—	
SP 57	12-13	I	V	—	方形	—	1.07	0.61	—	
SP 55	12-13	H	V	—	複円形	—	0.97	(0.82)	—	
SP 54	12	I	V	—	不整形	—	1.33	0.17	—	
SP 62	12-13	H	V	—	方形	—	0.85	0.82	—	
SP 64	12-13	I	V	—	方形	—	1.03	0.99	—	
SP 08	9	I	V	—	円形	—	0.50	(0.42)	—	
SP 11	9	I	V	—	円形	—	(0.53)	0.53	—	
SP 13	9-10	I	V	—	円形	—	0.75	0.61	—	
SP 18	10	I	■■■	—	円形	—	0.60	0.54	—	
SP 19	10	I	■■■	—	円形	—	0.27	0.24	—	下:壁I
SP 20	10	J	■■■	—	方形	—	(0.79)	(0.68)	—	
SP 22	11	J	■■■	—	複円形	—	0.81	(0.44)	—	
SP 26	11	I	■■■	—	円形	—	0.55	0.44	—	下:壁I, 土:壁I
SP 51	12	I	V	—	方形	—	0.83	0.75	—	
SP 52	12	H	V	—	方形	—	0.94	0.76	—	
SP 53	12	H	V	—	円形	—	0.44	0.40	—	
SP 63	13	H-I	V	—	方形	—	0.92	0.82	—	
SP 65	12-13	H	V	—	複円形	—	0.80	0.72	—	
SP 66	13	H	V	—	複円形	—	0.81	0.67	—	上:壁I
SP 74	13-14	G	V	—	方形	—	(1.00)	(0.97)	—	上:壁I
SP 76	15	H	V	—	複円形	—	0.37	0.25	—	
SP 77	15	H	V	—	複円形	—	4.53	(1.88)	—	
SP 78	15	H	V	—	円形	—	0.21	0.19	—	
SP 79	15	H	V	—	円形	—	0.29	0.27	—	
SP 80	14	H-I	V	—	円形	—	0.32	0.29	—	
SP 81	14	I	V	—	複円形	—	0.36	0.26	—	
SP 82	14	I	V	—	円形	—	0.24	0.20	—	
SP 83	14	I	V	—	複円形	—	0.34	0.29	—	
SP 84	14	I	V	—	複円形	—	0.23	0.19	—	
SP 85	14	I	V	—	複円形	—	0.54	0.47	—	
SP 86	14	I	V	—	円形	—	0.49	0.43	—	
SP 87	14	I	V	—	複円形	—	0.29	0.27	—	
SP 88	13	J	V	—	複円形	—	0.38	0.33	—	
SP 89	13	J	V	—	複円形	—	0.42	0.30	—	
SP 90	13	J	V	—	複円形	—	0.95	0.69	—	
31 SP 01	12	F-G	V	—	不整形	—	1.06	0.95	—	第31次
31 SP 02	12	G	V	—	不整形	—	1.37	0.93	—	第31次
31 SP 03	12	G	V	—	不整形	—	1.22	0.85	—	第31次
31 SP 04	12	G	V	—	不整形	—	(0.60)	(0.40)	—	第31次

第11表 第31-37次調査遺物觀察表 (1)

番号	種類	種類名	法線 (NW)	遺物・標本・観察表		出土	構成	色調	保存状態	備考	
				内部	外側						
43	陶器類	土器 (12.0, 鋼製) (14.40) 鉄製, 黒, 細	ヨコラバツ	ヨコラバツ。底: 木製	黒, 青	不良	内: 外: 順: 10.97±0.01褐色地	白～黒	0001-9-1-130		
44	陶器類	土器 (6.40) 鉄製	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 赤	良好	内: 外: 10.95±0.01褐色	白～黒 0.0±0.0	0001-1-134		
45	陶器類	土器 (1.00) 鉄製 (高台) (9.7)	ヨコラバツ	ヨコラバツ。底: ヨコラバツ	青, 青石	中-中良	内: 外: 10.97±0.01褐色地	青	0001-375		
46	陶器類	土器 (16.0, 鋼製) (10.00) 鉄製	ヨコラバツ	ヨコラバツ。底: 木製	青, 青石	中-中良	内: 外: 10.97±0.01白色	白～黒 0.0±0.0	0001-1-135		
47	陶器類	土器 (7.1) 鉄製	ナード・版ナサ	ナード・版ナサ	青, 青石	不良	内: 外: 10.94±0.01褐色地	青	0001-367		
48	陶器類	土器 (15.0, 鋼製) (14.40) 鉄製 (高台) (10.2)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.96±0.01褐色	白～黒 0.0±0.0	0001-342, ヨコラバツ		
49	灰陶器類	土器 (14.7), 鋼製 (2.0)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	中-中良	内: 外: 10.97±0.01褐色地	白～黒	0001-136, ヨコラバツ		
50	灰陶器類	土器 (14.7), 鋼製 (2.0) 鉄製	ヨコラバツ, 地陶	ヨコラバツ, 地陶	青, 青石	良好	内: 外: 10.97±0.01白色	白～黒 0.0±0.0	0001-125, ヨコラバツ		
51	陶器類	標識 (11.00), 鋼製 (12.0)	ヨコラバツ	ヨコラバツ。底: ヨコラバツ	青, 青石	中-中良	内: 外: 10.94±0.01褐色地	青	0001-106		
52	陶器類	土器 (16.0), 鋼製 (16.0) 鉄製 (高台) (16.0)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石, 銀	中-中良	内: 外: 10.97±0.01褐色地	黒～青 1.0±0.0	0001-109-114-008-130		
53	陶器類	土器 (1.00), 鋼製 鉄製 (高台) (1.00)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	不良	内: 外: 10.94±0.01褐色地 0.0±0.0	青	0001-109		
54	陶器類	土器 (1.00), 鋼製 鉄製	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	中-中良	内: 外: 10.97±0.01白色	白	0001-109		
55	陶器類	土器 (16.4), 鋼製 (2.0)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.97±0.01白色	白～黒 0.0±0.0	0001-110, ヨコラバツ		
56	灰陶器類	土器 (15.0), 鋼製 (5.0) 鉄製 (高台) (4.0)	ヨコラバツ	ヨコラバツ。底: ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.96±0.01白色	白～黒 0.0±0.0	0001-140-138		
57	灰陶器類	土器 (12.0), 鋼製 (3.0) 鉄製 (高台) (3.0)	ヨコラバツ, 作: 地陶	ヨコラバツ, 地: 地陶	青, 青石	良好	内: 外: 10.97±0.01白色	白～黒 0.0±0.0	0001-333		
58	灰陶器類	土器 (1.00), 鋼製 (1.00) 鉄製 (高台) (1.00)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.96±0.01白色	白～黒 0.0±0.0	0001-112, 一地陶		
59	灰陶器類	土器 (1.00), 鋼製 (1.00)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.96±0.01白色	白～黒 0.0±0.0	0001-107		
60	灰陶器類	土器 (1.00), 鋼製 (1.00)	ヨコラバツ, 地: 地陶	ヨコラバツ, 地: 地陶	青, 青石	良好	内: 外: 10.95±0.01白色	白～黒 0.0±0.0	0001-144		
61	灰陶器類	土器 (1.00), 鋼製 (1.00)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	中-中良	内: 外: 10.97±0.01褐色地	青	0001-329		
62	人骨類	土器 (18.1), 鋼製 (14.0)	横板ナサ	横板ナサ	青, 青石, 銀	良好	内: 外: 10.97±0.01褐色地	白	0001-328		
63	人骨類	土器 (12.0), 鋼製 (3.0)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.97±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-242		
64	灰陶器類	土器 (12.7), 鉄製 (13.0) 鉄製 (高台) (6.0)	ヨコラバツ, 作: 地陶	ヨコラバツ, 作: 地陶	青, 青石, 銀	良好	内: 外: 10.97±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-240		
65	土器類	土器 (18.0), 鋼製 (3.0)	ヨコラバツ, 地: 地陶	ヨコラバツ, 地: 地陶	青, 青石	中-中良	内: 外: 10.96±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-100-101		
66	土器類	土器 (13.7), 鋼製 (12.0)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.96±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-239-238-237		
67	土器類	土器 (15.0), 鋼製 (6.00)	ヨコラバツ, 爪	ヨコラバツ, 爪	青, 青石	良好	内: 外: 10.96±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-194-240-247		
68	陶器類	土器 (17.0), 鋼製 (14.0)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.96±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-298		
69	陶器類	土器 (18.0), 鋼製 (3.0)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.96±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-330		
70	陶器類	土器 (12.0), 鋼製 (12.0) 鉄製 (高台) (4.5)	ヨコラバツ	ヨコラバツ, 地: 地陶	青, 青石	中-中良	内: 外: 10.96±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-4-901		
71	陶器類	土器 (1.00), 鋼製 (1.00)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	不良	内: 外: 10.95±0.01褐色地	青	0001-276		
72	陶器類	土器 (16.0), 鋼製 (6.0) 鉄製 (高台) (4.0)	ヨコラバツ, 地: 地陶	ヨコラバツ, 地: 地陶	青, 青石	良好	内: 外: 10.96±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-364		
73	土器類	土器 (14.0), 鋼製 (12.0)	ヨコラバツ, 地: 地陶	ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.96±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-362		
74	土器類	土器 (9.0), 鋼製 (6.0) 鉄製 (高台) (4.0)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石, 銀	良好	内: 外: 10.94±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-379		
75	土器類	土器 (17.1), 鋼製 (7.0)	横板ナサ	横板ナサ	青, 青石, 銀	良好	内: 外: 10.94±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-378		
76	土器類	土器 (13.7), 鋼製 (12.0)	ヨコラバツ, 爪ナサ	ヨコラバツ, 爪ナサ	青, 青石	中-中良	内: 外: 10.96±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-149		
77	土器類	土器 (1.00), 鋼製 (1.00)	ヨコラバツ, 爪ナサ	ヨコラバツ, 爪ナサ	青, 青石	良好	内: 外: 10.97±0.01褐色地	白	0001-150		
78	土器類	土器 (12.0), 鋼製 (7.00)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	不良	内: 外: 10.96±0.01褐色地 -2.0±2.0	青黄色	100	0.0±0.0	
79	土器類	土器 (12.0), 鋼製 (7.00)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.96±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-057		
80	土器類	土器 (6.0), 鋼製 (6.0)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.96±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-067		
81	山塙編	土器 (12.1), 鋼製 (3.00)	ヨコラバツ, ハサウエ	ヨコラバツ, ハサウエ	青, 青石	良好	内: 外: 10.94±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-09-174-339		
82	山塙編	土器 (13.0), 鋼製 (3.0)	ヨコラバツ, ハサウエ	ヨコラバツ, ハサウエ	青, 青石	良好	内: 外: 10.94±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-152, ヨコラバツ		
83	山塙編	土器 (12.0), 鋼製 (3.0)	ヨコラバツ, ハサウエ	ヨコラバツ, ハサウエ	青, 青石	良好	内: 外: 10.95±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-097		
84	山塙編	土器 (6.0), 鋼製 (6.0)	ヨコラバツ	ヨコラバツ, ハサウエ	青, 青石	不良	内: 外: 10.94±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-074, ヨコラバツ		
85	山塙編	土器 (11.0), 鋼製 (1.00)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.97±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-071		
86	土器類	土器 (14.0), 鋼製 (10.0)	横板ナサ	横板ナサ	青, 青石	良好	内: 外: 10.96±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-077		
87	土器類	土器 (1.00), 鋼製 (1.00)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.95±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-097		
88	土器類	土器 (6.0), 鋼製 (6.0)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	中-中良	内: 外: 10.95±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-077-0-277		
89	土器類	土器 (16.0), 鋼製 (11.0)	ヨコラバツ	ヨコラバツ, ハサウエ	青, 青石	良好	内: 外: 10.94±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-074, ヨコラバツ		
90	土器類	土器 (11.0), 鋼製 (1.00)	ヨコラバツ	ヨコラバツ	青, 青石	良好	内: 外: 10.95±0.01褐色地	白～黒 0.0±0.0	0001-071		

第12表 第31・37次調査遺物観察表（2）

番号 No.	機器 機器名	遺物 位置	遺量 (kg)	形状・質地・範囲等		出土	集成	色調	備考	備考番号
				内面	外面					
89	植物類 樹木類	SD49	(1段) (15.7), 露西 (0.3) 底面 -	クロロナデ 丸・トクナケツリ	小や粒 露石	良好	内・外面: IPH 1-1-3-1/18 黄褐色 5kg	天~白 5kg	SD07-228, ロクロ右	
90	上部樹 木	SD75	(1段) (16.0), 露西 (0.25) 底面 -	クロロナデ・横ナデ 丸・トクナケツリ	小や粒 露石	良好	内面: 1. 317/16 黄褐色 外面: 1. 317/17/21C-25, 黄褐色 5kg	白~褐 5kg	SD07-267-209-218 SD07大字く(露)	
91	植物類 樹木類	SD87	(1段) (11.0), 露西 (0.43) 底面 -	クロロナデ 丸・トクナケツリ	小や粒 露石, 露母	良好	内・外面: 2. 376/16 黄褐色 5kg	天~白 5kg	SD07-253, ロクロ左	
92	植物類 樹木類	SD30	(1段) (22.6), 露西 (1.6) 底面 -	クロロナデ	小や粒 露石	良好	内・外面: 37/16 黄褐色 5kg	白 5kg	SD07-52	
93	上部樹 木	SD36	(1段) (18.2), 露西 (0.9)	クロロナデ 丸・横・横ハケメ	小や粒 露石, 露母	良好	内・外面: 3. 317/16 黄褐色 5kg	白~褐 5kg	SD07-63	
94	植物類 樹木類	SD48	(1段) (16.0), 露西 (0.9)	クロロナデ	小や粒 露石	良好	内・外面: 5/16 黄褐色 5kg	白~褐 5kg	SD07-36-39-44-109 SD07 0.1 右	
95	灰岩層 底	不明	(1段) (14.3), 露西 (2.0) 底面 (露母)	クロロナデ 横・実相	クロロナデ, 露ロコロカ リ・ワニサギ / ? ハクモウ	良好	内・外面: 36/16 黄褐色 5kg	天~白 5kg	SD07-48, ロクロ左	
96	植物類 樹木類	SD49	(1段) (13.0), 露西 (1.40) 底面 (露母)	クロロナデ	クロロナデ, 明るい 露・ハクモウ・ヘラクツリ	良好	内面: 317/16 黄褐色 外面: 320/16 黄褐色 5kg	天~白 5kg	SD07-348, ロクロ左	
97	植物類 樹木類	SD49	(1段) (11.7), 露西 (0.1) 底面 (露母)	クロロナデ	クロロナデ, 露ロコロカ リ, 高山椿, 中央乳頭	良好	内・外面: 36/16 黄褐色 5kg	白~褐 5kg	SD07-82, ロクロ左	
98	上部樹 木	SD49	(1段) (12.0), 露西 (1.50) 底面 (露母)	クロロナデ, 横文	クロロナデ 露・ヘラクツリ	良好	内・外面: 37/16 黄褐色 5kg	天~白 5kg	SD07-378	
99	植物類 樹木類	SD49	(1段) (12.8), 露西 (3.10) 底面 (露母)	クロロナデ	クロロナデ 露・セリウム・鍾乳苔	良好	内・外面: 3. 317/16 黄褐色 5kg	天~白 5kg	SD07-265, ロクロ左	
100	植物類 樹木類	SD49	(1段) (15.5), 露西 (2.30)	クロロナデ	小や粒 露石	良好	内・外面: 5/16 黄褐色 5kg	白~褐 5kg	SD07-273, ロクロ左	
101	植物類 樹木類	SD49	(1段) (17.1), 露西 (1.6) 底面 -	クロロナデ	小や粒 露石	良好	内・外面: 37/16 黄褐色 5kg	白~褐 5kg	SD07-238, ロクロ左	
102	植物類 樹木類	SD49	(1段) (17.0), 露西 (1.70) 底面 (露母)	クロロナデ 横・実相	クロロナデ 露・ヘラクツリ	良好	内・外面: 37/16 黄褐色 5kg	天~白 5kg	SD07-279, ロクロ左	
103	植物類 樹木類	SD49	(1段) (11.4), 露西 (0.30) 底面 (露母)	クロロナデ	クロロナデ, 体下: 深緑 露・セリウム, 露母, 露石	良好	内・外面: 37/16 黄褐色 5kg	天~白 5kg	SD07-268, ロクロ左	
104	上部樹 木	SD49	(1段) (14.4), 露西 (2.27) 底面 -	クロロナデ, 横	クロロナデ・ヘラクツリ 露	良好	内・外面: 37/16 黄褐色 5kg	白~褐 5kg	SD07-268	
105	植物類 樹木類	SD49	(1段) (11.3), 露西 (3.8) 底面 -	クロロナデ	クロロナデ 露・ハクモウ	良好	内・外面: 3. 317/16 黄褐色 外面: 320/16 黄褐色 5kg	天~白 5kg	SD07-327, ロクロ左	
106	植物類 樹木類	SD49	(1段) (15.4), 露西 (2.0) 底面 (露母)	クロロナデ	クロロナデ 露・ヘラクツリ	良好	内・外面: 3. 317/16 黄褐色 露・露母	天~白 5kg	SD07-280, ロクロ左	
107	植物類 樹木類	SD49	(1段) (16.0), 露西 (0.4) 底面 (露母)	クロロナデ 体・実相	クロロナデ, 体下: 深緑 露・セリウム, 露母, 露石	良好	内・外面: 37/16 黄褐色 5kg	天~白 5kg	SD07-265, ロクロ左	
108	植物類 樹木類	表土	(1段) (1.4), 露西 (1.4)	クロロナデ	小や粒 露石	良好	内面: 36/16 黄褐色 / 5kg 錆色 外面: 36/16 黄褐色	天 5kg	SD07-11 SD07 0.1 右	
109	植物類 樹木類	表土	(1段) (1.0), 露西 (0.7)	クロロナデ	小や粒 露石	良好	内面: 3. 317/16 黄褐色 外面: 320/16 黄褐色	天~白 5kg	SD07-11 SD07 0.1 右	
110	植物類 樹木類	表土	(1段) (1.4), 露西 (1.5) 底面 (露母)	クロロナデ	クロロナデ, 露・ロコロカ リ, 对馬赤松	良好	新上: 3. 317/16 黄褐色 露・露母	天~白 5kg	SD07-5-264-306 SD07 ロクロ右	
111	植物類 樹木類	表土	(1段) (1.4), 露西 (1.5) 底面 -	クロロナデ	クロロナデ 露・横ナデ	良好	新上: 3. 317/16 黄褐色 露・露母	天~白 5kg	SD07-2	
112	植物類 樹木類	表土	(1段) (12.8), 露西 (1.00)	クロロナデ, 棕灰色輪	露	良好	内面: 34/16 黄褐色 / 5kg 錆色 外面: 36/16 黄褐色	天 5kg	SD07-202	
113	植物類 樹木類	表土	(1段) (13.40), 露西 (1.27)	クロロナデ	小や粒 露石	良好	内面: 3. 317/16 黄褐色 外面: 320/16 黄褐色	天~白 5kg	SD07-2 SD07 0.1 右	
114	灰岩層 底	触出	(1段) (19.0), 露西 (1.05)	クロロナデ	クロロナデ 露・露母	良好	内・外面: 317/16 黄褐色 / 5kg 錆色 露・露母	天~白 5kg	SD07-149, ロクロ左	
115	植物類 樹木類	G11	(1段) (1.4), 露西 (1.4)	クロロナデ	クロロナデ 露・露母	良好	内面: 36/16 黄褐色, 外面: 320/16 黄褐色 露・露母	天~白 5kg	SD07-149, ロクロ左	
116	土壤層 底	表土	(1段) (1.4), 露西 (1.4)	クロロナデ	小や粒 露母	良好	内・外面: 37/16 黄褐色 露・露母	天~白 5kg	SD07-1	
117	土壤層 底	表土	(1段) (1.4), 露西 (1.4)	クロロナデ	小や粒 露母	良好	内・外面: 317/16 黄褐色 露・ヘラクツリ	天~白 5kg	SD07-1, ロクロ右	

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 はじめに

上町遺跡における遺構検出面は、基本的に第IV・V層上面である。今回報告する3地点の遺構検出面も、第30次調査区は第IV層上面、第33次調査区も第IV層上面、第37次調査区は第V層上面であつた。第IV層と第V層とは、砂層と疊層という土質の違いにより分層している。ともに宮川に由来する砂疊層で有機物が混入する形跡は見られない。一方、第33次・37次調査では、地山層の上層で弥生時代以降奈良時代に堆積したと考えられる黒褐色土の第III層、さらにその上層に平安時代以降に堆積したと考えられる黒褐色土の第II層を確認した。第IV・V層で検出される遺構は黒褐色土を埋土としており、第II・III層から掘り込まれているものと想定できる。このため、調査区壁面と遺構断面の観察を行うことにより、上町遺跡の遺跡形成過程及び埋没過程を検討することができるものと考えられた。ここでは第30次・33次調査において堆積学及び土壤学的な観点から行った土層堆積の断面観察の結果を報告する。分析は、辻本裕也・千葉博俊（パリノ・サーヴェイ株式会社）が行った。

### 第2節 土層堆積分析の調査と方法

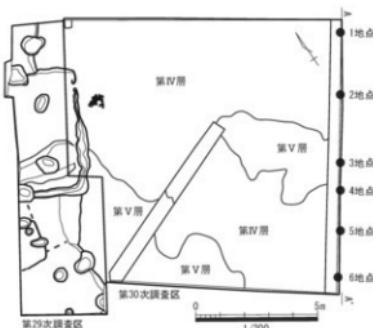
現地調査については、第30次調査では2013（平成25）年5月22日に、第33次調査では6月14・23日に実施した。方法として、土層断面において堆積学・土壤学的な観点から観察を行った。

第30次調査ではサブトレーナーを利用して調査区東壁断面の6地点（第50・51図）において、第33次調査では調査区壁面断面4地点及び遺構埋土3地点の計7地点において実施した（第52・53・54図）。観察結果では、調査時の層序区分と整合させるため発掘調査時の層名を用いたが、細分される場合はa・bの枝番号を付した。

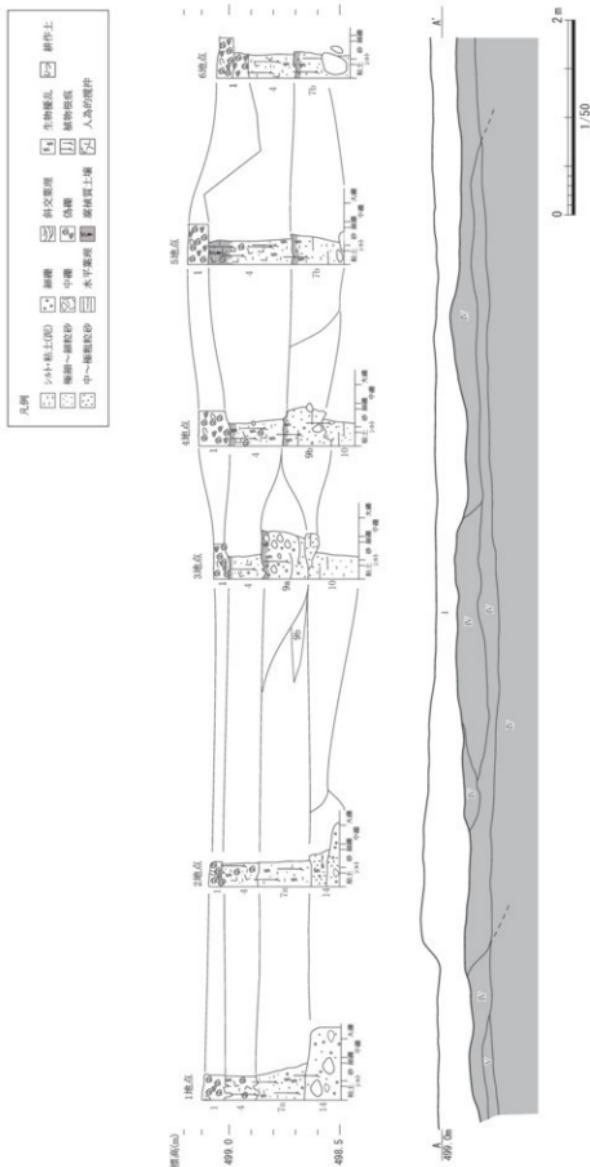
### 第3節 第30次調査での観察結果

**1層** 現在の表層をなす堆積土層である。南側では4層を削平して厚く堆積する。1層上部は著しく搅拌された砂質泥からなり、中・下部は大疊・中疊・細疊・粗粒砂が多く混じる泥質砂とその偽疊からなる。偽疊の大きさは1～5cm程度で、形状はブロック状をなすものが多い。分布は不規則である。下位層との層界は明瞭である。このような層相から、1層は人為的に形成された堆積物で、耕作土として利用されていたと推定できる。基本層序の第Ia層に該当する。

**4層** 黄褐色を呈する泥質細粒砂～細粒砂質泥からなる。下位層との層界は明瞭で、凹凸が著



第50図 第30次調査地点の位置図



第51図 第30次調査区の堆積層の累重状況・東壁断面図

しい。層全体が著しく攪拌されてブロック状の偽礫が形成され、分布は不規則である。

上部ではやや腐植を含んで攪乱が顕著となり、間隙密度が高くなる。また、鉛直方向に伸びる幅数cm程度の樹木由來の根成孔隙や、1mm前後の根成孔隙が密に分布する。樹木由來の根成孔隙は腐植質土壌で充填されているものが多い。このような層相から、本層は氾濫堆積物（溢流堆積物）が人為的に攪拌された堆積物とみられる。最上部は、層相変化から1層形成期に人為的に削平されたと推定される。基本層序の第I a層に該当する。

**7a層** 見かけ上塊状をなす黄褐色を呈する泥質細粒砂からなる。部分的に9a層形成期に侵食されている。生物擾乱が著しく、初生の堆積構造は不明瞭となっているが、細粒砂・粗粒砂がレンズ状に挟在していることから、複数回の氾濫や洪水により堆積した土層と考えられる。上層から連続する根成孔隙が密に分布する。根成孔隙は腐植質土壌で充填されているものが多い。また、中部は9b層と同時に堆積している可能性が高いが、生物擾乱により判断が難しい。基本層序の第IV層に該当する。

**7b層** 上方粗粒化する砂質泥～泥混じり細粒砂からなり、上部は土壌生成作用が及んでいるが、顕著な腐植の集積が進行する程度ではない。層相から氾濫堆積物と判断され、上層に向けて地下水位が上昇傾向にあったことが推定される。基本層序の第IV層に該当する。

**9層** 凸状に産んだ堆積空間を充填する砂礫層の堆積である。本断面では少なくとも2回の堆積単位を確認できるため、上位を9a層、下位を9b層とする。9a層は4層上部を侵食しており、9b層は10層上部を侵食している。いずれも侵食している堆積物の偽礫を取り込んでいため、破堤堆積物などのように激しい流れにより形成された堆積物の可能性がある。また、上部は土壌生成が進行しているが、最上部は4層形成時の人の攪拌により消失している。基本層序の第IV層に該当する。

**10層** 砂質泥～泥混じり細粒砂からなる。氾濫堆積物の構造である逆級化成層をなす（増田・伊勢屋1985）。不明瞭ながら水平葉理が確認される上部では生物擾乱により堆積が乱れており、また上層の侵食作用により消失している。基本層序の第IV層に該当する。

**14層** 断面北端に位置する砂礫～砂からなる。上方粗粒化する。層相から流路充填堆積物あるいは氾濫時に流入した堆積物の可能性がある。本層は発掘調査底面で確認しており、土層下方の様相が不明のため、堆積環境を特定するには至らない。基本層序の第V層に該当する。

## 第4節 第33次調査での観察結果

### (1) 調査区壁の観察結果

**1層** 暗灰色～灰色を呈する泥質砂と、その偽礫・微小ブロックからなり、細礫・中礫・大礫・微細な炭片が混じる。下部は5～10cm程度の亜角～亜円とブロック状をなす偽礫からなる。偽礫は、下層の2層上部由來の灰色砂質泥のほか、泥質砂と暗灰色有機質腐植質砂質泥などからなり、層中はこれらが不規則に混在している状況である。下層の2層との層界は明瞭で、凹凸が著しい。一方、上部には偽礫が少なく、小さくなり、著しく攪拌されている状況である。また最上部では腐植の集積を確認できる。これら堆積層中には全体的に放射方向および鉛直方向に伸びる根成孔隙が密に分布している。以上の層相から、1層は人為的營力を受けた堆積物と判断され、耕作土と推定される。下半部の構造は代掻きなどによって生じた構造と推定される。基本層序の第I a・b層に該当する。

**2層** 灰色を呈する細礫・中礫混じり泥質砂と、その偽礫・微小ブロックからなる。本層も1層と同様の層相を示している。下部では亜角でブロック状をなす偽礫および大礫・中礫が混じる。上部では偽礫の形状が小さくなり、亜円をなすものが多くなり、最上部で腐植の集積が確認される。また、

上部と下部の境付近には酸化鉄・マンガンの沈着が確認される。以上の層相から、2層も1層と同様に人為的營力によって形成された堆積物で、上部は耕作土として利用されていたことが推定される。基本層序の第I c層に該当する。

**3層** 黒褐色を呈する腐植質泥質砂～砂質泥からなり、細礫・中礫、微細な炭片が混じる。全体的に根成孔隙・間隙が多く分布する。著しい搅拌ないし擾乱により初生の堆積構造は不明瞭となっているが、部分的に砂葉理片を挟在するなど、洪水時の氾濫の影響を受けていることが確認される。下位の4層との層界は漸移的である。以上のことから、相対的に安定した土壤生成が進行する氾濫原の堆積環境で形成された堆積物と判断される。3層は氾濫堆積物を母材とする累積性の土壤であり、河川氾濫の影響を頻繁に受け、草地植生の再生・更新が行われる土壤生成環境であったと推定される。基本層序の第II a層に該当する。

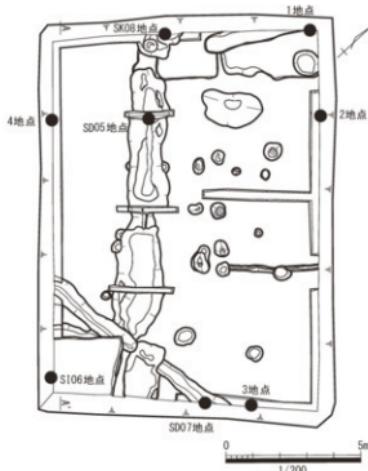
**4層** 暗褐色を呈する腐植質泥質細粒～中粒砂・砂礫からなり、調査区西部の低所に分布する。調査区東部にも堆積したと想定されるが3層形成期の土壤生成作用により搅拌され不明瞭となっていると判断される。上部は生物擾乱等により初生の堆積構造は不明瞭となっているが、遺構内など凹地部分の本層では葉理構造が残存している。このような層相から、4層は氾濫原の堆積環境下で形成された洪水堆積物からなり、堆積後には土壤生成が進行する時期を挟在していることが推定される。なお、本層は古墳時代から古代の堆積と考えられる第III層を覆う堆積物であり、上町遺跡における古代の人間活動の断絶と関係している環境変化を示す可能性もある。基本層序の第II b層に該当する。

**5層** 第33次調査で遺構面と考えられる土層の基盤をなす堆積物で上方細粒化する砂礫～細粒砂ないし泥質砂からなる。上部に向けて、土壤生成が進行しており、腐植が集積する。また、北東から南東方向に連続する下に凸な疊層の分布が確認され、疊の配向から現在の荒城川方向からの土砂流出によって形成された堆積物と考えられる。堆積後には何らかの要因により離水し、土壤生成が進行する比較的安定した堆積場へと変化したことが推定される。古墳時代の遺構は、この土壤生成が進行する層準から構築されている状況が確認される。基本層序の第III～V層に該当する。

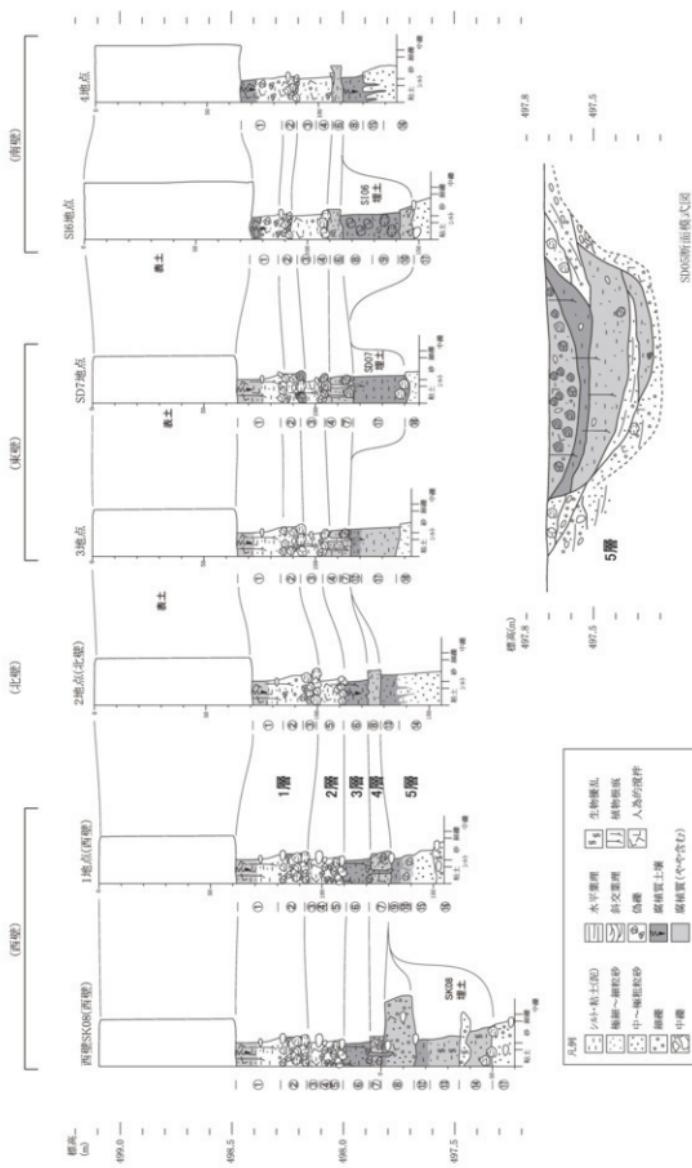
## (2) 遺構埋土の観察結果

第III層上面から掘り込まれる土坑や溝などの遺構埋土は、遺構間で多少の差異がある。以下に各遺構の層相について記載する。

**SK08** 暗灰色を呈する腐植をやや含む泥質砂～砂質泥からなり、標高497.5m付近に洪水堆積物とみられる砂層を挟在する。根成孔隙が多数存在し、それら生物擾乱により初生の堆積構造が不明瞭となっている。最下部には5層由來の偽疊が散在する。遺構埋土は4層の細礫・中礫からなる砂疊で覆われており、その直下では土壤構造が著しく発達している。人為的營力を示す堆積物は存在せず、洪



第52図 第33次調査地点の位置図



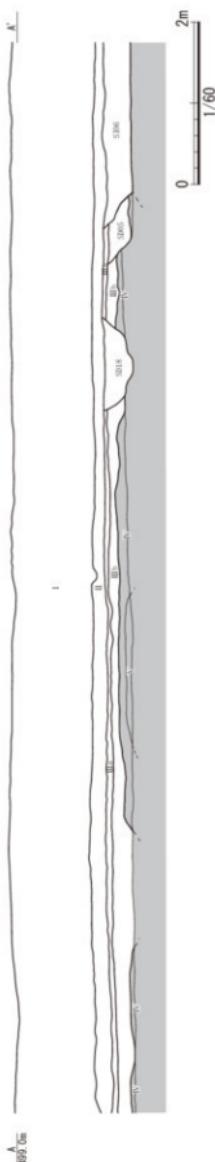
第53図 第33次調査区の堆積層の累積状況図

水や周辺からの流れ込み等の自然の營力で形成された累積性の土壤と推定される。

**SD07** 埋土は黒褐色を呈する腐植質泥質砂からなる。最下部には遺構掘削時に生じた5層由來の偽礫が混じる。根成孔隙が多数存在し、それら生物擾乱により初生の堆積構造が不明瞭となっている。本埋土もSK08と同様に自然の營力下で形成された累積性の土壤と推定される。ただし、土色からみた相対的な腐植含量はSK08よりも多く、多少異なっている。

**SD05** 本遺構は基盤堆積物の5層の分布方向と直交する東西方向に北西～南東方向に構築されている。埋土の堆積状況から再掘削されている状況を確認できる。埋土の下位では周囲から流れ込んだ基盤堆積物由来の砂層を挟む腐植を含む泥質砂からなる。この泥質砂層では生物擾乱により初生の堆積構造が不明瞭くなっている。人為的な埋め戻しによる偽礫などは分布せず、自然の營力下で堆積したと推定される。これらの堆積物は洪水堆積物とみられる砂礫で充填された後、再掘削されている。この際、下位の溝状遺構埋土上部まで掘削されている。この溝状遺構埋土の下部堆積物は周囲からの流れ込みなどによって形成された腐植質土壤からなるが、中・上部は人為的な營力により形成されたとみられる偽礫からなる。

**SI06** 建物構築時の人為的營力により生じた堆積物が最下層にみられる。発掘調査断面図の10層に該当する(第53・54図)。この最下層には5層由來の泥質砂の偽礫が混じる腐植質砂質泥からなる。上部には炭片が多く混じり、上層とは堆積物の密度が異なり、著しく締まるため、住居の床面に相当するものと考えられる。この硬化した床面の上部には母材の異なる偽礫からなる堆積物が厚く堆積しているため、遺構は人為的に埋め戻されていすることが窺える。

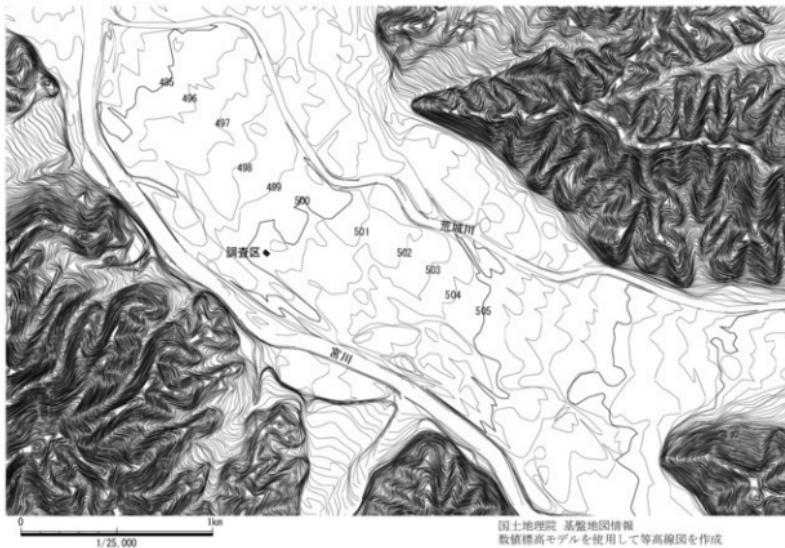


第54図 第33次調査区の南壁土層断面図

## 第5節 まとめ

**地形と遺跡の成り立ち** 上町遺跡一帯は、宮川中流部河岸段丘台地の下位段丘に位置する（岐阜県 2005）。この宮川の形成した段丘は、約 1 万数千年前に離水した最低位段丘面に相当する可能性がある（跡津川断層発掘調査団 1986）。下位段丘が離水して形成された時期については不明である。しかし、上町遺跡内では弥生時代末から古墳時代初頭の方形周溝墓の埋土が黒褐色土を呈していること（古川町教育委員会 1991）から、少なくとも当該時期には土壤が堆積する環境が整っていたのであろう。また、地山層に当たる第IV・V 層の土質は、IV 層の砂質と第V 層の疊層という相違がある。第V 層の疊が堆積する土質からは、破壊堆積物などのような洪水堆積物が時折流入する氾濫原の堆積環境であったことが推定される。さらに、上層の第IV 層ほど堆積物の粒径が細粒化することから、堆積の進行に伴って氾濫の影響が小さくなり、最終的には離水して土壤生成が進行する地域へ変化したものと推定できる。

一方、第 30 次・33 次調査区近辺では不連続な微高地が分布しているという特徴がある（第 55 図）。調査区の北側と荒城川沿いの微高地との間には一段低くなった区画も存在する。これらは宮川と荒城川の分流路の活動によって形成された微高地の可能性があり、上町遺跡内ではこれら微高地上に遺構が形成されている可能性がある。このような地形条件を踏まえると、第IV・V 層は、荒城川ないしその分流路からの氾濫堆積物に由来する可能性が高い。宮川の支流荒城川が現在の流路に落ち着いて氾濫の影響を受けなくなり、土壤生成が進行する過程において弥生時代末頃に人々の生活が営まれるよ



第 55 図 調査区周辺の等高線図

うになったのであろう。

**遺構埋土の堆積過程と要因** 第33次調査区における安定した土層堆積の状況から、古墳時代に属する遺構は、第III b層の上面から掘り込まれていることを確認した。このため、遺構は第IV・V層の河川氾濫堆積後の土壤生成が進行する時期に構築されたと想定できた。

第III b層から同様に掘り込まれる遺構でも、自然埋没したSD05等と人为的に埋め戻されたSI06等との2種類がある。遺構埋土の相違は、遺構の時期と性格に直結する可能性が高い。堅穴建物等造り替えが伴っていたものは人为的に埋められ、溝のように機能していた遺構であれば自然埋没していったのであろう。また、発掘調査により時期が明らかな古墳時代初頭のSD05と古墳時代後期のSI06の時期差も埋土が異なる理由の一つと考えられる。なお、SD05では遺構埋土の洪水堆積物と考えられる土層を介在し、それらを再掘削して遺構を再構築している状況も確認できる。このような洪水堆積物が介在する状況からは、人々が生活するようになってからも洪水等の被害を受けていたものと想定される。

第33次調査区では古墳時代から古代までに堆積したと考えられる第III層の直上で、氾濫堆積物であろう第II b層の泥質砂・砂層が覆うように堆積している。第33次調査地点では古代以降の生活の痕跡が認めなくなるが、これは付近一帯の地下水位が高くなり、氾濫など洪水を頻繁に受ける不安定な土地へと変化したことが関係している可能性があろう。

以上、遺構埋土の堆積過程の相違は、構築の時期や性格の差を反映している可能性が高いことを述べた。今後は、遺跡全体で遺構埋土のあり方と出土遺物の年代観等から発掘調査で得られる時期と比較し、さらに遺跡の立地環境と詳細な年代毎の地形発達過程について検討する必要がある。



写真1 第30次調査区 土層堆積の分層及び撮影



写真2 第30次調査区 土層堆積の検討



写真3 第33次調査区 土層堆積の検討



写真4 第33次調査区 土層堆積の採取

## 第5章 総括

### 第1節 出土遺物の検討

#### (1) 出土遺物の編年的位置付け

ここでは本調査区出土遺物の編年的位置付けを行っていく。その際、第13表を参照とする（片山2016）。第13表は東海諸窯の編年を対応させたもので、これを基に本遺跡出土の遺物を対応させた。本遺跡の編年は河合英夫氏によって行われており（上町遺跡C地点発掘調査団1989、古川町史編纂室2015）、本書も河合氏の編年を参照し、上町遺跡の編年案を提示する。また、第56図は飛騨と東海諸窯の位置関係を示し、飛騨の生産地を仮に飛騨窯跡群と仮称している。現在のところ、飛騨地域の生産地やその特徴等は良く分かっていない。

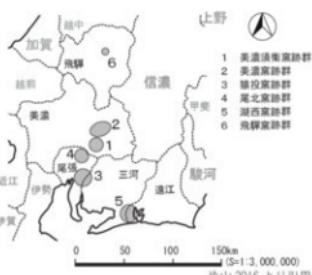
**I期** 第29・37次調査区において赤彩土器が出土している。第29次調査区ではSI01、第37調査区では不明2・3の各1点ずつの計3点である。また、遺物は出土していないが、第33次調査区ではSD05が方形周溝墓の可能性を指摘されており、本遺跡ではD地点の方形周溝墓に次いで2例目になる可能性がある。建物としてはC地点、第29次調査区のSI01が本時期になる可能性がある。時期は向町地点（飛騨市教委2013）から弥生後期末から古墳前期と推定する。

**II期** 上町1989のI・II期に相当する。須恵器環IIが主体の時期である。本調査では確認されていないが、C・D・栗原センター・向町・トヨタ・氷見地點において確認されている。時期は6世紀中葉から後葉と推定する。

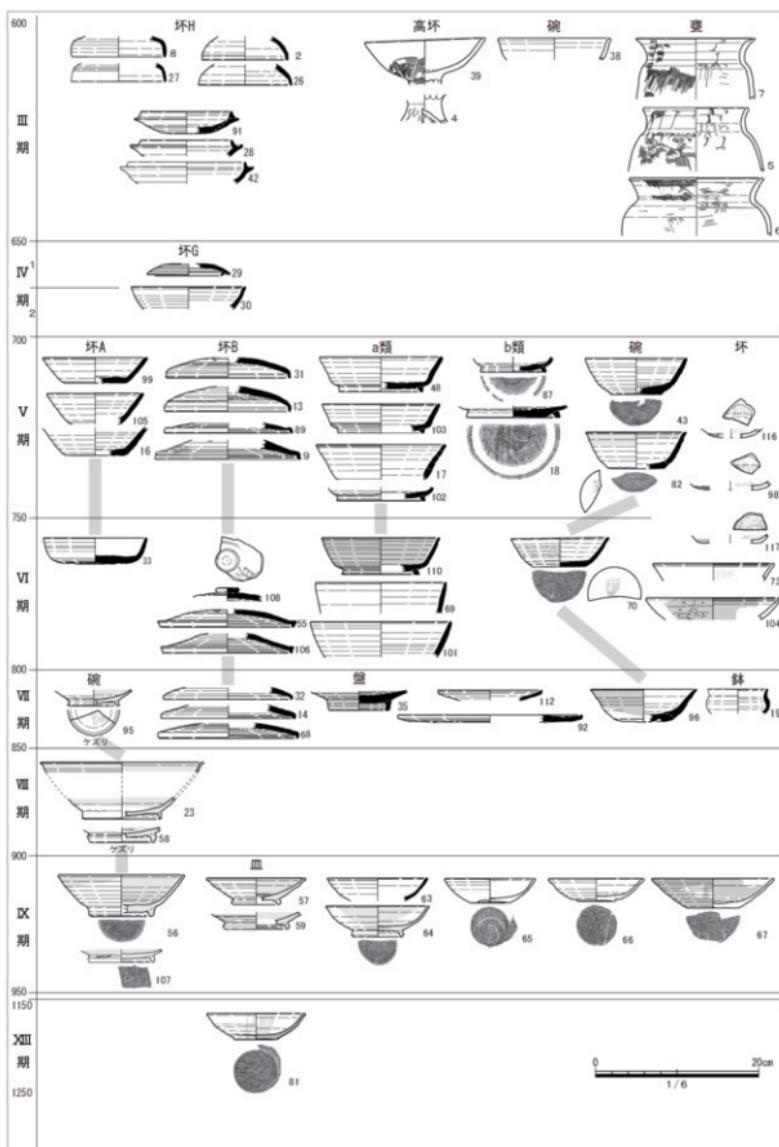
**III期** 上町1989のIII・IV期に相当する。須恵器環IIが主体で、環Gが出現する以前の時期である。環II蓋は凹線を有するものと有しないものがある。土師器では高环・碗・甕等がみられる。第33次調査区の他、C・D・栗原センター・向町・トヨタ・氷見地點において確認されている。時期は7世紀前葉から中葉と推定する。

**IV期** 上町1989のV期に相当する。本時期は2段階に分かれる事を想定している。1段階は須恵器環IIは残り、新規に環Gが出現する時期である。2段階は須恵器環IIが消滅し、環Gと新規に環Bが出現する時期である。本調査では不明瞭であることから、細分はできない。他の地区では確認されている。時期は7世紀中葉から後葉とし、1段階を7世紀中葉、2段階を7世紀後葉と推定する。

**V期** 上町1989のVI・VII期とVIII期の一部に相当する。環Bが主体となり、環A・環B身の体部の傾きは大きく、器高は低い。底部切り離しは環Aがヘラ切り、碗が糸切りである。環B身は2種類に分類でき、仮に底部の全面にロクロケズリを施すものをa類、底部の中央を糸切りのまま残し、底部縁辺にロクロケズリを施すものをb類とする。環B蓋・身a類はロクロケズリのため不明である。碗は腰部が張ることを特徴とし、概ね黄橙色で、灰色は少ない。また、碗は墨書や赤彩等他とは異なり、特殊なものと考えられる。土師器では暗文土器・甕がみられ、暗文土器は小片のため、時期をV・VI期とした。甕は長



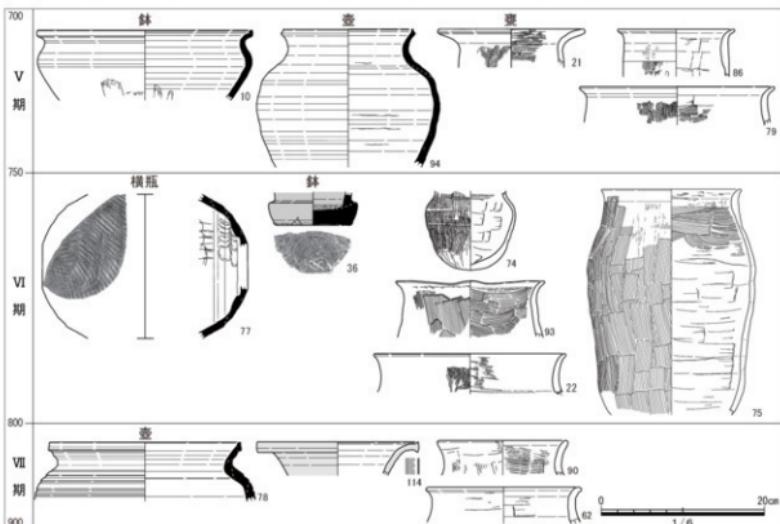
第56図 燃物生産地分布図



第57図 出土遺物の編年図(1)

第13表 東海諸窯の編年と上町遺跡の編年対応表

構成 項目	年代	後醍醐跡群		湖西窯跡群		美濃須南跡群		美濃窯跡群		上町遺跡と本郷遺跡 出土遺物の対比	
		小窯	大窯	小窯	大窯	小窯	大窯	小窯	大窯	上町遺跡	本郷遺跡
(3-4)											
須志器	SC前葉	第1小窯	(2)	第1小窯	高瀬11	I	(*)	II			
	SC中葉	第2小窯	高瀬11	第3小窯	東山40						
	SC後葉	第4小窯	城山2	第5小窯	城山2						
	6C前葉	第6小窯	城山11	第7小窯	城山11						
	6C中葉	第8小窯	高瀬1	第9小窯	高瀬1						
	6C後葉	第10小窯	高瀬1	第11小窯	高瀬1						
	7C前葉	第12小窯	高瀬1	第13小窯	高瀬1						
	7C中葉	第14小窯	高瀬1	第15小窯	高瀬1						
	7C後葉	第16小窯	高瀬1	第17小窯	高瀬1						
	8C前葉	第18小窯	高瀬17	第19小窯	高瀬17						
	8C中葉	第20小窯	高瀬17	第21小窯	高瀬17						
	8C後葉	第22小窯	高瀬22	第23小窯	高瀬22						
須志器・三足點焰器	9C前葉	第24小窯	折戸10	第25小窯	井上87	V					
	9C中葉	第26小窯	高瀬14	第27小窯	高瀬14	VI					
	9C後葉	第28小窯	高瀬90	第29小窯	高瀬90	VII					
灰陶・輪形器	10C前葉	第30小窯	折戸53	第31小窯	高瀬25						
	10C中葉	第32小窯	高瀬72	第33小窯	高瀬27						
	10C後葉	第34小窯	百代9	第35小窯	百代9						
山本器	11C前葉	第36小窯	高瀬1	第37小窯	高瀬1						
	11C中葉	第38小窯	高瀬1	第39小窯	高瀬1						
	11C後葉	第40小窯	高瀬1	第41小窯	高瀬1						
	12世紀前半	第42式		第43式							
	12世紀後半	第44式		第45式							
	13世紀前半	第46式		第47式							
	13世紀後半	第48式		第49式							
	14世紀前半	第50式		第51式							
	14世紀後半	第52式		第53式							
	15世紀前半	第54式		第55式							
	15世紀後半	第56式		第57式							
片山2016を基に、 上町C地点1989・古川町2015 を引用し作成											



第58図 出土遺物の編年図(2)

胴で、胴部が寸胴、口縁部がくの字状に屈曲する。ハケメは細かく丁寧に施される。時期は8世紀前半と推定する。

**V期** 上町1989のV期に相当する。須恵器壺A・壺B・碗と土師器壺・甕の器種構成はV期と同様である。壺A・壺B身の体部の傾きは小さくなる。底部の切り離しは壺Aがヘラ切り、碗が糸切りである。碗は体部が直線的で、体部の傾きが大きくなる。土師器甕は口縁部が緩やかに外湾する。ハケメはやや粗雑になる。本時期から暗赤褐色釉の須恵器が確認できる。時期は8世紀後半と推定する。

**VII期** 本遺跡の中でD・栗原センター・向町地点のみ確認でき、本調査では第30・37次調査区において確認できる。VI期までの器種構成は崩れ、新規に灰釉陶器が入る。須恵器は壺B・盤・碗・暗赤褐色釉、土師器は甕である。壺A・壺B身は掲載していないが、小片のため実測できないことと、数量が減少しているためと考えられる。壺B蓋は口縁部が短く内湾し、屈曲部と端部は丸くなる。土師器甕は口縁部が緩やかに外湾し、器壁は厚くなる。調整は粗雑化する。灰釉陶器は高台が方形を呈し、底部の調整はロクロケズリを施す。時期は9世紀前半で、灰釉陶器は本時期の後半に位置づけられ、2段階に分かれている。しかし、他の器種では2時期に分けることは困難なため、現状は灰釉陶器のみ後半としておく。

**VIII期** 本遺跡ではVII期と同様の地区で確認できる。出土遺物は減少し、須恵器・土師器はほとんどみられなくなる。出土数量は少量ながら、灰釉陶器が主体となる時期である。高台は三日月状を呈し、底部の調整はロクロケズリを施す。時期は9世紀後半と推定される。

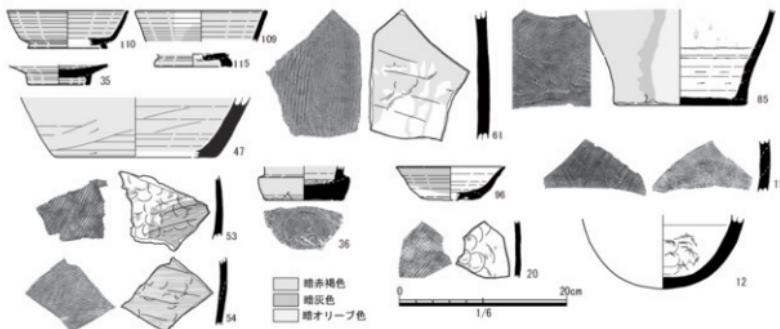
**IX期** 本遺跡ではVIII期と同様の地区で確認できる。VIII期と同様に出土遺物が少なく、灰釉陶器が主体である。高台は三日月状を呈するが、稜はなく丸くなる。底部の切り離しは糸切りのみとなり、調整は行われなくなる。第37次調査区において土師器皿が出土し、口縁部等に煤が付着していることから、灯明皿として使用されていたと考えられる。

この後、本調査では出土遺物を確認できず、D・向町地点において確認できる。本調査では第37次調査区において山茶碗が出土している。X期以降はD・向町地点より、X期が10世紀後葉、XI期が11世紀前葉から中葉、XII期が11世紀後葉から12世紀前半、XIII期が12世紀後半から13世紀後半と設定できる。しかし、これでは不明瞭な部分が多く、資料の増加と飛驒における須恵器生産の様相の解明が急がれる。

## (2) 暗赤褐色と暗灰色の須恵器

本調査では暗赤褐色と暗灰色に発色した釉を14点図示した(第59図)。はじめてこれらの須恵器を見た時に越前焼かと勘違いした。しかし、器形や成形・調整は須恵器であったことからこれらは須恵器であろうと仮定して観察を行った。次に暗赤褐色の他に、暗灰色のものもあることに気づいた。

上町遺跡におけるこれまでの調査ではこのような記載はなかったが、猿投窯跡群の中に類例があることが分かった(齊藤・後藤1995)。齊藤孝正氏は東山50号窯の甕に「鉄分の多い黄土をハケを用いて塗布し、黒褐色・暗赤褐色に発色したものが一部にみられるようになるが、出現時期はまだ明らかではなくさらに遡る可能性も考えられる。」と記述されており、本調査においてみられるものと同様であった。本調査では53・54がハケ塗りの痕跡を明確に確認でき、20・53・61は滴・流状の痕跡を確認できる。齊藤氏が述べられているように、鉄分の多い黄土かどうかは不明であるが、鉄分の多い自然釉(灰釉か)の可能性も考えられる。それは85のように、外から暗赤褐色・暗灰色・暗オリーブ色と3色を確認でき、暗オリーブ色は自然釉であることから、自然釉と類似したものに鉄分を混ぜてハケ塗りしたのではないかと仮説を立てた。暗赤褐色と暗灰色の違いは鉄分量の増減と考えている。



第59図 暗赤褐色と暗灰色の釉

現段階ではこれ以上のことは言えないが、今後分析等を行い明らかにしていきたい。なお、本遺跡では8世紀中葉から後葉にかけて確認されるようになり、9世紀前葉までみられる。この時期は灰釉陶器が確認され始める時期でもあり、関連性が注目される。また、これが猿投窯跡群から持ち込まれたものか、飛驒で作られたものかも明確としたい。

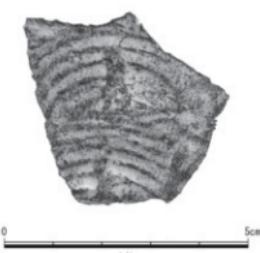
### (3) 須恵器胎土の混和材

須恵器の胎土の中には長石・石英・雲母や海綿状骨針等、採掘した場所の粘土の特徴がみられる。第37次調査区では胎土の中に土師器片(12)と白い繊維状(108)のものを確認した。これらは採掘した粘土の1次的なものではなく、2次的に混入されたものとして、ここでは混和材とした。混和材は胎土の強度・耐久性を向上させる役割をもつ。以前、筆者は窯跡研究会の窯跡を復元し焼成実験に立ち会う機会があり、そこでは窯壁を構築する際の粘土の中に一度焼成された粘土塊を混入させていた。これは現在の耐火煉瓦を作る際と同じ方法で、シャモットと呼ばれている。

第37次調査区では甕の胎土の中に一度焼成した土師器片を混入させ、耐火煉瓦のシャモットと同じ役割と考えられる。写真図版6に混入された土師器片を掲載した。のことから、古代から焼物の耐火性を高める工夫が行われていたと分かる。また、白い繊維状のものはこれと同様か、異なる目的・役割をもつと考えられるが、今後資料の増加を待ちたい。

### (4) 甕の成形痕

須恵器の甕は通常タタキ成形が施される。本遺跡では外面に平行タタキと格子目タタキ、内面に同心円文当具の痕跡を確認できる。しかし、第37次調査区の遺構外では1点のみ同心円文当具とは異なる痕跡を残すものを確認した(第60図)。紙数の都合上、本文では取り上げることができなかつたので、ここで取り上げる。以前、筆者は富山県富山市今市遺跡の報告の中に同様の痕跡を8点確認している(富山市教委2013)。その中で、筆者は「肋骨状当具」と呼称したが、本書において「葉脈状当具」



第60図 葉脈状当具痕

と名を改めることとする。葉脈状当具とは字のとおりで、同心円文の中心に軸が生じるものである。今市遺跡の例もそうであったように、本遺跡においても上半は確認できるが、下半は不明瞭であった。富山市の例では9世紀中葉から10世紀前葉と推定していたが、本遺跡では破片のみであることから詳細な時期は不明であるが、8世紀から10世紀の間と考えておきたい。

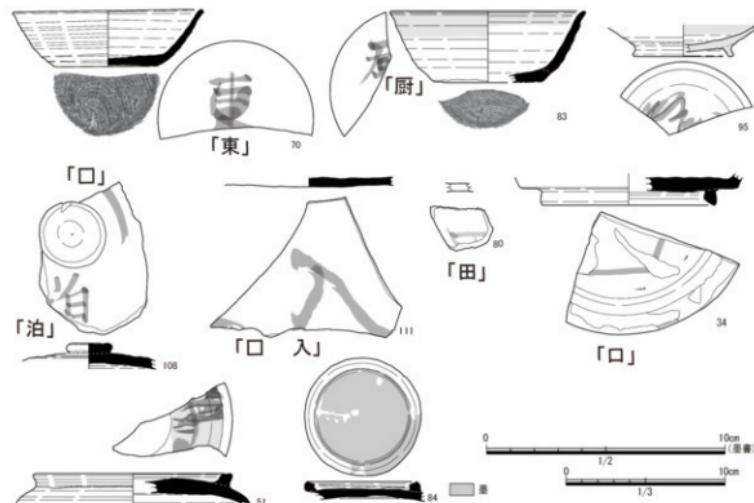
葉脈状当具は今回確認できたものを合わせて9例目となった。現在は古代の越中国と飛驥国で確認できており、両国間での交流を示唆する資料である。このことが製品の流通なのか、工人の移動なのかも気になるところである。今後も類例を増やしていき、葉脈状当具について解明していきたい。

#### (5) 墨書土器の検討

上町遺跡では墨書土器が多数出土しており、本調査においても第61図のとおり7点出土した。判読困難な墨書が多く、推測がほとんどである。また、墨書に関連する資料として51・84の硯を取り上げた。本調査では円面硯や風字硯等の本来硯として作られたものではなく、壺B身の底部を転用した転用硯が2点出土している。

第62図では判読した文字を示した。70は「東」、83は「厨」、95は草書で判読不可能、108は「泊口」、111は「口入」、80は「田」、34は「口」と判読した。注目すべき文字は83「厨」である。「厨」は字の如く、厨房施設を指し、食事に関する文字と推測される。また、83は口縁部内外面に赤彩を施しており、この碗には何らかの特別な意味をもつと考えられる。

以上、既述したように上町遺跡では墨書土器と硯が多数出土していることからも識字層の存在を窺わせ、そこから官衙との関連が想定される。上町遺跡がこれからの継続的な調査・研究により、飛驥国の中でどのような位置関係にあったのか、解明されることを期待したい。



第61図 上町遺跡と墨書き土器

## 第2節 遺跡の様相

飛騨市古川町上町一帯に所在する上町遺跡では、国道41号建設に伴う発掘調査を皮切りに、1987(昭和62)年以来継続して発掘調査が実施されてきた。その成果はこれまで報告書で公表されている(飛騨市教委2013ほか)。現状では宮川右岸の南北約1.5km、東西約0.5kmの範囲に及び(第1図)、飛騨地域では高山市野内遺跡と並んで広範囲に及ぶ古代の遺跡と理解される。

調査面積は合計18,000m<sup>2</sup>に及び、調査によって6期にわたる画期を確認している(河合2013・2015)。ここでは、今般の成果を現段階での上町遺跡の変遷と照らし合わせ、総括としたい。

第1の画期は、弥生時代から古墳時代にかけての転換期である。D地点などで、方形周溝墓を伴う集落を確認する。集落は短期間で廃絶したものとみられている。当該画期に関する遺構として、33次調査において方形周溝墓の可能性があるSD05を検出した。北東隅の屈曲箇部分から北側辺を確認し、北側溝の中央は浅くなる。北西隅は切れる形状であったと想定している。上町遺跡D地点では一辺の中央が切れる形状の、古墳時代初頭の方形周溝墓を確認しており、上町遺跡では2例目の確認となる。しかし、SD5については全景を確認していない。隣接地での調査の進展を待ち、遺構の形状や遺跡の性格を再検討する必要がある。なお、第4章で述べたように、宮川が現在の河道に落ち置いて上町遺跡周辺が離水したこと、当該画期へ与えた影響は大きかったものと推測される。

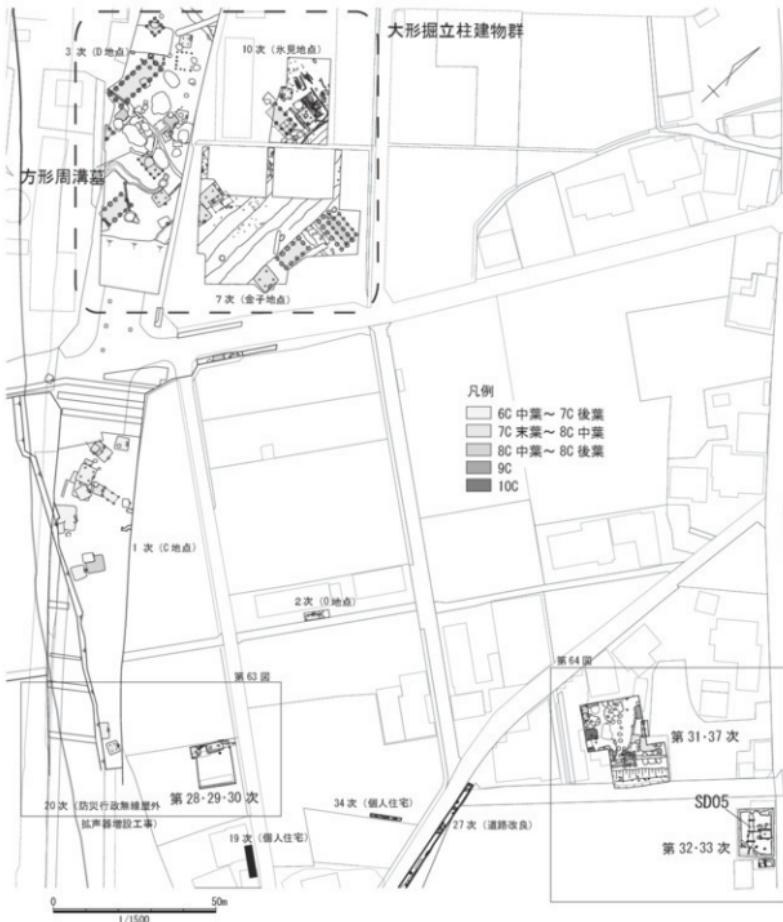
第2の画期は、6世紀中葉から後葉にかけてである。7世紀中葉まで継続する。この時期から成立した新たな集落はしだいに堅穴住居が広範囲に点在し、最終的に小規模分散化していく傾向がみられる。当該画期に関する遺構としては、第33次調査においてSI06を確認した。このSI06はSD05を切る。SD05が方形周溝墓であることを前提とすると、墓域から集落域といった土地利用の変遷が看取される。ここからは、これまでの調査で明らかになっているとおり、弥生時代から古墳時代の転換期に構築された集落と6世紀中葉以降の集落との間に、隔絶があったものと理解することができる。また、第37次調査では6世紀代の遺構を確認していない。37次調査区の東辺には段丘の落ち込みがあるため、段丘面の違いが遺構構築時期の違いを示す可能性もある。しかし、C地点調査区の東端の段丘端部では当該期の堅穴建物を確認しており、周辺は未調査区が広がるため、これについては今後の調査進展を待って検討したい。

第3の画期は、7世紀末葉から8世紀初頭である。この時期には遺構数が飛躍的に増加し、D地点・水見地点・金子地点に大型の掘立柱建物が出現する(第62図)。掘立柱建物群の特徴としては、方位を正方に揃え、建物間の柱筋も揃え、建物や区画施設の距離も完数尺で揃えることなどが挙げられる。このため、高い計画性をもって複数の建物を配置したものと考えられた。これらの遺構群は、飛騨国荒城郡衙(評衡)に関わる中枢施設であった可能性が想定されている。また、この時期にはD地点から向町地点にかけて古町廃寺跡、栗原神社周辺で上町廃寺跡、高山市国府町境の荒城川傍で塔ノ腰廃寺跡に関わる瓦片が出土しており、郡衙周辺には3ヶ寺の古代寺院が建立されたものと考えられる。

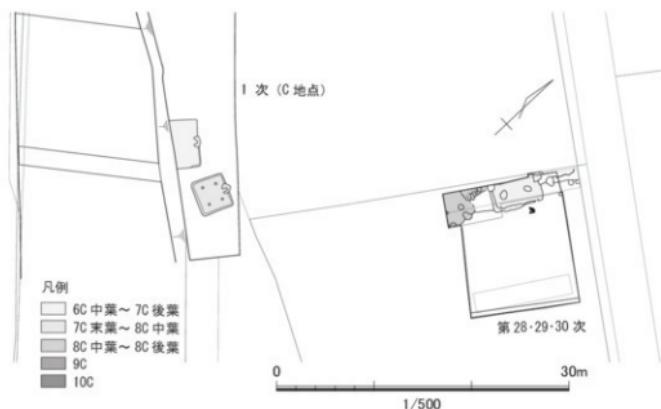
当該時期には第29・30次調査において、SI02を確認している。約30m離れたC地点やO地点でも堅穴建物跡を確認しており、郡衙周辺に集住していた集落であったものと想定される。一方、C地点の調査範囲の中央部や、第29・30次調査の中央より東側のように、遺構の空白区域もある。ここからは、上町遺跡の集落を考える時、ある程度の単位が存在していたことも想定しておく必要があろう。

第4の画期は、8世紀後半頃である。この頃には、7世紀末葉以来の集落が途絶する地点が目立ち、

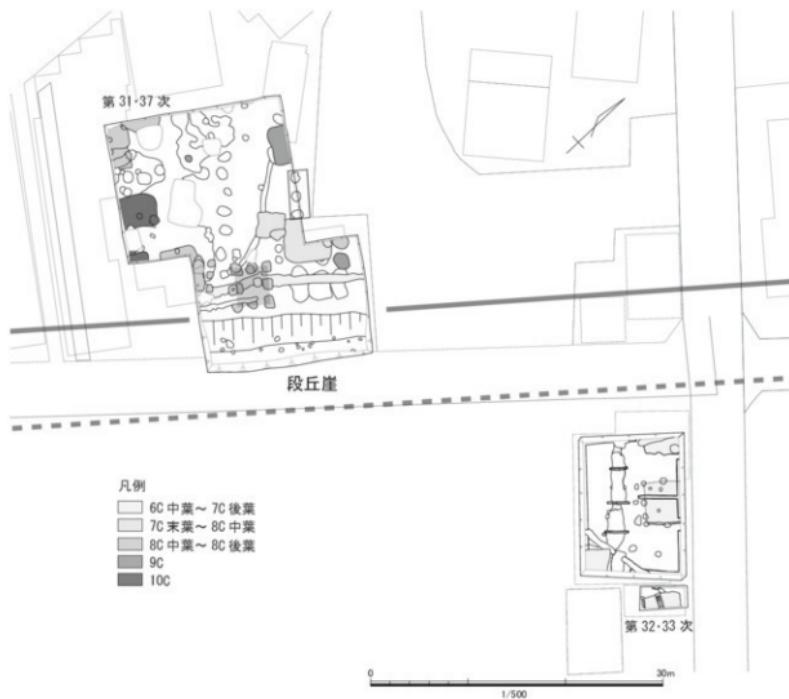
集落規模の縮小化が確認できる。この時点で7世紀末葉から8世紀初頭以来の郡衙を含む遺跡は徐々に衰退したものと考えられ、律令期の衰退というイメージで捉えられている。当該画期の遺構としては、第29・30次調査のSI03・04、第37次調査のSI01・03・04・24、SB92などが挙げられる（第63・64図）。第37次調査では、当該画期の堅穴建物とともに墨書き土器が出土することにも注意したい。そもそも出土文字資料は、識字層に関わりのあった土地であったことを示すものである。このため、郡衙関連遺跡とされる上町遺跡においても多く確認されている。第37次調査区は、律令衰退期に郡衙に関連



第62図 上町遺跡遺構配置図



第 63 図 C 地点と第 28 ~ 30 次調査区の遺構変遷図



第 64 図 第 32-33 次調査区と第 31-37 次調査区の遺構変遷図

第14表 上町遺跡の存続期間と今回の調査区の盛衰表

地点名	3世紀	4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀
C				---	---	---				
D		---		---	---	---	---	---	---	---
O						---				
栗原				---	---	---	---			
向町	---			---	---	---	---	---	---	
トヨタ				---	---	---				
金子				---	---	---				
氷見	---			---	---	---				
29・30				---	---	---				
33	---			---	---					
37						---	---	---		

する人々の集落であった可能性を指摘しておきたい。

第5の画期は、9世紀中葉から10世紀中葉である。これらの集落はD地点・栗原センター地点・向町地点に限られ、7・8世紀以来の集落よりも縮小化している様子をみてとれる。この頃の集落は10世紀後半に急速に途絶したものと考えられている。当該画期の遺構として、第37次調査において黒瓦90号窯式期の灰釉陶器が出土したSI23がある。しかし、遺構の密度は確実に薄くなっている、また、それ以降の遺構も見出しがない。これまでの指摘にあるように、集落の縮小化が看取される。

第6の画期は、11世紀後半頃である。これらの集落もD地点・向町地点・トヨタ地点に限られ、全体的な様相の把握は難しい。しかし、向町地点において白磁の出土や上幅4mの箱堀状の3号溝状遺構が認められることには注目しておく必要がある。当該画期の遺構としては、第37次調査で山茶碗が出土しているが、稀薄であることには変わりなかった。

以上、これまでの調査知見と今回報告の遺構群の時期的な照合を行った（第14表）。広大な遺跡範囲からすると、狭小な調査面積ではあったが、特に2点について強調しておきたい。すなわち、第33次調査で方形周溝墓SD05を切って竪穴建物SI06を構築していることから土地利用の変化を想定できること、第37次調査で8世紀後半の竪穴建物群と墨書き土器の出土から律令衰退期に官衙に関わった人々の集落であったと想定できることである。

上町遺跡については、現在道路改良に伴う発掘調査が継続中である。また個人住宅等に伴う試掘確認調査も随時実施されており、今後は詳細分布調査の報告書も計画している。今後も小面積の調査を含め継続して調査区域の間隙を埋め、今回得られた知見も検証しつつ遺跡全体の理解に一歩ずつ近づく必要がある。

## 引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2010 『愛知県史』(史料編4 考古4 飛鳥～平安) 愛知県
- 跡津川断層発掘調査団 1986 「1982年跡津川断層（野首地区）トレンチ調査」『活断層研究』3
- 大阪府立近づ飛鳥博物館 2006 『年代のものさし』
- 小島幸男編 1987 『図説飛騨の歴史』岐阜県の歴史シリーズ(6) 株式会社郷土出版社
- 尾野善裕 1999 「東濃窯灰釉陶器編年小考」『岐阜史学』第96号 岐阜史学会
- 片山博道 2013 「第V章第2節(3)S101出土土師器甕の当具」『富山市今市遺跡発掘調査報告書－八幡小学校体育館改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告－』富山市埋蔵文化財調査報告54 富山市教育委員会
- 片山博道 2016 「第IV章第2節遺物の様相」『岐阜県関市笠屋石塚遺跡－クスリのアオキ鉢物師屋店建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告－』株式会社クスリのアオキ
- 河合英夫 2013 「第4章総括」『上町遺跡向町地点』飛騨市文化財調査報告書第6集 飛騨市教育委員会
- 河合英夫 2015 「第1部第4章遺跡からみた飛騨古川の古代」『飛騨古川歴史をみつめて』飛騨市
- 河合村役場 1990 『飛騨河合村誌』通史編全
- 上町C地点遺跡発掘調査団 1989 『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡C地点発掘調査報告書』岐阜県  
吉城郡古川町教育委員会
- 上町C地点遺跡発掘調査団 1991 『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡D地点発掘調査報告書』岐阜県  
吉城郡古川町教育委員会
- 上町遺跡トヨタ地点・0地点・栗原センター地点発掘調査団 1994 『上町遺跡トヨタ地点・0地点・  
栗原センター地点発掘調査報告書』古川町埋蔵文化財調査報告第4集 岐阜県古川町教育委員会
- 上町遺跡金子地点・水見地点発掘調査団 2001 『岐阜県吉城郡古川町 上町遺跡C地点発掘調査報  
告書』古川町埋蔵文化財調査報告第6集 古川町教育委員会
- 岐阜県 2003 『岐阜県史』考古資料
- 岐阜県 2005 『岐阜県土地分類基本調査「白木峰・飛騨古川」』
- 岐阜県文化財保護センター 2012 『野内遺跡C地区』岐阜県文化財保護センター調査報告書 第122集
- 建設省・財団法人岐阜県文化財保護センター 1993 『国道41号線改良工事に伴う発掘調査報告書』
- 国府町史刊行委員会 2007 『国府町史』考古・指定文化財編
- 国府町史刊行委員会 2011 『国府町史』自然編
- 小瀬忠司 2011 「飛騨の須恵器と灰釉陶器」『研究事業報告』(平成22年度版)岐阜県ミュージアム飛騨  
齊藤孝正・後藤建一 1995 『須恵器集成図録』第3巻 東日本編I 雄山閣出版株式会社
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2006 『西ヶ洞廃寺跡・中野山越遺跡・中野大洞  
平遺跡・大洞平5号古墳』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 第98集
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007 『中野大洞平遺跡II』岐阜県教育文化財団  
文化財保護センター調査報告書 第107集
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2009 『野内遺跡B地区』岐阜県教育文化財団文  
化財保護センター調査報告書 第111集
- 財団法人岐阜県文化財保護センター 2002 『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』岐阜県文化財保護センター  
調査報告書 第74集
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2005 『太江遺跡II』岐阜県教育文化財団文化財

- 保護センター調査報告書 第94集
- 榎山林繼・山岸良二編 2005 『方形周溝墓の今 宇津木向原遺跡発掘40周年記念シンポジウム記念集』雄山閣
- 土本俊和 2011 『棟持柱祖形論』中央公論美術出版
- 東海土器研究会 2000 『須恵器生産の出現から消滅』(猿投窯・湖西窯編年の再構築)
- 中村浩 1981 『和泉陶邑の研究』柏書房
- 中村浩 2001 『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版
- 飛驒市教育委員会 2007 『神岡町史』自然史編
- 飛驒市教育委員会 2013 『上町遺跡向町地点』
- 古川町史編纂室 2015 『飛驒古川 歴史をみつめて』飛驒市
- 増田富士雄・伊勢屋ふじこ 1985 「“逆グレーディング構造”：自然堤防帶における氾濫原洪水堆積物の示相堆積構造」『堆積学研究会報』22・23
- 宮川村誌編纂委員会 1981 『宮川村誌』通史編上
- 山下峰司 1995 「III土器・陶磁器 4灰釉陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 渡辺博人 1998 「美濃須衛窯の須恵器生産－飛鳥・白鳳時代を中心として－」『古代文化』第40卷 第6号 財団法人古代学協会

# 写 真 図 版





上町遺跡遠景（南から）

図版2



第30次 近景（南東から）



第28次 T1 検出（手前SI01）全景（北から）



第28次 T1 検出（手前SI04）全景（南から）



第29次 調査区完掘全景（北から）



第29次 調査区完掘全景（南から）



第28次 T2 検出全景（北から）



第29次 SI01-SK06 完掘、SI01 断面（南から）



第29次 SI02 完掘（南から）



第30次 SI02 検出（北から）



第30次 SI02 完掘（北東から）



第30次 SI02 断面（北から）



第28次 SI02 カマド検出（南から）



第29次 SI02 カマド縦断面上層（東から）

図版 4



第29次 SI02 カマド横断面上層（南から）



第29次 SI02 カマド袖検出（南から）



第29次 SI02 カマド縦断面下層（東から）



第29次 SI02 カマド横断面下層（南から）



第29次 SI02 カマド完掘（南から）



第29次 SI02-P1 断面（南から）



第29次 SI02-P2 断面（南西から）



第29次 SI03 カマド検出（東から）



第29次 SI03 カマド断面（西から）



第29次 SI03 カマド断面（南から）



第29次 SI03 カマド袖検出（南西から）



第29次 SI03 カマド断ち割り（南西から）



第29次 SI03 カマド断ち割り（南から）



第29次 SI03 完掘（南西から）



第29次 SI04 完掘（東から）



第29次 SI04 遺物出土状況（北から）

図版6



第29次 SK06 断面（南から）



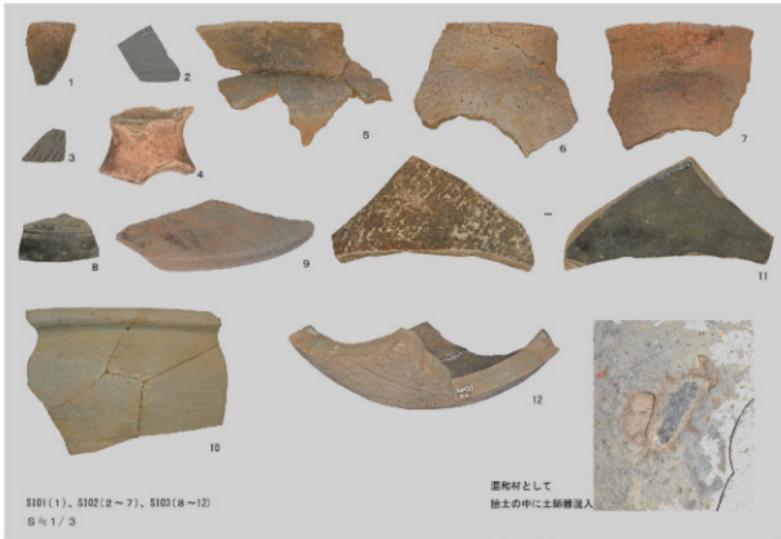
第29次 SK07 断面（西から）



第30次 SX05 梢出（北西から）



第30次 SX05 断ち割り（北から）



第28～30次 出土遺物（1）



第 28 ~ 30 次 出土遺物 (2)



第 32・33 次 出土遺物

図版 8



第33次 近景（南西から）



第32次 調査区検出（SI01・SD02）全景（南西から）



第32次 調査区・SD02断面（南西から）



第33次 SD07検出（東から）



第33次 SD07断面（南から）



第33次 SI02・SD01 検出（南東から）



第33次 SI02 完掘（南西から）



第33次 SI06 検出（北東から）



第33次 SI06 完掘（北東から）



第33次 SI06 断面（東から）



第33次 SI06 断面（西から）



第33次 SI06 遺物出土状況！（北東から）



第33次 SK28 断面（北から）

図版 10



第33次 SB32 全景（南東から）



第33次 SP16 断面（南から）



第33次 SP20 断面（南から）



第33次 SP27 断面（南から）



第33次 SP15 完掘（南東から）



第33次 連結土坑状溝全景（東から）



第33次 SD05 断面 C（南から）



第33次 SD05 断面 D（南から）



第33次 SD05 断面 E（南から）



第33次 SK08 断面（南東から）

図版 12



第 37 次 調査地遺景（南東から）



第 37 次 近景（南から）



第31次 調査区検出全景（東から）



第31次 SP01 柱痕検出（北東から）



第31次 SP03 柱痕検出（北東から）



第37次 SI01-03-04 検出（北東から）



第37次 SI03 遺物出土状況（南から）



第37次 SI16 完掘（北東から）



第37次 SI16 遺物出土状況（南から）



第37次 SI23（西から）

図版 14



第37次 SI24 検出（北西から）



第37次 SI24 カマド検出（北から）



第37次 SI40 検出（南西から）



第37次 SI43 検出（南から）



第37次 SI72 検出（南東から）



第37次 SK42 遺物出土状況（北東から）



第37次 SK42 断面（南から）



第37次 SB92-P56 断面（南西から）



第37次 SB92 全景（北西から）



第37次 SB92 全景（北東から）

图版 16



第31-37次 出土遗物（1）



第31・37次 出土遺物（2）

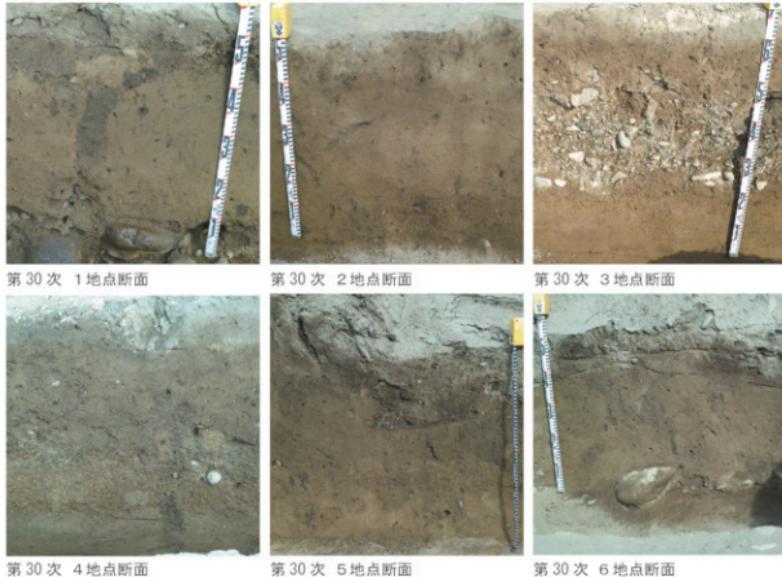
图版 18



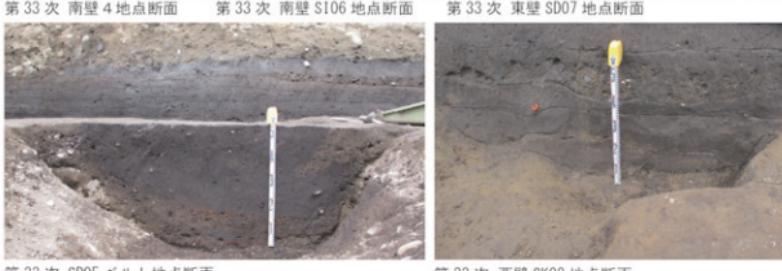
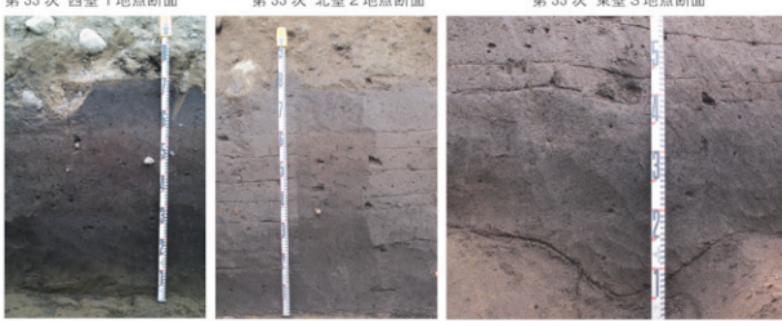
第31·37次 出土遗物（3）



第31・37次 出土遺物 (4)



図版 20



## 報告書抄録

飛騨市文化財調査報告書 第9集

上町遺跡第28～33・37次

個人住宅に伴う発掘調査報告書

発行日 平成28（2016）年3月24日

編集・発行 飛騨市教育委員会

〒509-4292 岐阜県飛騨市古川町本町2番22号

TEL 0577-73-7496 FAX 0577-73-7497

印刷・製本 株式会社 上智 岐阜支店

〒500-8302 岐阜県岐阜市本郷町三丁目16番地  
sinodaビル4階(A)室

TEL/FAX 058-251-2022

URL:<http://www.johchi.co.jp>

毎日印刷社